

佐藤大佐
會立見
少將に
顧

明日順安攻撃明後十四日平壤に向ひ行進斧山店坎北院間に停し十五日の平壤
包圍攻撃に參與せんとす
但順安には歩兵二ヶ中隊を殘置し義州方向に對し警戒せしむ
と云ふ意味の報告を御出しになりました
扱此の舍人場から平壤までは何の位の里程かと申しますと平壤までは先づチヨ
ット日本里程で八里……順安までが調度六里ほど御座います此の報告にもあ
る通り元山支隊は直ぐと平壤に御進みになるのでなく一度順安に出で、順安か
ら平壤に御進みになるので御座いますから將校の御方も兵卒諸君も明日は愈々
順安攻撃と云ふので中々の御勢で御座います
甲順安に何うか敵が居ればよいが……又た成川見たやうに敵が逃げて居つて
は張合がない
乙「メダ」又た逃げて仕舞つたに相違ないよ
甲支那兵だつて順安には居るたる大事な支那街道の事だから順安には迄度居
るよ

門司大隊
義州街道
に出つ

敵の電信
線を切斷

「何うか居つて呉れ、ばよいが成川に着く時も子波江を渡る時も今度こそは
と覺悟しながら一度も敵と云ふ敵に出逢ふた事が無い……順安には是非居ら
ねばならぬが……」
斯様に御勇みに相成り夜が明けて愈々九月の十三日と相成りますと午前四時から
致して行進を御始めになりました前衛は門司少佐の大隊で御座います其の前
衛が支那街道に出られましたのは調度午後一時頃で御座いました
門司少佐「イヤ之れは變だ之れは順安ではない……ハテ……併し電信線がある支
那街道には相違ないが順安より前の方か後の方か……」
と段々土人に就て御調べになりますと何がサテ此處は岩石川店と申す順安から
一里ばかり後の村落で御座まして全く道が間違たので御座いますソコで門司少
佐は遠藤騎兵中尉を順安方向に偵察に御出しに相成又敵の通信を杜絶する爲め
其の平壤から支那本國に通じて居る電信線を御切斷に相成其の歩兵を以て村落
の前後を固めながら本隊の御着になるのを待て居られますと本隊も繼がて御着
になりました其の時調度順安の方に

順安を占領す

居る所に命中致しますと云ふと敵は其一發の命中で以て蛛の子を散すが如く平壤の方に逃げて仕舞ひました斯様な少數の敵に向て大砲を御使ひになる必要はないので御座いますすけれども此の砲聲で以て平壤の敵兵に日本軍が愈々背後に出でたと云ふ事を知らせて其の膽を奪ふと云ふ軍略から來たもので御座います折角一戦争位はある事と御覺悟になつて居りました順安も斯様に可笑しいほど安々と取れまして餘程御失望になつたさうで御座いますすが併し此の順安は敵の兵站部の有る所で御座いますから兵器彈藥其の外糧食などの分捕品があつたばかりでなく二三名の捕虜もあり又た死骸も四五人ほど御座いまして其の爲め少しは愉快を感ぜられたと申す事で御座います夫れに又た其の兵站部に朝鮮燒酎が澤山あつたさうで御座いますから將校兵士殘らず久し振に喉を御鳴しになつたのは格別の御愉快であつたと承ります

諸君如何で御座いますか此の順安は前にも申上りました通り敵に取りましては其の本國に通ずる街道の要地で御座います平壤から僅か五里ほど後に當る要地で御座いまして敵は此處に兵站部を置いて居るほどの處で御座います斯様な肝要な

敵の退路を扼す

所を僅か二三回の射撃で我日本軍に取られると云ふのは實に驚き入つた御話では御座いせんか朔寧支隊に對して麥田江の渡場を扼しないと此の元山支隊に對して子波江の渡場を守ないとか夫れは餘程高尚な議論で彼等支那兵の頭には最初から無い考と致しまして此本國に通ずる要地の順安に二百人足らずの兵を置いたばかりですまして居る了簡となりましては何とも早や申しやうがないので御座います夫れも日本軍が意外に後方に出て來たとしても云ふならば致方も御座いせんが元山支隊が成川邊まで進まれた事は夙に平壤に分つて居る筈で御座います夫れが分つて居れば猶更後方の順安方面には優勢の兵を置いて警戒して居らねばなりませんのに向さう云ふ考のないのみか其の守つて居つた守備兵に致しまして更に力戦すると云ふでもなく二三回射撃された爲め直ぐと平壤の方に退却致して仕舞ふと云ふ誠に憐れ慕ない次第で御座います元來敵の退路を扼すると云ふ味方の軍略は大膽至極の事で御座います若し敵に十分の警戒があれは容易に出來るお話ではないので御座まして此軍略をお定めになつた野津中將閣下も野津中將閣下であれば其の命令を受けて退路を絶たれた佐藤大佐

も佐藤大佐で實に思ひ切つた事をなされたもので御座います然るに佐藤大佐は
實際少しの故障もなく而かも敵が本國に通ずる街道の要地を手に唾するはどの
事もなくお取りになりましたのは實に我日本軍の大仕合せで……平壤の落ちた
のは成程九月の十五十六日に掛けて、御座いますけれども其の實此順安の取れ
た當時に於て平壤は既に落ちて居るのも同然で御座います

第四十六回

僅か五里先の平壤には大敵が居るので御座いますし……又た後方の安州にも
相應の敵が居るので詰り敵と敵との中間に挟まつて居られるので御座いますか
ら何時なん時敵がやつて来るかも知れぬと云ふので平壤の方に對しても又た後
の安州の方に對しても哨兵線を張つて嚴重に警戒を致して居られますと日暮れ
頃平壤の方に對する前哨線に
「氣を注げ——
と云ふ聲が聞えましたッラ敵襲と云ふので各中隊とも直ぐに整列を致されます

と何に敵襲で御座いませうか一人の朝鮮人と味方の兵卒何某君との組打ちで
御座います最初遠藤騎兵中尉が若石川店から此の順安に偵察に来らるゝ途中で
順安には支那兵が居るかど御尋ねになりましたの一人の朝鮮人がイヤ順安に
は支那兵は居りませんと偽言を吐た罪によつて此處に捕へて御座いました所が
只今隙を窺ふて逃げ出しましたから其の監視をして居られた兵卒何某君が跡を
追ッかけてギニーと取押へながら氣を注げ——と呼ばれたので御座いました
此の夜は斯様に嚴重の警戒を加へ扱十四日になりますと愈々平壤に向て前進を
御始めになりましたが麥田江を渡られた牛島大隊並に佐川工兵少佐の工兵大隊
も前夜に此の順安に着かれましたから元山支隊はスツカリ御廻りになつて居る
ので御座います然るに此の順安を御出發になるに付きましては何うしても可な
りの警備兵を御置きにならねばなりません……即ち安州の方から敵が来て此の
元山支隊の後を衝くかも知れませんが其の時は此の順安で御喰ひ止めになら
ねばなりませんッ支隊長佐藤大佐は門司大隊の第七第八即ち寺田中隊神戸
中隊の二ヶ中隊を以て順安の警備隊となし門司少佐に其の指揮を命じ扱平壤へ

は石田大隊を前衛として歩騎砲工衛生の全支隊を率ひて正々堂々と御進みに相成す

前日の午後順安から退却した敵兵は昨夜中には必ず平壤に着いた筈で御座います。即ち平壤に着いて日本軍が愈々我退路に現はれ順安を占領したり此の儘では相成らぬ日本軍は今日にも退路から攻めて来るであらうと云ふ事は此等退却の兵が必ず其の平壤に居る大將に報告したに相違ない其の上電信線も切斷されて平壤と本國との音信も不通となつた事であれば如何に愚鈍なる敵の大將と雖もソは棄置き難し外の方面は兎に角大事な本國との兵站線を日本軍に絶たれては一刻の猶豫も相成らずと今朝當りは平壤から優勢なる敵兵が順安指して来るに相違ないから味方が平壤に向ふ途中で調度其の敵兵に遭遇するは必定なりとすれば先づ今日の遭遇戦は避く可からざるものであると前衛の石田大隊を始め全支隊飽まで覺悟を極め今か〜と思ひながら御進みになつて居ります。すれども一向左様な模様も御座りませす何時しか平壤まで半里と申す坎北院と云ふ所に御着になりました御着きになりますと其の向ふの方に僅かばかりの敵の騎兵が始

坎北院を占領す

めて目につきましたから前衛の歩兵で少しポン〜とおやりになりますと直様平壤の陣地を指して逃げて仕舞ひましたソで此の坎北院並に其の右手に在る一帯の高地を直ぐと占領致されましたが調度此の時が午前十一時半頃で御座います。佐藤大佐は早速其坎北山の上に登つて平壤を御眺めになりますと敵の陣地まで半道足らず即ち一千二百メートルの間は一面に畑で御座いまして敵の陣地がメット高くなつて居りますから誠に能く双眼鏡に映つるので御座います。が朔支隊の方から御眺めになつたのと餘程方角が似て居りますから例の如く向て左に一段高く牡丹臺の圓郭が見え其右の方に三ツの堡壘が赤土の堡壘が並んで見えて居ります。左うして其の後の方に平壤城壁やら乙密臺の櫓が見えて居ります。城壁の上には平江趙などと染め出した大旗を樹て其の外澤山の小旗を樹て居ります。追水砲兵大隊長も其の中隊長方を率ひて坎北山に砲兵陣地を御撰定に相成第五第六中隊が其の命を受けて坎北院の後から坎北山に行かうと致されますと敵の陣地から此の砲兵の隊列が能く見えるもので御座います。から敵は直

佐藤大佐平壤の敵陣を占領す

くど砲撃を始めました敵の堡壘の處にバ——と白烟が見ふると思ふと二十秒も経ぬうちに例の如く

と砲弾が飛んで参り高く頭の上を越してズツと後方に落ちるものあれば又た極めて背く足下に落ちるのも御座います幸ひ味方に一人の怪我も御座いません御座いませぬけれども其のドユル〜と頭の上を飛んで行く時は如何なる勇氣のある人でも決して心持ちのよいものでは御座いませぬソコで其の砲兵の中に頭を下げる方が御座いました所が第五中隊の小隊長山内中尉が大膽で以て「何んだ貴様達は……軍人たるものが敵の砲弾の音などで頭を下げると云ふ事があるか……」

と御叱りになりましたが……あらいもので御座いますモウ之れから頭を下げる方は一人もなく其の敵弾の落ちる所を鼻歌で以て坎北山の陣地に御着になり直ぐと砲列を布て砲撃を始めになりました其の目標は其の三ッ並んで居る赤土の堡壘で御座います今日は固より戦を挑むと云ふ御考では御座いませぬけれども

坎北山
試み砲撃をよ

明十五日の用意に距離を測り又た朔寧支隊其外各方面の味方に元山支隊が急ぐ平壤の背後に追て居ると云ふ事を知せる爲り兩中隊で以てズツ〜と御發になつて居りまするが兩中隊で凡十四五發づゝも御發ちになりませぬと云ふと距離も能く分り又た堡壘の外に現れて居りました敵兵も引込んで仕舞ましたから夫れで砲撃を御止めになりました

佐藤大佐は一方には斯様に砲撃を御命じになり又一方には工兵大隊に命じて掩堡を御築がせに相成り又た或は將校斥候を出して敵地の状況を御探らせになつて居りまするが此の敵地偵察の任務を御授かりになつたのは第十一中隊長金藤大尉と第九中隊の小隊長岩本中尉で御座います佐藤大佐の御考では並院堡壘の左翼即ち朔寧支隊に通じて云へば第五堡壘の左翼から攻撃したいと云ふ御考で御座いますから其の左翼の方が何う云ふ工合になつて居るか偵察して来るやうにと御命じになりました所が岩本中尉が能く偵察して来られまして其の左翼の方には調度よい道が通じて居りまして敵には外に少しの備もないと云ふ報告を致されましたから之れで佐藤大佐の御考が愈々極つたと申す事で御座います是に

金藤大尉
敵地偵察を

八巻中尉
に依り

於きまして佐藤大佐は朔寧支隊長立見少將閣下に宛て
 本日午前十時三十分北山坎北院一帶の高地を占領せり
 我正面の敵は平壤北方並岷に堅固なる三個の堡壘を築き防守を力むるもの
 如し其の隊旗を見るに二は平字一は江字を築きしものを樹つ其の兵力詳か
 ならずとも諸兵連合の敵一千五百人に下らず其の砲數亦三四門に下らざる可
 し敵は午後一時より我工兵の防禦工事に向て砲撃をなせり我砲兵大隊亦坎北
 院東方高地に砲列を布き之に應戦す數分時にして彼沈黙す
 明日は並岷陣地の敵の左翼より攻撃せんとす然るに並岷を奪取するは容易な
 りと雖も平壤本城の攻撃は或は一舉にして抜く能はざる可し
 明日は貴官の運動は何時なるや
 と云ふ報告を御認めに相成り扱之を八巻中尉に持たして御遣はしに相成ま
 した朔寧支隊が何處か其の附近に進んで居られる事は勿論分つて居りまするけ
 れども果して何の邊に居らるゝ事か分りませんから八巻中尉は其の道も能く分
 らん所をたゞつて御出でになるので誠に重い任務で御座います夫れから又佐藤

桑名軍曹

大佐は前哨の石田大隊に朔寧支隊と連絡を取るやうにと御命じになりましたか
 ら石田少佐は幾たびも連絡兵を御出しになりましたすけれども其の任務を果して來
 るものが御座いません然るに二等軍曹桑名一と申す方が非常なる熱心を以て
 朔寧連絡を取つて歸へられました斯る勇士の桑名軍曹は十五日の戦いで戦死致
 されたので御座います
 斯様に大砲の側射散狀偵察朝寧支隊との連絡と云ふ工合にお忙しいのは全く明
 十五日の準備で御座いまして其のお忙しい有様を形容致せば先づ春を迎へる爲
 めの大晦日でも申すやうなわけに御座います併し夕方までには一通り準備も
 出来各隊共夫れく露營に御就きになりましたが何を申すにも敵は僅か宇里ば
 かりの處に陣をお取りになつて居るので御座いますから全支隊皆戰闘露營で御
 座いました前哨には石田少佐が第一大隊の全部と第二大隊の第九中隊を合せ總
 勢一千人の歩兵を率ひて嚴重なる戰闘前哨を御張りになつて居ります此の通り
 のお覺悟なれば敵が何時やつて來ても更に差支は御座いませんけれども併し敵
 は例の引込み思案ばかりで中々やつて來る勇氣は御座りません

ソロに又た門司少佐が其の第八中隊を率ひて順安から御出になりました前にも
伺ひました通り門司少佐は其の第七第八の兩中隊を率ひて順安に止まり此の元
山支隊の後方を警備して居られたので御座いますが一向安州の方から敵がや
て来さうな畏れも見えませんが第七中隊即ち寺田大尉の一中隊だけを順安
に駐り其の第八中隊を引連れて此處に御出になつたので御座います此のタ
マケ中隊で以て順安を御守らせになると云ふのは實に思切つた大膽至極の事
で御座います幸ひ愚鈍なる支那兵の事で安州に居りながら此の順安を日本軍に
取られたと云ふ事を知りませんから……設へ知つて居つても攻めて来る勇氣が
御座いせんから不都合はないやうなもの之れが若し攻めて来るものとすれ
ば如何に寺田中隊が強くても一ヶ中隊では之を喰止められるわけのものでは御
座いせん然るに此の模様では安州の方からは敵が決して来なはと御見切
りになりまして斯様に御取計ひになつたので軍方大膽と云ふよりは飽まで支那
兵を馬鹿にしたものと申す方が適當かと存じます
夫れから又た午前三時頃にはなす入巻歩兵中隊が朔軍支隊から通つて来ら

れました……佐藤大佐の報告を持って朔軍支隊長立見少將閣下に届け又た少將閣
下の返事を持つて歸られたので御座います少將閣下の御返事と申すは
朔軍は貴支隊より先きに攻撃を始む可し朔軍支隊は本夜一時集合 坎北山
の南方即ち貴支隊の前面に在る敵軍の側面を撃たんとす猶詳細は八巻中尉に
申置けり
と云ふ御主意で御座いました其の爲め敵軍攻撃の御打ち合せも斯様に出来まし
た
佐藤大佐最早一點の遺憾なく扱て之れから愈々敵軍攻撃と申す事になりました
が實は之からの戦争よりは之れまでの御準備が戦争に優るほどの事で御座い
まして馬島嶽阿虎飛嶽留雲嶽嶽嶽の峻路暴風暴雨途中の河々での御準備は申
すに及ばず徹夜の行軍もあれば糧食がなく僅かに粟を食ふたり又た一人一日
六合宛のを四合に減食したり夫れは一方ならぬ御難儀で御座います其の上
途中で駄牛馬が澤山斃れましたから小行李と申して彈藥を駄ける牛馬が不足と
なり其の牛馬に駄ける分までも兵卒諸君が銘々に御持ちになつて居ります様な

銀死な秋
死するは
死すは

事であたりまへなれば一人に付いて七十發位御持ちになるので御座いますけれ
ども斯様な次第である爲り一人で百六十發から御持ちになつて居ります夫れで
なくとも小銃其の外相應に重い負擔物が御座います所に九十發も餘計な小銃弾
と御持ちになつては中々堪るわけのものでは御座いません併し夫れよりもマメ
ひさいのは糧食で御座いますモウ此の元山支隊には此の十四日限りで米もなけ
れば粟もなく携行糧として二日分の道明寺精を持つて居らるゝばかりで御座
います二日分と云へば即ち十五十六の二日分で御座いまして十五十六の兩日に
平壤を陥さなければ最早餓えるより外には致方が御座いませんソコで佐藤大佐
は其の事を各隊長に御達しになり各隊長からは又た下士兵卒に至るまで残らず
其の事を御達しに相成ましたが其の御達しの主意を掴んで申しますと
「チア糧食は各自の背負袋に持つて居る二日分の道明寺精より外には少しもな
い十五十六の兩日に平壤を陥せば可し若し此の兩日に陥す事が出来なければ
元山支隊は悉く餓死するばかりだ餓死するのがよいか將た深く決戦して討死
するのがよいか苟くも軍人たるものが餓死したとあつては天下後世の笑とな

るを以て事ろ討死を期して深く決戦するに若す
と御座ります歩兵でも砲兵でも騎兵でも工兵でも元山支隊残らず此の御覺悟で
御座いますから午前の三時四時とならぬうちに各々皆露營の夢を醒して
「チア糧食は各自の背負袋に持つて居る二日分の道明寺精より外には少しもな
い十五十六の兩日に平壤を陥せば可し若し此の兩日に陥す事が出来なければ
元山支隊は悉く餓死するばかりだ餓死するのがよいか將た深く決戦して討死
するのがよいか苟くも軍人たるものが餓死したとあつては天下後世の笑とな
るを以て事ろ討死を期して深く決戦するに若す
と御座ります歩兵でも砲兵でも騎兵でも工兵でも元山支隊残らず此の御覺悟で
御座いますから午前の三時四時とならぬうちに各々皆露營の夢を醒して
「チア糧食は各自の背負袋に持つて居る二日分の道明寺精より外には少しもな
い十五十六の兩日に平壤を陥せば可し若し此の兩日に陥す事が出来なければ
元山支隊は悉く餓死するばかりだ餓死するのがよいか將た深く決戦して討死
するのがよいか苟くも軍人たるものが餓死したとあつては天下後世の笑とな
へになつて居ります
陰曆十五夜の満月は夜來一點の雲なく皎々皓々と照り渡りて四邊白晝の如く其
の月も今や傾きかゝつて夜明けに間のない時佐藤大佐は其の副官にお對ひにな
りまして
「まだ誰も来ないか……最う大方来る時刻だが
と申されますまだ来ぬかとは此の十五日の未明に各隊長が戦闘命令を受けに来
らるゝ筈になつて居りますから斯様に申されたので御座います
山本副官「最う来らるゝ頃で御座いますか

と申して居らるゝ時遙か彼方にド——ン……ド——ン……ド——ンと大砲の音が致します

大佐「ヤッ……船橋里だ……船橋里が始めた



元山支隊の大奮戦

第四十七回

船橋里の砲聲は急々續々に聞えます其處に各隊長が御出でになりました
牛島少佐「正面の大島旅團は始めましたな……随分激戦のやうで御座います
佐藤大佐「ムウ……始めた」
ソコで佐藤大佐は直ぐに攻撃命令を御下しになります其の攻撃命令と申すのは

攻撃命令

一支隊は即時並視の敵を左翼より攻撃せんとす
一石田少佐は第一大隊及び第五中隊を率ひ射撃部隊となり支隊の進出を容易ならしむるを任務とす
一第三大隊長牛島少佐は坎北山の西脚を廻り江東橋店の西方より敵の左翼に迫り敵の第一堡壘を攻撃す可し
但第九中隊は砲兵の右翼に在て掩護射撃をなす可し
一第二大隊(二中隊)は第三大隊に續行す可し
一工兵大隊及び騎兵小隊は砲兵陣地の後方に集合せよ
一砲兵大隊は直ちに射撃を開始す可し其の目標は敵の左翼第一堡壘とす
斯様な御注意で御座います各隊長は此の命令を受けて直ぐと御下りになりました
て前哨大隊長の石田少佐は前哨を御外しになる事が出来ませんから足立參謀が此の命令書を持って行て御渡しになりました凡て斯様な命令書の末尾には隊長の所在を御示しになるのが正式で御座います此の命令書には夫れが御座いません何せ御座いませんかと申しますと全く佐藤大佐が御忘れになつたので御座

第四十七回

います即ち其の末尾に予は何處に在りと云ふ一項を御加へになる事を忘れられたので御座います佐藤大佐は各隊長が其處を御下りになりますと直ぐ其の跡で之に御氣が付さ

「ア、忘れた……此の末項に己れの所在を示すのだつたア最う皆行つて仕舞つたか

と言ひながら向ふを御覽になりますと各隊長皆其山の畔を下りて行かれる所で御座いますソコで大佐は突立ちあがり大音聲を揚げて

「予は砲兵陣地に在るゾ——ッ

と御告げになりました

砲兵大隊では何時でも射撃の出来るやうに夜の明けぬ先きから其の大砲を坎北山の上に御引あげになつて居ります處が此の坎北山は格別高い山では御座いませんけれども岩や石がガラ／＼致して居りまして中々登り悪くい峻しい通で御座いますから彈藥箱や大砲を駄けて居る馬匹が大變に弱まりました第六中隊の第二砲馬の如きは到頭其處に倒れて仕舞ひました最早開戦の時期は眼前に迫つて

居りまするに其の砲馬が倒れたとあつては實に容易ならぬ事で御座います

小隊長「何んだ困るぢやないか……サア早く引ッぱり起せ……早くッ

兵卒「エー此の野郎……斯んな大事な所で倒れやがつて……小隊長殿逆ても起させせん

小隊長「獨りぢやいけん起るものか……サア皆んなで引ッ張り起せサア……

と申されますと其背中の大砲を下ろして今度は四五人も掛り二人は轡を取り二人は尻ッばを持ち一人は其の臀部を靴で蹴りながら聲の調子を合せて

「ヤイトサヤイトサ

と起さうと致されますけれども餘程弱つたものと見なまして中々起さうにも致しません

「仕方がない奴ッぢや……畜生奴

と誰れも彼れも持て餘して居られますと一等卒大平重松氏が

大平一等卒「小隊長殿逆もいけません私が大砲を擔いで登りましよう

小隊長「左うかヨシ／＼貴様なら擔げる……擔げ／＼

大平一等卒
擔ぐ大砲な

と小隊長の命令に大平一等卒鬼をも挫がんばかりの双腕で以てヤーと聲がけ
もせサイト軽々と擔いで五十メートルばかり上の方に運んで参られました總じ
て砲兵には体格が大きく腕力の強い方をおどりになつて居るので……此の東
京市中を運動される兵士諸君を見ましても砲兵の方々は、大抵五尺五寸乃至六尺
五寸七尺もあらずかといふ大男ばかりで御座いまして其のわけを知らない御方
は何せ砲兵に限つてア大男ばかりだらうと不審に思はれる事も御座いませよ
うが全体砲兵は馬を扱つたり又た重い大砲を扱ふ御役目で御座いますから体格
が大きく腕力がないといふと中々勤まるわけのものでは御座いません其の上
野砲は車に載せて四頭の馬に牽かせる仕掛けとなつて居りますけれども山砲は
野砲よりも軽う御座いますから一頭の馬に牽かせたり又た山坂の極く道の悪い
所になりますと云ふと車から外して馬の脊中に嵌ける事も出来ず左うして又
た一時馬が登る事の出来ないやうな場合は人間の力で擔げるやうに出来て居る
ので御座います。が果して實際に斯様な場合となりまして大平一等卒が其功を現
はされたと申すのは誠に感ず可き事と存じます

斯様な御骨折で大隊の大砲が、北山山の砲兵陣地に揃ひますと追水大隊長が其處
に愛つて来られ

「放列」

と云ふ一聲の號令で第六中隊を右に第五中隊を左に山砲十二門をザラーと御列
へになり兩中隊長は並腕の左翼堡壘即ち朝寧支隊に通しての第五堡壘に向ひ一
千七百メートルの照準で以て射撃を御命じになりました第六中隊から先づ例の

「第一砲車ヤー」

の號令でズトンと一發の榴弾を放たれますと之に次いで第二砲車も亦た第五中隊
の各砲車もズトンビュル〜と云ふ工合に射撃を御始めになりました是に於て
愈々元山支隊の開戦と相成りました
射撃部隊となつて居らるゝ石田少佐は第一大隊の全部と第五中隊を合せ小銃
の射撃を御始めになり敵の左翼に廻はるの任務を有つて居らるゝ牛山少佐も既
に運動を御始めになつて居ります此の時調度夜が明けたばかりで敵も我軍の攻
撃に愕きまして其の堡壘から小銃の射撃を始め又た大砲の射撃をも開始致しま

したソコで送こに兵語へいごに申まをす射撃しやげの交換かいかんとなりボン／＼ボン／＼／＼、ボン／＼／＼、ボン／＼／＼、ボン／＼／＼と大砲小銃の響なばかりで御座ございますが敵の砲弾は頻りに我か砲兵陣地の前後に落ちますけれども幸ひ人馬に命中致しませんからマダ少しも怪我は御座ございませんが佐藤大佐は此の時坎北山の下で此の状況を御覽になつて居りましたが敵の一發の小銃弾がビューンと飛んで參つて其の帽子の額に命中しました大佐は彈丸とは御氣付にあらす其の後に居る從卒などが何か過つて石でもブツ付けた事と思はれました後を回首ながら叱るやうに

「誰だ……誰がブツ付けたのだ、と申まをされますと

從卒「イエ私共は何とも致しません

大佐「何ともしない……夫れでも己れの帽子の額に何かカッソとブツ付かつたぞ

從卒「私共は何とも致しません彈丸が中つたのでは御座ございませんか今二三發それ彈丸がビューンと云ふて通りましたから

敵彈佐藤
大佐の軍
帽を被む

大佐「左うか夫れでは彈丸だらうか……彈丸かも知れんぞ

從卒「夫れは彈丸に違ひません

と云ひながら大佐の前面を能く檢しらますと地上に一個の彈丸がコロソと落ちて居ります從卒拾ひ上げ

從卒「彈丸で御座ございます……ソラ之れで御座ございます

大佐「成程敵のそれ彈丸ぢや力も何もなくて中つたのだ

從卒「御運のよい事で御座ございました之れがそれ彈丸でなかつたら大變で御座ございましたのね

大佐「馬鹿を云ふなそれ彈丸でなくても敵の彈丸で己れの額が撃ち貫けるものか何んな彈丸でも皆此の通り彈き返へるのさ

從卒「へー、

扱あつかて又只今も申上まをしました通り攻撃の主點は並ひら視の左翼堡壘で御座ございます即ち朝あ事支隊の方面に通じての第五堡壘で御座ございます石田少佐の五ヶ中隊は其の堡壘の正面に對して射撃部隊となり牛島少佐の三ヶ中隊が江東橋店の西方から其の

左翼を攻撃する、事となつて居ります詰り石田少佐の隊が小銃で以て撃ち付け
た所を牛島少佐の隊が其の左翼から突撃すると云ふ御計畫で御座います
石田少佐の第一中隊と第三中隊は坎北山の前面まで其の第三中隊は義州街道上
の坎北院の前まで其の第四中隊と第五中隊は義州街道上の左手に各隊殆んど一
線に其の位置を御取りになつて居りましたが此處から敵軍までは何様一千二三
百メートルも御座いまして何うも射撃の効力が少いと御認めになりましたから
石田少佐は第四第五の兩中隊を第五中隊長の門司大尉に屬し自から第一第二第
三の三ヶ中隊を率ひてズン／＼御進みに相成第二中隊と第三中隊は江東橋店の
前方に在る高地の後まで第一中隊は義州街道を隔て、右手の高地まで御進みに
相成りましたが其御進みに相成る時敵の第五堡壘から發ち出す大砲や小銃の彈
丸が大分飛んで参りましたけれども皆頭の上を通り越して一ツも命りませんで
御座いました夫れから石田少佐は第二中隊を率ひて其の高地の上に出られます
と第五堡壘が直ぐと右手に第四堡壘が正面に見えて居ります石田少佐は此處で
シツカリ射撃しやうと御決心になりましたが其處に來られたのは第二中隊が

りて第三中隊が一向見えません

石田少佐「副官や々……第三中隊は居らんぢやないか……何うしたのだ

河内副官「來ません第二中隊と一ツしよに來る筈ですが

石田少佐「來る筈だが來て居ない早く呼んで來ないといけん……今の後の高地の
後に居るだろ

河内副官「夫れでは一ツ呼んで來ましよう

と申して後ろに戻られました左うして暫く経つても歸て來られませんが石田
少佐は又たも第一大隊の勇士野々山軍曹を御遣しになりましたが其の内河内副
官が戻つて來られました

河内副官「第三中隊は居りません……最う後の高地の後ろには居りません

石田少佐「居らぬ……夫れはいけん……何うしたのか

河内副官「何うしましたか何處ぞ別の方に参りましたらう
と申して居らるゝ處に野々山軍曹も戻つて來られました

野々山軍曹「大隊長殿……第三中隊は見えません

石田少佐「何處に行つただらうか……モ少し探して見い

ソコで河内副官と野々山軍曹は其の第五堡壘から發ち出す彈丸の中を潜りながら大變御探しになりましたが見えない筈で御座います第三中隊と第一中隊と共に義州街道の右手の高地に上つて居られます其の高地には佐藤大佐の豫備隊であつた所の第九中隊も進んで居られますソコで石田少佐も御安心に相成之れから直ぐと第二中隊に射撃を御命じになりましたが其の右手の高地に居らるゝ第一第三第九の三ヶ中隊も同じく此の第五堡壘に向つて攻撃を御始めになりました即ち四ヶ中隊で以て左右から熾んに射撃を御始めになり敵も亦た之に應じて……而かも第四堡壘までも之に應じて射撃致すので御座いますから夫れは最う猛烈であるのないと申しましてボン／＼／＼／＼位ではなく例のグタ／＼／＼から容易に散らす其處ら一面霧のやうになつて居ります其の中坎北山から發ち出す味方の大砲はピュル／＼……ドシン／＼ピュン／＼と調度團子を重箱の中へ投り込むやうな具合に其の榴彈が一發も過たず悉く其の第五堡壘の中に落ちて

我砲彈一發し過た

破裂致しますから中々堪つたわけのものでは御座いませぬ其の上敵は其の左翼の方から牛島少佐の隊が進むと見まして第五堡壘の兵を割いて其の方に出しましたから第五堡壘は力が弱くて到底抵抗する事が出来ませんソコで敵も見切つたものと見えましてバラ／＼と第四堡壘に逃げ込みます逃げ込みますのが第二中隊即ち石田少佐の居らるゝ所の正面に見えます

石田少佐「ア敵があゝの堡壘に這入る彼れに逃げ込んで仕舞ふ

天野大尉「成程逃げますな

石田少佐「彼の堡壘の奴ツと一しよになつてはいけん一ツしよになつたら跡が面倒だ早く彼の堡壘を突かなくてはいけん

と申されますから第二中隊長天野大尉は直ぐと隊形を御取直しになり

「正面の敵壘に向ひ撃ちかゝれい」と云ふ號令で以て第四堡壘に向ひボン／＼と撃ちながら御進みに相成り敵の射撃の猛烈なるにも構はず二百メートルばかりの距離になりました時其の一ヶ中隊で以て一聲の進撃喇叭を合圖にヤール／＼と銃剣を閃めかして突貫さ

第四十七回



第四堡壘
を取る

れますと云ふと敵も到頭持ち堪らへる事が出来ず其の堡壘を棄て、箕子陵の方
に退却致しました石田少佐は射撃部隊で敵壘に突貫する御任務では御座いませ
んけれども只今申しました通り第五堡壘の敵が此の第四堡壘の中に逃げ込みま
すから其の皆逃げ込んで仕舞はないうちに取つて置かないと後が餘程面倒とな
る假令へ突貫は自分の任務でないとした所が戦争に一番肝腎なものは時機を察
ると云ふ事ぢや此の堡壘を取るには今が一番の時機で此の時機を外したら容易
に取れなくなるかも知れぬ左すれば區々たる任務に拘泥して居るわけには行か
ぬヨシ己れ一番責任を負ふてやるだけやつて見ようと御決心になりました此の
突貫を行はれたので御座いましたが案の如く斯様に見事に取れましたから少佐
の御得意は申すに及ばず天野大尉以下其の堡壘の中で狂するが如く天皇陛下萬
歳を御唱になりました

第五堡壘
を取る

斯様に石田少佐が第四堡壘に突貫されて間もない時で御座ます義州街道の右手
の高地に居られた第一第三第九の三ヶ中隊も第五堡壘に突貫を行はれわけもな
く之を占領して御仕舞になりました此の第五堡壘は牛島少佐が第十第十一第十二

牛島少佐
の奮戦

の三ヶ中隊を率ひて其の左翼から攻撃される筈であつたのに牛島少佐の攻撃を
待たず射撃部隊の方で占領つて御仕舞ひにありましたのは少々變な御話で御座
いまして牛島少佐は何せ早く此の堡壘を攻撃されなかつたかと申しますと牛島
少佐は命令通りに其の三ヶ中隊を率て第五堡壘の左翼に迫る目的で江東橋店西
方の高地からグルツと迂回しつゝ御進みになりますと其の高地の又た一段高い
處に凡そ四五百の敵が據つて居ります此の敵は即ち第五堡壘から出で、參つた
ので御座いまして此の敵を撃ち碎かない限りは第五堡壘の左翼に御迫りになる
事が出来ませんソコで牛島少佐は第十一第十二の兩中隊を一線に展開し第十中
隊を豫備隊として攻撃を御始めになりますと敵も一生懸命となり其の高地の上
から猛烈の射撃を致します加ふならす第五堡壘の敵も之に氣が付まして大砲を
ズドン／＼と撃ちつけますソコで敵の耳を掠める音がシュッブッチュンと響
き其の響きに應じて其處にもバタリ此處にもバタリと御倒れにあるのは誠に悲
慘至極の有様で御座います夫れにも構はず兩中隊は勇氣を鼓して突貫を行はれ
ますと敵も最早支へる事が出来ず退却致しました其の時第十二中隊長品川大尉

の頭部に敵弾が中り其の軍刀を持ちながらバタリと御倒れになりましたから

從卒「中隊長殿……中隊長殿……ヤー頭部で御座いますか

と云ひながらシット抱き起して己れの膝で其の體を支持へ手早く懷中から繃帯用の木綿を取出し……

從卒「ヤー繃帯致しましよ御座を懺かに

品川大尉「何んだ氣を懺かにた、氣は初から懺かだ速く繃帯せい繃帯せぬか……直ぐに又た進むから……

從卒「宜しう御座いますサア……

と申して甲斐々々しく繃帯を致しましたけれども中々出血が止まりませぬ見るまに其の繃帯が眞ッ赤となつて仕舞ひました其處に調度牛島少佐か通りかゝられますと品川大尉此の重傷にも構はず聲を揚げて

「大隊長殿々々々……占領りましたく此の高地は占領りました
牛島少佐其の聲に御氣が付きました

牛島少佐「ヤア——品川大尉負傷か……頭部ムウ——……名譽の負傷だ……其の

牛島少佐
品川大尉
其の負傷を
慰む

負傷で此の高地が占領たのだ名譽々々

品川大尉「此處は取れましたけれどもまだア、彼の高地に敵が居ります早く彼れを御占領にならぬといけません小官も之れから参りましょう

牛島少佐「イヤそんな事はいけん其負傷で戦争が出来るものか……最う此處を取つたのが十分の功勞だ動いてはいけぬ……跡に豫備隊も有るから貴官は決して心配するに及ばん……之から直ぐに又た彼の高地を占領つて仕舞ふから安心されい

と慰めるやうに御諭しになり豫備隊を率ひて其處を御進みになりますと其の途中に鈴木二等軍曹が大腿骨と下腹と二ヶ所に重傷を負ふて半死半生の有様で御座います苦しい息の中に其處を通りかゝつた兵卒を呼んで

軍曹「オイく……

兵卒「軍曹殿負傷されましたか繃帯致しましよるか

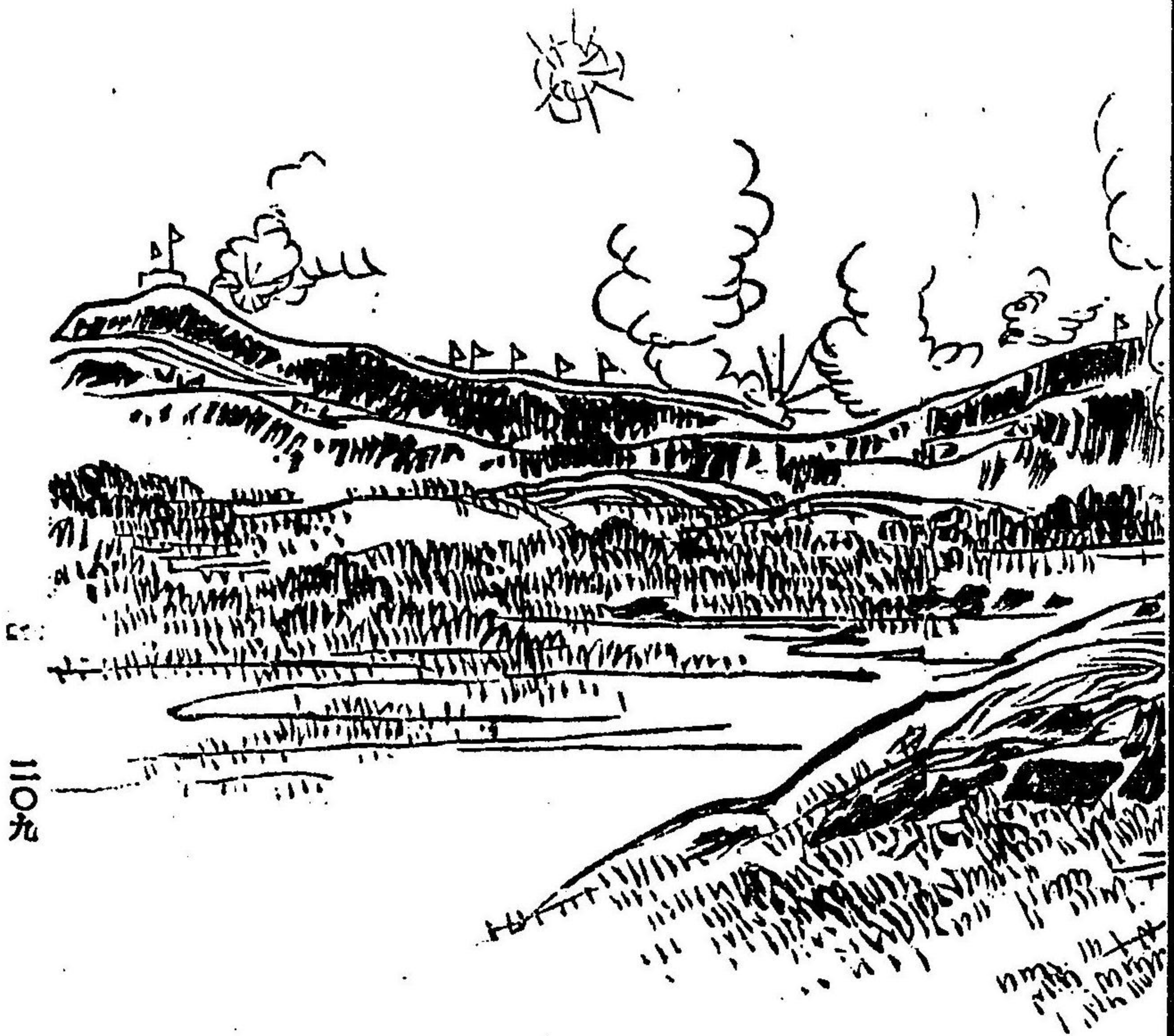
軍曹「ヨ、宜しい繃帯はして貰た……そんな事は構はんでも……ヨ、宜しいン、……夫れよりも己れの彈藥盒の彈藥を貴様モ、持て行けい……己れは逆て

鈴木軍曹
死に願ひ
教へて
れす

もいけん
 兵卒「ハイ宜しう御
 座います
 と申して鈴木軍曹の
 弾薬を取りました抑
 も平日の教育に一旦
 戦場に臨んで戦死者
 又は負傷者があつ
 た時は其の弾薬を取
 った外は兵に渡すと
 云ふ事になつて居り
 ますけれども戦九雨
 飛の中で平日の教育
 通り實行するのは餘



程むづかしい事で御
 座いますか鈴木軍曹
 は自分に負傷して而
 かも息の絶えなく
 なる時まで猶ほ平
 日の教育を忘れず其
 の弾薬を外の兵に渡
 されるとは實に感心
 な御舉動で御座いま
 す牛島少佐歩きなら
 が此の様子を御覽に
 なりまして足立副官
 に對ひ
 「ア、平日の教育と



云ふものは實に恐ろしいものぢや
と御語りになつたと申す事で御座います斯くて牛島少佐は其の任務の通り第五
堡壘の左翼に迫つて之れから突貫を行はふと致されます途端只今伺ひました様に
第一第二第九の三ヶ中隊が此の堡壘を取られましたから牛島少佐は之に遣入り
ずして箕子陵の方に向はれました

お話が少々後に戻り第一第三第九の三ヶ中隊は第五堡壘に第二中隊は第四堡壘
に在て退却の敵兵を追撃致して居られましたたが第二中隊と一ッしよに居らるゝ
石田少佐がフト第三堡壘の方を御覽になりますと第三堡壘の敵がチヨロ〜と
逃げ出して居るのが見えますソコで石田少佐は又たも此機に乗じて突貫すれば
わけもなく取れるに相違ないと御考へに相成り第二中隊に其の事を御命じにな
りますと中隊長天野大尉はすかさず第三堡壘に向つて突貫を行はれました第三堡
壘は朔寧支隊の時伺ひました流水峰の堡壘で御坐いまして即ち第四堡壘の左手
になつて居ります斯様に天野中隊が突貫されますと云ふと調度其の時門司大尉
の第四第五の兩中隊と朔寧支隊の大野大尉と其の正面の方から突貫されました

第三堡壘
を取る

から敵は三面合撃の勢に畏れて右往左往と敗走致しました

門司大尉「少佐殿御目出度……」

石田少佐「ヤー御目出たう愉快ぢやないか

門司大尉「實に愉快で御座います……彼方の堡壘も取れましたな

石田少佐「取れたとも彼處に在る二ツの堡壘を先刻取つて仕舞つた之れて調度三
ッだ

門司大尉「實に愉快で御座います

其處に又た大野大尉が來られまして一禮されますと

石田少佐「貴官は誰ですか

大野大尉「小官は十二聯隊の大野大尉で御座います……貴官は

石田少佐「十八聯隊の石田少佐です

大野大尉「ア左様で御座いますかお目出たう御座います

と斯様に御話をして居られます所に立見少將か御出でになりました御出でにな
つた時の御話は朔寧支隊の部に申上た筈で御座います

佐藤大佐は坎北山の砲兵陣地から此の戦況を御監視になつて居りましたが歩兵の勇進は勿論の事で御座いますけれども第五堡壘の敵を挫いたのは實に砲兵の力に在りと御感じになつたさうで御座います全体此の名古屋砲兵の第三大隊即ち追水大隊のおゑらいわけと申しますのはお二人の中隊長が何れ劣らぬ御腕さいで御座いますして第五中隊長は陸軍大學校出身に其人ありと知られたる鑄方砲兵大尉第六中隊長は下士官から頭角を現はして中隊長までズン／＼經上つた所の和田砲兵大尉で御座います御二方とも斯様なお腕さいで御座いますから其の間に又た自然の競争も起りまして鑄方大尉の心中には何に和田大尉か何と云つた所で根が下士官あがりの人物ぢや之に負けて堪るものかとあれば又た和田大尉の心中には陸軍大學校を卒業したとて何にゑらい事があるものか實地の競争は書物ばかりで出来るものではない己れが多年熟練の腕前を示して呉れんと云ふ御氣があつたかないかは固より想像で御座いますけれどもお二人共に中々のお腕さいであつて十二門の大砲を六門づゝ扱つて何れ劣らぬ競争的の御働さがあつた事は慥かで御座います其の競争の爲め兩中隊の砲撃は十分の効を奏した

と致しますれば競争はと有り難いものは御座いませぬ
佐藤大佐は歩兵隊が此の第四第五の堡壘に迫られたのを御覽になりますと直ぐ砲兵に向て撃方止めの號令をお下しになり又た夫れに次で其處の豫備隊の一部となつて居らるゝ歩兵第六中隊第八中隊の一部と工兵隊と其の砲兵大隊を率ひて前進を御始めになりました

第四十八回

石田少佐は第三堡壘を陥れて再び第四堡壘の方に御戻りになりましたが此處は城壁の上から撃ちおろす敵弾が烈しう御座まして不利益な地形で御座いますから其の下谷合ひに兵を御隠しにありました
佐藤大佐は此の時砲兵大隊と總豫備隊であつた歩兵の第六中隊第八中隊の一部並に工兵大隊を率ひて第五堡壘の處に御着きのうへ追水砲兵大隊長は直に第五堡壘の傍らに砲列を御布かせになり佐藤大佐は又進で第四堡壘に御出でに相成り最早第一の時期を經過して之れから第二の時期となるので御座います即ち之

れから第二期の運動を御命じになるので御座います其處に丁度石田少佐が下の谷合ひから御出でにありまして御挨拶のあつた後ち

石田少佐「大佐殿今度は彼處に進みましようアレ彼の通り此の堡壘の敗兵が彼處に集つて居ります是非彼處を取つて仕舞ふぢや御座いませんか

彼處と申すのは箕子陵の事で御座います玄武門と七星門との間に當る城壁の下に一ツの小高い松林が御座いまして其の松林の中に朝鮮の開國者と呼ばるゝ箕子を祭つた廟が御座います其の廟が御座いますから此の小高い松林の事を箕子陵と申します

佐藤大佐「ムウー左うだ……宜しい彼れをとろう……貴官の第一大隊で

石田少佐「宜しう御座います之れから攻撃致しましょう

佐藤大佐「宜しい貴官の第一大隊が攻撃すれば此方に第六中隊と第八中隊が居るから夫れに援護射撃をさせる

石田少佐は元の谷合ひに下つて攻撃の準備に御掛りになります佐藤大佐は第四堡壘の處から敵弾の中を少し御進みになりますと第八中隊の一部が其處に居る

〆ばかりで第六中隊は其處に見えませぬ佐藤大佐は第八中隊の小隊長北川中尉を御呼びになりまして

佐藤大佐「ライ〜北川中尉

北川中尉「ハイ何んで御座いますか

佐藤大佐「第一大隊が彼の箕子陵の敵に突貫するから貴官は其の二ヶ小隊で援護射撃をするのだ彼の箕子陵の敵火を撲滅するのだ

北川中尉「宜しう御座います

と北川中尉は佐藤大佐の御命令に依つて其の二ヶ小隊に展開を命じズン〜墓場の在る所まで御進すみに相成り其の墓場に據つて膝姿一齊射撃の號令を御下しになりました膝姿と申すのは片膝をついて射撃する姿勢の事で御座います北川中尉は

「チーデー

の號令で以てポロツ……ポロツと一齊射撃をおやりになつて居りますと敵の方からも熾んに射撃致します其中山村少尉の小隊も之にお加はりになつて同じく

北川中尉の援護射撃

一齊射撃を御始めになりましたが味方の射撃は五百五十メートルの距離で御座います佐藤大佐は此の射撃を御覧になつて居りました所高聲を以て

『オイ〜照尺が低いぞ……モ少し高く……』

と御叫びになるのが聞えましたから各小隊長は直ぐに照尺を上げて六百メートルの距離で御射撃せになりますと大佐の眼光果して過たず敵に取つては命中がよくて餘程堪へたものと見えましてその射撃が大變に衰へました併し城壁の上から發ち出すのは中々止めません

石田大隊
箕子陵を
取る

石田少佐は斯様に一方の援護射撃に依り其の大隊並に第五中隊を率ひて谷合から現はれ一線に展開して箕子陵に御進みになつて居りますが正面の箕子陵からと側面の牡丹臺の下手の壁上からと發ち出す敵弾が十字火となり又た牡丹臺のカットリングの音がバリバリ〜と凄い音が致しまして四面慘憺の有様で御座います併し一たび進み始めたら如何ある敵弾も畏れないのは日本兵特有の元氣で御座いますから石田少佐の一隊は其の彈丸を犯して到頭箕子陵の下まで御取付きになり崩るゝばかりの呐喊を以て敵兵を逐ひ散らし見事に箕子陵を御

三村中尉
玄武門に
迫る

占領りになりましたたされども眞上の城壁からは相變らず瞰射しますから中々油断は出来ません

御話がかはりまして歩兵の第六中隊は豫備隊であつた爲め三つの堡壘が占領た跡で御進みになりましたからまだ新手中で御座います其の上外の隊に先さんせられたのを残念に思はれましたか第四堡壘の處に着かれますと其處に止らずして直ぐに進まれました中にも其の第一小隊長三村中尉は

「前へ〜」

と號令を掛けて眞幕に御進みになりました而かも城壁の上から瞰射す敵弾を潜つて玄武門の下まで御出でになりました所が門は固く鎖して中々明きません明きませんから早足で其の堀の石垣に附いて少しばかり牡丹臺の方に參れましたが味方の砲彈が命中つたので御座いますか何うしたので御座いますか其の堀が破壊れて居りますから三村中尉は

『オイ〜此處だ〜……サア来い〜』

と云ひながら兩手を伸して其の堀に攀ぢ上りヒナリと之を御乗り越えになります

十五勇士の
玄武門の

すど一等軍曹石神常蔵二等軍曹柿島彌太郎上等兵五島辰吉一等卒原田十吉同太
田政吉同栗田梅吉同原田霜吉同加藤太郎吉同村松明太郎同杉浦喜作同上田増太
郎同三浦伊之松同蘆川久米藏同彦坂徳次郎同宮本來作の十有五名の剛の者が大
膽にも其の跡に續いて其壁を乗越えました所が牙城の城壁から瞰射す彈丸は申
すに及ばず玄武門内にまで敵が居りますから三村中尉は其の乗り越へた勢で以
て軍刀打ち振り

「前へ」

どの號令を御掛けになりませう否や十五勇士は先を争ひボン／＼と撃ちながら
銃剣を閃かして三十メートルばかり進ませました敵は之を見て小勢と侮り牙城
の内門の方からヤートト喊聲を揚げて逆襲して参りました残念な事には何様十
五人の事で御座ますから據るなく玄武門の傍まで御退きに相成り其の小高い土
手見たやうなものに據て十五人必死となりボン／＼と撃ちながら其の逆襲の敵
を御防ぎになり漸く御防ぎ止めにはなりましたけれども城壁の上から瞰射され
るのが中々堪りませんから三村中尉を始め十五勇士とも玄武門の二階に上り其

の屋根の蔭に隠れて敵弾をお避けになつて居ります

三村中尉「此の門の内に入れば最う夫れで占めたものと思ふて居つたが中にモ
一ツこんな高い城壁があつては仕方がない

石神軍曹「左うで御座いますな中にこんな堅固な石垣があるとは思ひませんでし
た

と御話の中にも城壁の上から銃口を揃へて瞰射します玄武門は小さい門で二階
の上も狭ふ御座いますから其の屋根では十六人の體をすつかり隠す事が出来ず
端の方に居らるゝ方は何はどか體が現はれて居ります敵は其の現はれて居る處
を狙撃致します併し仕合せなのは此の時味方の砲兵で以つて玄武門の上の乙密
臺を砲撃され其の砲弾が見事に命中致しますから敵も安心して城壁に據て居る
事が出来ません併し其の砲撃が少し途絶えると云ふと又た直に城壁の上から撃
ちますさうして内門の方から始終敵が逆襲して來さうなけふりが見えます……
失禮ながら早く申せば三村中尉の一族は玄武門の二階に撃ちすくめられて仕舞
はれた形で御座います然るに一等卒原田十吉氏……平素沈着にして言葉寡き原

田十吉氏は此の危険の場合に

原田十吉氏「中尉殿門を開けて来ましようか

三村中尉「何だ門を開けるウム……門は開けて置く方が可い事は可いが……

原田十吉氏「私が開けて来ましよう……

三村中尉「併し射撃されるぞ今体を出したら直ぐに城の上から撃れる……

原田十吉氏「イヤ構ひません

と云ひながら門の二階からコン／＼と下り大なる丸太や石又は土塊などを以て門の内から扉がおさへて有るにも拘はらず原田十吉氏は一生懸命に其の障物を取り除きまして到頭其の扉を開けました有名なる原田十吉氏の門破りとは此の事で御座います其の時三村中尉は二階から聴て居られますと下の方に何か話聲が致します中尉

「誰だ／＼其處に来たのは誰だ

と申されますと

「己れだ……森久中尉だ

と聞えました三村中尉上からジツと覗きながら

三村中尉「イヤ森久中尉か何うして来たのだ

森久中尉「最う先刻から此處に来て居つた此處の塙を乗り越えて……

三村中尉「イヤ夫れは一向知らあかつた何うだ此の中にこんな城壁があらうとは思はなかつただらう。

森久中尉「左うだ此の城壁は意外だ

三村中尉「森久君酒が澤山あるよ

森久中尉「皆んな飲ますに僕にも少し呉れなわ不可んど

三村中尉「宜しい

と云はれる中にも敵は熾んに撃ちおろします左うして其の酒と申すのはフランスの中に入れて二階の端の方に在るので御座いますが之れを取ろうと致すと敵の狙撃を受けますから中々容易に取る事が出来ません然るに一等卒太田政吉氏は元來が大の酒嗜みで此のフランスコを見ては如何に敵の狙撃を受けやうと何うしやうと決して猶豫する事が出来ず頭此のフランスコに手をかけて先づ一口グ

いと飲み顔をしがめながら

太田政吉氏「中尉殿……ヤーこれは酒ではありません……酔で御座います

三村中尉「エー……酔だ……ドラ見せるアーこれは酔だ……酒かと思ふて大

變愉快に思ふて居つたのが酔と来ては落膽千萬だハ……オイ……森久君今

云ふたのは酒ぢやない酔だよ

森久中尉「左うか夫れは失望ぢや

とお話の中にも敵は矢張り城壁の上からしてボン／＼發ちます此の森久中尉は

三村中尉と同じく矢張り第六中隊の小隊長で御座いますさうして森久中尉に從

つて来たのは上等兵森川常次郎同加藤與助一等卒大石理吉同紅林叶次同岡部吉

藏同遠藤藤佐太郎同齋藤忠八同鈴木宇吉二等卒杉山久吉同稻葉直吉の十勇士で御

座ます之れで兩中尉の兵を合ますと二十五名はゞになりまして何はゞか力が増

した上に原田十吉氏が其の固く鎖して有つた門扉を開けましたから門の口で敵

の逆襲に當らんと兩中尉一ツになり門の内側に掩堡を御築さになりませ

分ばかり御築さになり居りました時敵が又た内門の方から逆襲して参りまし

たソコで必死となつて御防ぎに相成漸う／＼御喰ひ止めにはなりませしたけれど
もマタ中々油断はなりません此の時第六中隊長新大尉が第六中隊の殘兵を率ひ
て御出でになり朔寧支隊の淺田中尉も其の小隊を率ひて御出でにありましたか
ら大分味方が殖へました又た第二大隊の副官神田中尉も此の前から御出でにな
つて居りまして頻りに勇氣を御振ひになつて居ります

神田中尉「此の門に全力を集むれば直ぐと平壤は占領れるけれども僕の説を用ゐ
んから不可ん……味方が少いもんだから生意氣に逆襲なぞして来るんだ……
エーッ早く此の平壤を踏み潰して仕舞ひたい

と大變に御急りになりまして單身で玄武門の中にノソリ／＼と御這入りになら
うと致します時一發の敵彈が眉間を貫きましてバツタリ其處にお倒れになりまし
た其の直ぐ後で第二大隊長門司少佐が御出でになりまして

「神田副官……副官は其處に居ないか……」

と御尋ねになりませ三村中尉

「神田中尉は……只今戦死致しましたタツタ今で御座います其處に死骸が御座

神田中尉
の戦死

門司少佐
神田中尉
を慰む

います

と申されますと門司少佐は

「ア、左うか残念な事をした……」

と涙を浮べて御惜みになりました左うして敵の逆襲は其の間にも油断がなりません又た城壁の上から瞰射す敵弾は始終身邊を掠めす併し第五堡壘の傍から發ち出す味方の砲弾は相替らず乙密臺に命中致しまして氣味のよいは破烈致しますから其の砲撃の援護に依て辛くも玄武門を守り遂げ砲弾の乙密臺に命中致す毎に玄武門から

「ウワ——ヤ——」

と吶喊の聲を揚げて味方の砲兵に命中を報じ且つは敵に對して虚勢を御張りになつて居ります……處が其の砲撃が少しの間でも止みますと矢張直ぐに又た城壁の上から瞰射すソコで砲兵の方に傳令を御遣りになりました

「城櫓は間断なく砲撃されたし然らざれば城壁よりの瞰射に堪へ難し

どの旨を御申越になりました砲兵でも其の積りで御射撃になつて居るので御座

いますけれども彈藥の缺乏を御氣遣になつて居りますから最早思ふやうに御射撃になる事が出来ません

第四十九回

第一大隊即ち石田少佐の大隊並に佐々木中隊と江川中隊の一部は箕子陵の敵を撃退し扱て之を御占領にはなりましたが城壁の上から瞰射す敵弾は實に非常なもので御座います殊に其の松林の松樹をかすむる音で一層の凄味を覺えますカッン……コッリ……と見事に松樹の幹を貫て行くのもあれば其の皮をかすつて行くのもあり又た其の枝をバアツと撃ち落して行くのも御座います石田少佐其處に御出でになつて前面を御覽になりますと高さ七八間の城壁で御座います中々以て容易に攀ぢ登る事の出来るわけのものでは御座いません

石田少佐「サア彼の城壁を登るのだ吶喊して城壁に攀ぢるのだ……併し唯ではいけん唯だ登る事は出来ん梯子だ……サア皆此の松樹を伐り倒して梯子を作るのだ……オイ……早く梯子を作らぬか……」

城壁の下に内迫す

松樹を伐
造る
梯子を

と申されますから下士兵卒諸君は豫て歩兵隊にお備へになつて居る關節鋸で以てゴシ〜と其の松樹を御伐り倒しになりませぬ夫れでも鋸の数が足りませぬから銃剣で以てカツリ〜と御伐倒しになつて居る方も御座います斯様に御伐倒しになつて何う云ふ工合の梯子が出来るかと申す本國出發の際腹を冷さぬやうにと露營用に渡つて居ります紀州チルの腹帯を解きよい加減に之を引裂て左うして夫れで梯子の段を御締り付けになつて居ります

甲「ヤ一立派な梯子だ市街に賣りに持つて行つたら幾らに買ふだらうか

乙「之を市街に賣りに行つたら梯子として買ふものはわるまい松薪だ〜……

丙「松薪の梯子だハ、ア……

と戯言の中にも敵弾は城壁の上から雨のやうに降つて参り其の爲め幾らも死傷が出来ます石田少佐は士氣が沮喪してはならぬと御考へになりまして軍歌を御歌はせになつて居ります其所に佐藤大佐も御出でになりまして

佐藤大佐「オイ〜何をして居るのか……エー……梯子か梯子を作つて居るのか

石田少佐「梯子を作らせて居ります之れをつぎたして城壁に攀ぢやうと云ふので

御座います

佐藤大佐「左うか夫れは壯んだ……やれ〜

新聞記者
の戦死

と御願ましに相成ました牛島少佐の一隊も此の時義州街道の方から此の箕子陵に向つて御進みに相成ましたが調度其の途中が開豁地となつて居りますから敵は之を見まして七星門の方から熾んに射撃出しました廣島の中國新聞記者下山熊喜氏が戦死されたのは此の時御座います下山氏は牛島少佐の一隊に従ふて御進みになつて居りますと敵弾がシユッブッシユッブと雨の様に飛んで参ります其時其處にも此處にも負傷者が出来ますと下山氏は兵卒と一ツになつて其の御帶の手つだひなぞをしながら屈せず御進みになつて居りましたが運拙くも一發の彈丸が頭を貫きましてバタリと御倒れになり最早人事不省で御座います牛島少佐は此の敵弾を犯して箕子陵の下まで御取付きになりませぬと箕子陵は第九中隊と第三中隊で占領したから其の隊は其處に止まつて豫備隊となるやうにどの命令が下りました

斯様に箕子陵を占領して居られますと敵兵凡う五六百名ばかり七星門の方から

敵軍逆襲
し来る

逆襲致して参りました喇叭を吹き吶喊の聲を擧げ敵に致しましては中々殊勝な
舉動で御座います之を御覽になりますと各中隊共

「着げ——劔」

「逆襲の敵に向ひ撃ちかゝれ——」

どの號令が下りました號令が下ると云ふとカチャ／＼と劔を着ける音が致しま
して直ぐに間もなくボン／＼／＼とお射撃出しになりました其の中砲兵も之れ
にお氣が付きまして例の

「第一砲車——テ——」

「第二砲車——テ——」

と云ふ號令でドーン……ビュル／＼と榴弾を御射撃になり誠によく命中致しま
す敵は我砲兵歩兵一致の力で到底抵抗が出来ぬと思ひましたか見苦しくも半途
から背後を見せて七星門に退却致しました此の時最も勇氣を御振ひになりまし
たのは第一中隊の小隊長田中少尉で御座います田中少尉は猶ほ其の箕子陵の
右翼に當り敵が何度やつて來ても此の田中少尉が居る間は決して寄せ付けぬと

田中少尉
の奮闘

城壁破壊
少佐佐川
に降る

御氣張りになつて居ります之れほどの勇士で御座いましたか鉦瓦塞の一戦で御
戦死になつたと申す事で御座います

石田少佐「大佐殿何時までも此の箕子陵を守つて居つた所が仕方が御座いませ
んから一ツ此處を撃つて出て七星門に突貫致しましょうか

佐藤大佐「不可ん／＼……左う無暗に進んでは不可ん

流石勇猛の佐藤大佐も兵を損じてはならぬと御考へになつて居りますから猛進
を御許しにならぬので御座います併し佐藤大佐も此の儘では仕方がないと御考
へにあつて居りますから工兵大隊長佐川少佐を御呼びになりまして

佐藤大佐「何うだ此の城壁を破壊す工夫はゆるまいか

佐川少佐「へ——……迎ても不可ませぬ斯う堅固な城壁では……ダイナマイト

でも何んでも……之れを破壊す用意は御座いませぬ

佐藤大佐「ハア、ハア、左うだらう何うも堅固だから……」

ソコで佐藤大佐は朔寧支隊の運動は如何相成つて居るかど御考へになりまして
佐藤大佐「オイ石田少佐……之れから立見少將の處に傳令を遣りたいと思ふが誰



と慥かな下士を一人撰抜……

石田少佐「下士で御座いますか宜しう御座います」

と申して第二中隊の安形軍曹を御撰抜になりました此の安形軍曹は三河國八名郡富岡と申す所の人で最早豫備役で御座いますから駒場の農林學校に入學して居られました所今度の戦争が起ると聞くや否や充員下令に應じて真先に召集に應じ十八聯隊中屈指の精神家で御座います石田少佐は豫て其の精神を御見抜きになつて何か大切な任務があつたら一ツ使つて遣らうと御考へになつて居りま

した所に只今調度佐藤大佐から此御命令が御座いましたから直ぐと御撰抜になつたので御座います御撰抜になつて安形軍曹が其處に参られますと

佐藤大佐「オイ貴様は朔寧支隊の立見少將閣下の處に行つて元山支隊の戦況を報告して来い此の戦況は己れが言はぬでも貴様が分つて居るであらう……左うして其の序でに朔寧支隊は今何うして居るか運動をなしつゝあるか能く見て来い……併し之れは少將閣下に問ふのではないぞ宜しいか

安形軍曹「ハイ畏りました

佐藤大佐「此の彈丸を潜つて行くのだから用心をせぬといけんぞ

安形軍曹「宜しう御座います

佐藤大佐「併し一人ではいけんモ一人聯隊書記を付けて遣るから

と申されました聯隊書記の宮下軍曹にも安形軍曹同様御申渡しに相成ましたッ
ッで兩軍曹は箕子陵の松林から現はれ出で敵の彈丸を潜りながら城壁の下を通つて参ります
然る處其の敵彈の烈しい事と云ふものは何とも斯とも申されぬほどで御座いま

安形軍曹
朔寧支隊
に使う

す

安形軍曹「オイ宮下軍曹

宮下軍曹「何んだ

安形軍曹「之れは逆でもいけん少し敵彈を避けやう

宮下軍曹「左うだね……

安形軍曹「此處だ……此處に渠がある此處に道入らう

と云ふて安形軍曹は其處の渠見たやうなものの中に飛び込みましてッで宮下軍曹も同じく飛込んで兩氏とも其の中に暫く潜んで居りましたが安形軍曹は其の中に「ッ」と其の渠の中を匍匐出しました宮下軍曹は何をするかと見て居りましたが何時の間にか其處に見えなくなつたのに氣が付きましたから宮下軍曹はサテは佐々木高綱をやられたり抜がけの功名をされたりと忽ち其處を飛び出でて眞幕に朔寧支隊の方に駆付けますと果して安形軍曹は立見少將の前で卒倒致して居ります其の卒倒の様は朔寧支隊の部に申上りましたが何せ斯様に卒倒されたかと申しますと安形軍曹は石田少佐の部下で前夜前哨の其の又た前哨

三四
即ち特進哨となつて敵に一番接近した所に見張りをして居られましたから其の立つた儘にマンシリとも眠らないばかりでなく夕飯も食はず黍畑に在る黍を指の先きでひきながら少々腹を癒したばかりで今朝來激戦の後もまだ一食もしない即ち睡らず食はずの體で此の彈丸を犯して急走しましたから遂に卒倒されたものと思はれます卒倒や何かの爲めで少々還りがおどかつたさうで御座いますけれども此の困難を犯して立派に其の任務を遂げられた段は誠に感心千萬な御話で御座います此の傳令と行違ひに立見少將の處から傳令が参りまして餘り肉迫するを止めよとの御注意が御座いましたけれども此の傳令と同じ途中で困難致した事と見へまして時刻が餘程後れて此の時は元山支隊でも既に射撃を中止して居られた時で御座います
箕子陵の梯子も大分出來ましたけれども此の梯子で城壁を御攀ぢになる事は中々以て出來ない事で御座います敵の居ない城壁ならばイヤ知らず現在敵が城壁に據て瞰射すのに何うして此梯子をかける事が出來ませう……ヨシ掛ける事は出來ると致しまして夫れを登る事は出來ません一人づゝ登つて行くうちに皆

城壁の上から射撃されて仕舞ふのは最初から分り切つた事で御座います石田少佐も固より夫れを御存じで御座いますけれども士氣を勵ます爲めに梯子をお造らせになつたので御座います併し下士兵卒諸君は必ず此梯子を以て城壁に登ると云ふ御決心で御座いました
順安の警備隊となつて居らるゝ第七中隊と只今此の玄武門に據つて居らるゝ第六中隊の二ヶ中隊を除きますれば十八聯隊の各中隊は残らず此の箕子陵に據つて居られます佐藤大佐は如何にもして一舉に攻落したいと齒きしり噛んで居られますけれども何様堅固なる城壁で致し方が御座いませんソコで佐藤大佐は味方の士氣を勵まし且つは敵の肝膽を冷やす爲めに軍歌を御歌はせになります何の中隊でも高聲を揚げて

我軍大に
軍歌を唱

「四百餘州を擧うる十萬餘騎の敵……」
雨なす城壁の彈丸を物ともせざる此大膽不敵の舉動は敵の眼に何んど映じましたか……ア日本軍の勇猛なものには何うしても敵する事が出來ぬと思ふたで御座いませう併し敵する事が出來ぬとシツとして居つては致し方が御座いませ

んから敵の一部は又たも七星門から逆襲致して参りました即ち七星門から城壁の下に沿ふて箕子陵の前面に参りました

敵軍再び逆襲し來る

「ッラ又た逆襲だ

「氣を付け

「着け——劍

なぞと云ふ號令の聲が其處にも此處にも聞えて居りましたが調度其の方面に當て居られました第三中隊長吉田大尉が其の中隊を指揮して

「逆襲の敵に向ひ撃ちかゝれ——

吉田大尉の負傷

と號令をかけホン／＼と射撃しながら少し御進みになりますと敵も忽ち退却を始めました唯だ困るのは城壁の敵で御座います此の敵が逆襲の敵を掩護する爲め頻りと城壁の上から瞰射しまして中隊長吉田大尉が負傷致されました上等兵加藤重助氏之を見るや否や飛びかゝつて抱き起し

加藤上等兵「中隊長殿々々々々……サア……サア

と其の儘に背負ふて参りますと敵は之を目がけて頻りに狙撃致します其の狙撃

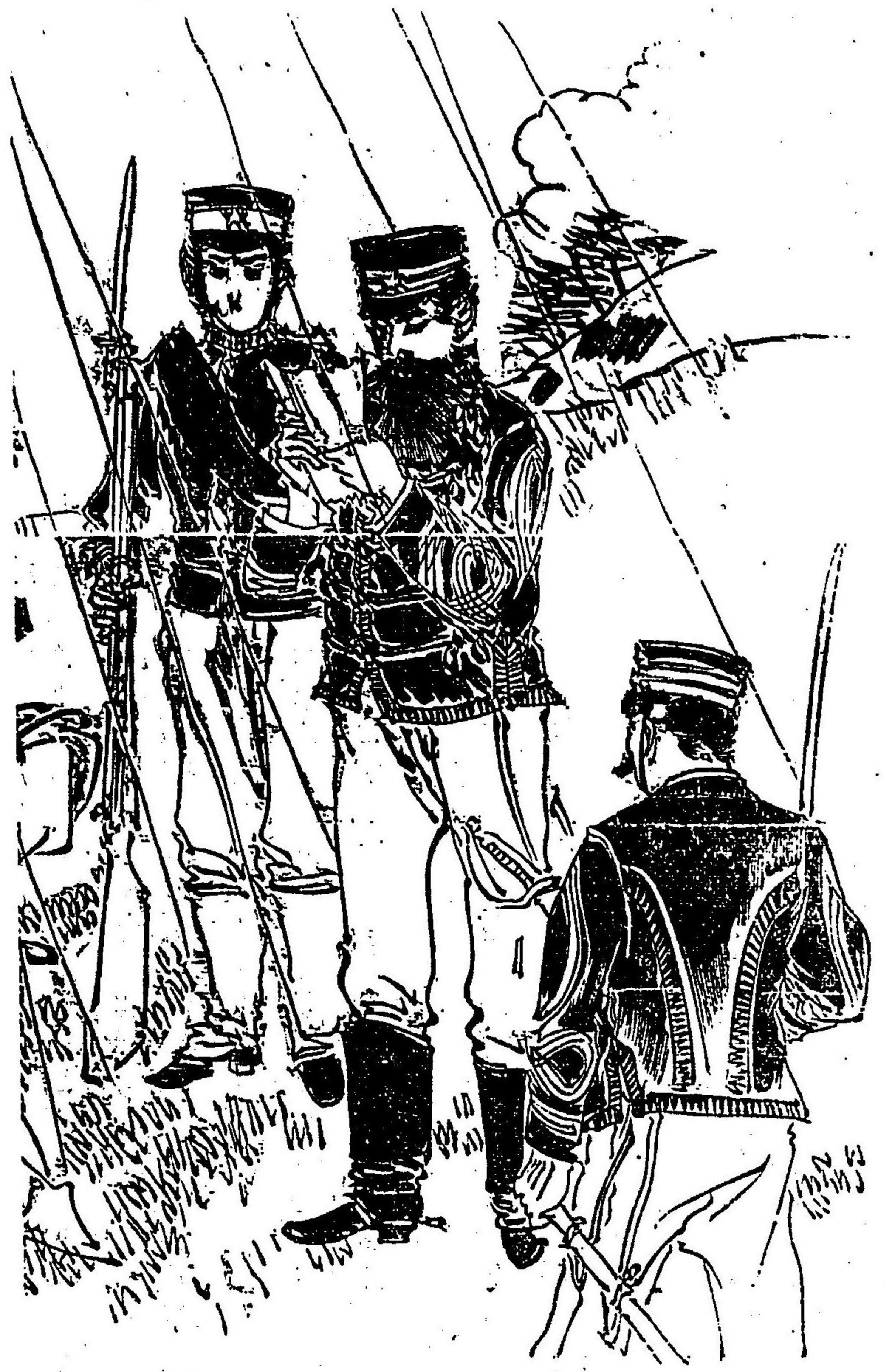
敵軍降旗を揚ぐ

の中を漸う／＼潜りぬけて後の方に送りましたのは誠に天晴と申さなければなりません逆襲の敵は退却致しましたけれども城壁の敵が相變らず射撃致しますから相對して御戦ひになつて居りますと砲兵も亦頻りに城壁の裡を榴散彈で御射撃になつて居りましたが其の時追水砲兵大隊長から傳令が参りました

傳令「只今一旗の白旗が城壁の内側に沿ふて南方から北方に行進したので見えました自然降意を表すのでは御座いますまいか……此の事を報告して來いと申されました

佐藤大佐「何に白旗を擧げた……ソんな事はない……白旗は支那固有の旗だから遠慮なく射撃するのだ構はん／＼射撃て

と申されましたから砲兵大隊では矢張ズドン／＼と御射撃ちになつて居ります其の中午後の四時頃となりまして双方の砲聲も銃聲も暫く休みました時城壁の上にか一發ズドンと音が致しました大砲の響にしては餘りに軽く固より又た小銃の響では御座いません何だか空砲のやうな響が致しまして其處に白旗を揚げました第十中隊で御氣が付き



林中尉「ア、中隊長殿アー何か白旗見たやうなものを揚げました
江川大尉「イヤ、信ぜられない……油断してはならぬ
と小聲で話して居られます所に調度佐藤大佐が御出でになりましたから其の事を御話になりますと
佐藤大佐「油断すなッ

と申されました所が一本の白旗が二本となり三本となり頭五六本に殖へま
て箕子陵の眞上の城壁から乙密臺の方にかけて樹つて居りますソコで佐藤大佐
も愈々敵が降意を表したものと御信用に相成り各將校悉く軍旗の下即ち佐藤大
佐の處に御集りになりましたして

天皇陛下萬歲

を御唱へになりました御唱へになつて愈々撃方止め——の喇叭が

「テテテテテテテテテテ」

と響き全軍唯だ愉快の氣を以て充されて居ります時に驟雨雷鳴一時に來り天地
晦冥の光景となりました各隊ビシヨ濡れとなつて其處に居られますと七星門か
ら一人の朝鮮人が出て、參りました出て、參つて箕子陵の方に參ります

甲「ヤー朝鮮人が來た

乙「何か使に來たらしいな

と云ふて居るうち其處に參りましたから直ぐと捕へて佐藤大佐の處へ連れて參
りました佐藤大佐通辯を以て其の參つた主意を御尋ねになりますと平安道監司

驟雨大に
至る

軍使來る

関丙寅の使と申しまして一通の書翰を出しました佐藤大佐披て御覽になります
と雨で濡れて居りましたして大變讀み悪う御座いますすけれども

平安道関丙寅 致書于大日本領兵官麾下現華兵已願退兵休讓諸照萬國公法上
戰候回〇即揚白旗回國望勿開槍立候回書 関 丙 寅

とあるやうで御座いますす即ち

支那兵は現に此の平壤の城を讓て退きたいと申します萬國公法に照しますと
斯云ふ場合には白旗を揚げると云ふ事になつて居りますから白旗を揚げたの
で御座いますす何うぞ小銃や大砲を射撃ないやうに願ひます

と申す主意で何時城を引渡すとも何とも御座いませんソコで佐藤大佐は更に通
辯を以て之れから直ぐと城に乘込から左様心得ると御申渡しになりますと

朝鮮人「只今城の中は最う大變か混雜で御座いますすから何うぞ明朝迄御猶豫を
願ひます

と申します然るに恰も立見少將閣下から

「敵兵降参の意を表す其の隊は平壤に入る可し

どの命令が参りましたソコで佐藤大佐全支隊を箕子陵北方に御集めになりまして先づ

天皇陛下萬歳

を三唱し扱第一大隊を先頭として少し御進みになりますと又だ立見少將から

「只今入城を断らる城外に露營すべし

どの命令が御座いましたから第四第五堡壘の所に退て露營をされる事になりました

伊藤軍醫の熱心

此の箕子陵の戦で各將校方が御働さになつたのは申すまでも御座いせんが此と一ツ最も感心致す御話は第一大隊附の一等軍醫伊藤百藏君の御働で御座います十八聯隊が此の箕子陵に御進みになりましてからの死傷数は四十名ばかりで御座いましたか衛生隊や又た外の隊附軍醫の方々は第五堡壘の處に居られ此處まで御進みになつたのは唯だ此の伊藤軍醫御一人で御座います伊藤軍醫は三人の看護手を相手に其處らと此處らと負傷者を御探しになつて居りますと云ふと城壁の敵が頻りに狙撃致し都合二ツまで敵彈が中りましたけれども運好く唯だ

軍服を撃切つたばかりで体に障りませんで御座いましたか軍醫は之を物どもせず非常なる骨折で其の多数の負傷者をお一人で以て御處置に相成つたと申すことで御座います若し軍醫の此の骨折がなく暫く其の儘になつて居りましたら夕景の大雨で負傷の局部に泥水や汚物がかかり格別の重傷でなくても其の爲め治術の困難を來し助かる可き人が助からないやうな事になつたかも知れませんがけれども左様の困難がなくして済みましたのは隊附軍醫として實に天晴のお働で御座います

第五十回

敵も愈々白旗を擧げ明朝は城が受取れると云ふので夫れく露營地に御就きに相成り前哨の任務は第十一中隊に御授けになりました其第十一中隊への命令は第十一中隊は前哨に任じ並岨高地の西南端を占領し平壤に通する二條の道路を扼守して平壤方向を警戒し中隊の主部は七星門に通する道路附近に置く可し

第五十回

と斯様な御主意で御座います各隊共湯をわかしたり又た雨の爲めに濡れました軍服を乾かす爲め火を焚かうと致されますけれどもサツパリ薪が御座いません何うか斯うかして少々拾ひ集れた分も皆濡れて居りますから中々燃え付きません夫れを色々工夫して漸々燃しつけ其處にも此處にも火を焚きあがら

甲「ア一思ふたよりは易く取れたものだ子一昨日彼の坎北山から見た時の事を思へば丸で夢のやうぢやないか

乙「左うだく口では強い事を云うて居つたけれども心の中ではア、堅固な堡壘や城壁があつては中々容易な事では取れまいと心配して居つたが……タツタ十二時間の戦争で此の通りだ……支那兵と云ふ奴は意氣地のない奴ではな

い「左うともく己れが前哨に出で、此の堡壘を眺めて居ると云ふと士官らしいものが號令だか何だか頻りに高聲を出して兵を指揮して居つたやうだが其の時の勢などと云ふものは何うして彼の堡壘が取れるだらうかと心配した位だ丁「何アにそんな馬鹿な事があるものか幾ら堡壘が堅固でも城壁が堅固でも皆

生命を捨て、かゝれば斯の通りだ……若し生命を捨てずに戦に勝つて見よと云はるれば随分難題だが死んでも構はんから戦に勝つて見よと云ふのならば少しも心配はない何時でも此の通り勝つて見せるのよ、い、い、い、

甲「勝つた」と斯んなに喜んで居るが併し今夜夜襲があるかも知れないぞ
乙「勿論警戒はして居らねばならぬが先刻中隊長殿も左う云はれたではないか
支那兵の事だから降参しても中々油断はならぬ今夜は決して安心するなツと

支那兵の事だから油断は出来ぬと飽まで警戒を御加へになつて居る中にも前哨の第十一中隊では要所々に歩哨を立て又た小哨を置いて嚴重なる警戒を加へ来たくば何時でも来たれと云ふ御構へで御座いますか午後の八時半頃即ち夏の短夜で御座いますから日の暮れてまだ一時間経つか経たない時おぼる月夜の義州街道上に歩哨が何か答めて居る聲が聴えます小哨で耳をたて、お聴きになりま

す
「降参人が来た……銃を持つて居る……銃を奪つて縛れ……小哨に送れ

と云ふ聲が切れぐになつて聞えます小哨では

林少尉「何か妙な事を云ふて居るではないか……油断してはいけぬ敵襲があるかも知れぬ……」

と申して居られます時歩兵が一名の支那兵を縛り其の小銃までも背中にいはひ付けて引張つて参りました

歩哨「少尉殿……これは降参人でありませす

林少尉「何だ降参人……降参人が銃を持って居つたのか

歩哨「ハイ……」

林少尉「降参したのぢやあるまい

と云ふて少し糺間にお掛りになりませすと焼酎を飲みましたか何を飲みましたか何うも酒の臭が紛々致しまして餘程泥酔の体で御座いますさうして其の酔にまぎれて傲慢の舉動を致し全く殺さるゝのを覺悟して参つた模様で御座いますから林少尉は夫れを前哨中隊にお送りになりました其時歩哨線の處にボン／＼と急射撃の銃聲が聞えました

歩哨線の銃聲

林少尉「氣を注げ——……敵襲だ／＼サア皆防禦線につけい

と申して小哨の兵を防禦線におつけになりますと歩哨も下士哨も皆其處に引揚げて参りました

「サア愈々敵襲で御座います餘程優勢にやつて来さうで御座います

と報告致しましたソコで前哨中隊も防禦線におつきになり又た牛島少佐も露營地で此の銃聲をお聴きになりましたから直ぐと第九第十二の兩中隊を防禦線に御加へになりました尤も第一回に來ましたのは林少尉の小哨で御座退になりましたが其の中各大隊共皆義州街道を挟んで御構へになりましたから極てよい地形で御座います雨後のおぼろ月夜で能くハッキリとは分りませんが何んでも歩兵騎兵を混じ或は百人或は三百人と云ふ工合に隊を組み銃を射撃し喇叭を吹き喇叭を揚げてやつて参ります

「ソラ来た……来た／＼

と云ふて居るうちタツ／＼／＼バタ／＼／＼／＼ボン／＼／＼／＼射撃しながらやつて来ますから味方は其の街道を目標に激げしくボン／＼／＼／＼ボン／＼／＼／＼

敵兵撃て出つ



ンくボンくボンくと御射撃ちになつて居ります此の激しい射撃で大抵撃ち倒されるか或は撃ち退けられて他の方面即ち日本兵の少し配つてない所から脱け出るより外には仕方がないやうで御座いますけれども矢張り夜の事で御座いますから運好く助かつて此の街道を潜り脱けたものが御座います其の潜り脱けたものが後の方の大行李や衛生隊の負傷者収容所に襲ふて参りましたソコで衛生隊の醫官が剣を抜き又た負傷者が小銃を手に取ると云ふ騒いで御座います各將校の馬丁なども後の方に居りましたが此等も皆相當に働かまして綱を街道に張つて置きますと云ふと敵が皆之れにヒツかゝつて倒れます倒れます所を刀で刺殺したのばかりでも餘程のもので佐藤大佐の馬丁などは大變に奮戦致したと申す事で御座います

斯様に敵の襲來數回に及び扱夜が明けて其の街道を御覽になりますと敵の死骸が累々と山を築き流るゝ血の河骨の山とは實に此の事を申しましたもので御座いますしやう佐藤大佐誠に満足の御様子で御座います唯だ順安に残してある一ヶ中隊の事を御案じになりまして

佐藤大佐「ア實に愉快であつたが順安は何うなるだらう……まだ外の所からも脱け出た奴ツがあるに相違ないから……夫れが皆順安に衝突かつたら第七中隊は何うなるだらうか……實に心配ぢや……ヨシく之れから騎兵を五六名遣る事にしよう

山本副官「イヤ今お遣りになつた所が逆でも不可ません其の騎兵が順安に達く途中で敵に出逢ひますから五名や十名では皆やられて仕舞ひますモ少し時刻が經つて何かお出しになつたら可う御座いますしやう

佐藤大佐「イヤく一刻も待つ事は出来ぬ之れから直ぐに出す途中で敵に逢へば皆やられるかも知れぬけれどもやられても仕方がない此處で速かに順安の安否を問ふのは己れが第七中隊に對する義務ぢや……段へ騎兵が先方まで達かなくツても……出さなければ己れの職分が立たぬ

と申して夜の明ると間もなく七名の騎兵を順安に御遣しになりました騎兵は大佐の命令を受けるや否や勇しくハクシヤを蹴て乗出しタツくの駆足で二里ばかりも参りますと果して敵が幾群にもなつて順安の方を指して参ります其の群

の少いと見た時は軍刀を打ち振りヤ——と吶喊の聲を揚げ猛聲を示して追ひ散し又た五六十名から百名以上もある群と見る時は此方が迂路を取つて避けながら其の日の午前中に順安に達したと申す事で御座います
 お話が變りまして寺田大尉の第七中隊は十四日以来心細くもタツタ其の一中隊で順安の警備隊となつて居られました
 寺田大尉は安州の方向に對する爲め龜山中尉に二分隊を附して岩石川店に出し残りの兵は悉く御自分にお幸ひになつて順安北方の高地を占領し支那の方に向て義州街道を警戒して居られます
 此の十六日の午前四時頃背るの平壤の方に向する歩哨から兵卒が報告を持つて参りました

兵卒「中隊長殿々々々……敵が来ました……平壤の方から敵が参りました

寺田大尉「何に平壤の方から……コシ……今に援兵を遣る

と云ひ捨て早足で以て平壤の方に對する市外れの所に参られますと夜明け前の事で能く分りませんけれども人馬の聲が大變に騒がしい所から考へますと餘程優勢の敵と見えますさうして其のズーツと前方に出して在る獨立下士哨では既

にボン／＼ボン／＼と射撃ち合つて居りますッッで寺田大尉は風紀衛兵司令西川軍曹を獨立下士哨の處に御出しになり又た夫れでは不足と御考へになりまして更に大林少尉を御出しになりました其の時

寺田大尉「何んでも敵は餘程優勢のやうな併し何んな大敵でも決して退くやうな事があつてはならぬ……死を決して守るのだぞ

大林少尉「宜しう御座います御安心下さい

と云ひ棄てながら其の小隊を率ひて獨立下士哨の地點まで達しようと思はれますと西川軍曹は八名の部下を率ひて頻りに大敵と戦つて居ります大林少尉直ちに展開して激しく射撃を始められますけれども敵は少しも屈せぬのみか益々兵力を加へて何時になき掩護射撃などを致し本道上から四回は突貫して参りました斯く優勢の大敵で御座いますから大林少尉は中々の苦戦で御座います寺田大尉は猶兵力が不足と思ふて二分隊をお出しになりました然るに調度其處に岩石川店の龜山中尉がやつて來られました

龜山中尉「頻りに此の方向に銃聲が聞えますから獨断で参りました何うしたので

御座いますか此の敵は
 寺田大尉「何だか少しも分らん併し平壤の方から来たのだ……併し貴官は能く來られた兵が足りなくて困つて居つた所だサア此の高地から重層射撃をやらうと云ふて龜山中尉の兵と殘の兵を率ひて順安北方の高地に上り街道上の大林少尉の隊と二重になつて射撃を御始めになり夫れで以て到頭御撃ち退けになりました併し寺田大尉を始め何う云ふもので平壤の方から敵が襲て來たのかサツバリ分りません平壤を圍んだ日本軍を撃ち倒して來たのか又た圍を突て本國に逃げ歸る爲め來たのか何う云ふものであるかと皆々非常に御考へになつて居ります所に佐藤大佐からの騎兵が参りましたから始めて敵襲のわけが分りました兎に角孤立の一ヶ中隊を以て此の優勢なる敵襲に對し其の任務を御遂げになつたのは餘程の御働と申さなければなりません



師團本隊

第五十一回

元山支隊も一通り相すみ扱て之れからが愈々師團本隊即ち野津第五師團長閣下が手づから御率ひになつた所の師團本隊の御話で御座います此の師團本隊の中歩兵第廿二聯隊の二ヶ大隊は師團司令部同様釜山から御進みになりましたので其の京城までの行軍の御難儀と申すものは實に一通りや二通りのものでなく今度の戦役中恐らく他に比類のない御困難であつたのを何うか斯うか夫れにも打ち勝つて京城に御着になつたので御座います實は此の行軍中の御困難話から相始めます筈で御座います左様致しますとお話が大變に長くなりますから殘念ながら其の釜山から京城までの御話は先づ省略致し此の話は又た此の既に己れが外のものに書く積りだから師團本隊は野津師團長閣下の京城出發から始める事にしようと言ふ筑秋先生の御意見が御座りまして愈々京城御出發の處から相始めます

第五十一回

三五六
扱野津師團長閣下が京城御滞在中に平壤包圍攻撃の計畫を定め其の計畫に従つて運動を起すやうにと各方面に命令を御下しになりました事は最初に申上て置きました通りで御座います野津師團長閣下は先づ斯様に各方面の諸隊を御進めになつて置いて左うして夫れから師團本隊を御動しになるので御座います愈々其の京城を御出發に相成ましたのは九月の一日と云ふ日で御座ります
八月三十日に朝鮮政府から致して我大島公使の手を経て貴曆八月三十一日午前國王殿下、大日本皇帝陛下の第五師團長陸軍中將子爵野津道貫閣下並に其の幕僚に謁見を賜はる可き旨仰出され候に付參内有之度候と通知が御座りました大島公使は此の通知に接すると直様之を野津師團長閣下に御通報に相成ました
明くれば八月三十一日野津師團長閣下は其の參謀長上田大佐高級參謀仙波少佐高級副官喜志大尉を從へ數名の騎兵に護衛せられて威儀堂々と光化門を這入り宮闕に參られますと謁見の大廣間には朝鮮政府の各大臣列を正して居ならび廳がて國王殿下の御出御が御座りました一同敬禮を表せられますと殿下は司法協

辨金鶴羽氏を通辯として

大日本皇帝陛下至仁至德隣邦の好を重んぜられ此の宇内多事の時に當て我國の爲めに軍隊を出して我國の獨立を扶掖けらる予深く之を謝す又大日本皇帝陛下の第五師團長並に其の軍隊が此の炎熱を犯し缺乏に堪へ釜山街道を前進して京城に着したるを祝す而して明日よりは平壤の敵を攘ふが爲めに京城を出發すと聞けり予は我國の爲め速かに其の戦捷の報に接せんことを待つ
どの御詞あり師團長閣下は謹んで感戴の意を表せられ扱て
我大日本皇帝陛下隣邦の誼を重んぜられ貴國王殿下の爲めに軍隊を派遣せらる臣道貫不肖の身を以て之れが長となる乃ち此の任務を果すは我皇帝陛下の爲めに盡す所以にして之が爲め犯す所の艱苦缺乏は水火と雖も避くる所にあらず殿下願くは聖慮を安んじ給はんことを平壤の敵の如きは之を擊破せんこと固より臣道貫の度内に在り誓て捷報を献じて宸襟を安んじ奉る可し
と答詞を御献じになりまして夫れから別間に御下がりになりまして朝鮮の各大臣各協辨などが御主人役で茶菓子ビール葡萄酒などの饗應が御座います朝鮮人

は存外交際が上手と云ふはさへでも御座いませんがお世辭は中々上手で御座いますして何の先生も口の先きでは中々むまい事を申します其の中にも日本語に通じた連中が御座いますから

朝鮮人「シャーアナターツ御あかりになりませぬか

同「トモ何うもお國(日本)で飲ひやうなブトウ酒(葡萄酒)はありませんからお口にあひますまいか

と云ふ工合に濁音抜き(カタカナ)の言葉で以てお世辭を云ひながら色々お接待を致して居ります其の時は閑家の内閣のやうに純然たる支那黨でもなく又た牙山の戦勝後で御座いますから日本の實力を餘程信用致す時代となつて居りますけれども平壤の支那兵が二萬四五千もあらうと云ふ事を聞て居りますから其の實内心では何の大臣も何の協辦も心配の模様で若し日本軍が平壤で敗北したら支那兵は大舉して京城に迫つて来るに相違ない其の時は何としたものかなぞとクヨクヨ樂して居る連中が多う御座いますから話の中にも自然に其の意味が見えます例へば

朝鮮人「トトカ何うか宜しくナカイませアナタが御イテになれば屹度勝てます
同上「支那兵は中々高慢(で)すカ(が)併しお國の兵には敵ひません
と云ふ工合で御座いますから野津師團長閣下は落付拂つて

師團長「左う御心配なさるな幾ら支那兵が何萬居つても大丈夫です御心配あるな……アタイ(私の)薩音(サムオン)が一日か二日で屹度撃ち破つて見せませア(薩音)

朝鮮人「トトカ(何うか)宜しく願ひます

野津師團長「大丈夫です李鴻章の兵とか何とか云ふて居つても直です……ひとひ目に逢はして遣ります御安心なさい

野津師團長閣下は上にしては朝鮮國王殿下にしては朝鮮政府の諸役人を慰め必ず平壤の大敵に勝つて見せよと断言して其の元氣其の決心を御示しに相成扱師團司令部にお歸りになりまして萬事出發の用意を整へ愈々師團命令を御出しになりました

師團命令

師團命令

一余は明日師團の殘部の諸隊を以て京城を出發し前進を始む

一 混成大島旅團は目下南川店附近に露營し平壤及び載寧に向て偵察す
 一 朔寧支隊は新溪に在りて三登及び谷山の方向を偵察す
 一 元山支隊は既に一部を以て陽徳を占領し其の他は明日陽徳成川に向て出發すべし

一 混成大迫旅團は來月五六日頃元山に上陸し而して別命ある迄暫く屯在す可し
 一 以下の諸支隊は各其の屯在地の守備に任す

京城守備隊

歩兵第二十二聯隊の第二大隊(一中隊缺)

兵站守備隊

歩兵第廿二聯隊の第五中隊

仁川

同第十二聯隊の第十二中隊

龍山

騎兵第二中隊の一分隊

同

電線援護隊

洛東

一 以上の外余は猶歩兵第十二聯隊の第一中隊を海州に派遣す其の任務は同地

に陸揚せし糧秣運送を掩護し載寧を経て黃州に至り師團に合するに在り
 一 師團の第一行進團隊は開城より南川店迄は富岡中佐南川店以北は柴田中佐の指揮に屬し又第二行進團隊は友安中佐に屬し行軍計畫の如く行進すべし

斯くて九月一日に京城を御出發になりました
 斯様に師團本隊は第一團隊第二團隊の二ツとなり第一團隊は一日若くば二日路位を先きに御進みに相成り第二團隊は師團司令部と一ツしように御進みに相成つて居りまするが道路は京城から平壤への本街道で御座いまして申さば朝鮮一等の道路で御座いますから格別の御困難も御座いませんが糧食となりましてはまた礫に兵站部の設けもなく又た大島混成旅團が既に此の道路を御進みになつた跡で御座いますから其の近傍の村々で徵發も何も仕盡して最早少しの物資も御座いませんソコで師團長閣下を始め一方ならず御心配に直成り其の幕僚方の御骨折で何うか斯うか餓ゑぬばかりで御進みになつて居ります師團本隊だけですら斯様な始末で御座いますのに師團長閣下は又た朔寧支隊の事を大變御心配になつて居ります何う云ふ御心配かと申しますと朔寧支隊は新溪遼安の方に御

入込みになりまして山間幽谷の僻地を御進みになるので御座いますから到底兵
站線を設けて糧食を追送する事が出来ず平壤を落すまでは自活と申す事になつ
て居ります所が師團長閣下は果して其の自活が出来らうか何うであらう
か若し自活が出来ぬため十五日の間に合はぬやうな事があつては大體の計畫を
誤つて仕舞ふハテ其の實際は何う云ふ都合であるか又た朔寧支隊長立見少將の
決心は如何であるかと師團本隊の事よりは却て其の方を餘計に御心配になりま
して開城府から朔寧支隊に使を御出しになりましたヌルと其の使が平山府に歸
つて参りました即ち師團司令部が平山府まで御進みになつた時歸つて参りまし
た上田參謀長は其の返事を御覽になりまして

參謀長 「朔寧支隊の使が歸つて参りました立見閣下の返事を持つて参りました

……桂副官から小官に宛てた手紙で御座います

師團長 「朔寧支隊の返事か……」

參謀長 「ハイ……左様で……」

師團長 「何と云ふて來たか

參謀長 「ハイ……エー何んで御座います……糧食の事に就て一方ならず御心配
下さるさうだけれども支隊長閣下は今日の場合と云ひ此の僻地と云ひ到底糧
食の追送は出来ぬものと認められまして飽まで自活の決心で御座いますから
何うぞ御心配下さらぬやう願ひます……若し徵發も出来ず急々糧食がなくな
りました時は土を嚙つても師團長閣下の御計畫通り實行致しますから御安
心下さるやうに……と斯様に申して参りました

師團長 「アー左うか土を嚙つても……中々ゑらい決心だ左う云ふ決心で居れば
大丈夫だ夫れならば屹度行ける……アー流石は立見だ立見は實にやりてだ
と斯様に御感心になつたさうで御座います併し如何に困難致しましても人間が
マサカ土を嚙むるわけには参りませんから師團長閣下は其の徵發部員として二
三名の將校を御送りになり又た色々無理な事をして牛三四十頭だけ糧食を御送
りになつたと申す事で御座います
其の時平山の兵站司令部は押上砲兵少佐で御座います斯様に糧食の運搬が意
の如くならず其の爲め戦闘部隊の行進が後れて時機を後らすやうな事になつて

野津師團
立見少將
の決心
を食す

は誠に由々しき大事であると晝夜一睡もせず部下を指揮して御盡力になつて居りますれども中々思ふやうにいけません平壤包圍攻撃は毎々伺ひます通り来る十五日の御豫定で御坐いますのに斯様な事では前途何うなる事かと參謀のお方から師團長閣下に現況を御報告に相成りますと

師團長「宜しい……我師團は一意前進して平壤を屠ると云ふ事より外には何んにもない……無いなら無いで宜しい米も粟も何にも要らぬ……大行李の馬でも小行李の牛でも食ふて平壤を屠るまで行のぢや平壤を屠れば最う何にも要らぬ宜しい糧食は無ければ無いで宜しい……」

とあらう御決心を御示しになり各隊へも其の事を御達しになりましたして平山を御出發に相成り其の夜南川店と申す所で御宿營にあつて居りますと云ふと夜中時分に黄州から電報が届きました即ち此の時既に黄州まで御進みになつて居ります大島混成旅團から

「當混成旅團は本日黄州府に於て師團全部を三日間養ふだけの糧食を分捕つた



と申して参りました此の時師團長閣下は既に御就寝になつて居りましたが

仙波参謀「参謀長殿……コンな電報が参りました

上田参謀「成程之れは意外な仕合ぢや

仙波参謀「閣下をお起し申して御覽に入れませうか

上田参謀「夫れは御覽に入れなくてはいけぬあれほど御心配になつて居るのだから

と申されますから仙波少佐は戸を押し開けて一室に入り

仙波参謀「閣下……閣下……黄州から電報が参りました

師團長閣下は目をおさましに相成まして其の儘

師團長「ナ、何の電報か……

仙波参謀「大島閣下からの電報で御座います……今日黄州に於て師團全體を三日

間養ふだけの糧食を分捕つたと御座います

之れで以て師團長閣下は「エッ」と云ひながら袂を跳除けて……では御座いません其上におかけになつて居りました外套を跳ね除けてガバと起きあがり

師團長「エッ……何だ三日分の糧食を得た……師團を三日分養ふだけの糧食を得たとあるのか……

仙波少佐「左様で御座います

師團長「夫れは實に有りがたい……夫れがあれは最う大丈夫だ平壤まで行くのにわけはない……左うか……左うか……大島は實にイーコッシテクシタ善い事をして呉れたの薩音

と流石沈着を以て有名なる野津師團長閣下も之れには小跳をしてお喜びになつたと申す事で御座います之れで以て當時の事情が如何ほど糧食の困難であつたかと申す事が分ります

第五十二回

糧食困難の事は前回に申上た通りで御座いますが猶ほ此の事に就て各隊の詳しい御話を伺ひますと中々一席や二席の御話で盡さるわけのものでは御座いませんから糧食困難の事は前回に伺ひました師團長閣下の御苦心によつて何れは

野津師團
大島少佐
將の報告
を喜す

困難であつたかと申す事を御想像を願ひます
糧食の事は先づ夫れと致し夫れに次で師團長閣下の御苦心は渡河の事で御座います
す即ち平壤を攻めるには何うしても大同江を渡らねばならぬので御座います
が此の大部隊を大同江の何の邊から渡してよいか舟が澤山あつて時日も急かぬ
時ならば何處を渡るとしても別段の困難は御座いませんが斯様な場合の事で御
座いますから果して舟があるか何うかヨシ舟はあるとしても敵が前岸に構へて
之を妨げたら中々容易に渡る事は出来ませんソコで師團長閣下は京城を御出發
に相成る前から致して先づ此の渡河點を黃州の左手に當る鐵島附近と御見込み
に相成若し又た其の邊から渡る事が出来ないやうならば黃州から右に折れて祥
原郡を通り江東の方にいで、朔寧支隊の跡を踏んで麥田江を渡ると云ふ御見込
で御座いましたすが併し萬一見込通り渡れないやうな事があつては相成ぬと御心
配になりまして開城府にお着になりますと直ぐに第五師團工兵大隊長馬場少佐
に其の渡場の偵察を御命じになりました
馬場少佐は此の命令を受くるや否其の大隊副官武田工兵中尉通辯大久保某同中

島某擊劍家山本某の諸君と外に護衛の爲め騎兵五騎はと從へて師團司令部に先
ち開城を御出發になりました此の中島通辯擊劍家山本某の兩君は膽氣腕力併び
備はりまさかの時には必ず何かの用に立つであらうと云ふので野津師團長閣下
が御連れになつて居つたので御座いますすが馬場少佐の渡場偵察には色々困難の
用務があると御考へになりましたして師團長閣下から此の兩氏を御附けになつたの
で御座います馬場少佐の一行は毎日馬を急がせ劍水驛と申す所にお着きになり
まして武田中尉に大久保通辯を付けて戰導方向にお出しになりました其のわけ
は戰導の下から大同江の鐵島附近に注いで居る川が御座いますから其の川に在る
舟を取つて鐵島附近にお集りになる爲めで御座います馬場少佐は一方に斯様に
御手配になつて夫れから又た本街道をお進みになり鳳山驛で大島混成旅團を乗
り越し其の日のうちに黃州府まで御出でになりますと黃州府には調度混成旅團
の前衛一戸少佐が敵の騎兵を擊退けて只今お這りになつた所で御座います馬場
少佐は御着になつた儘一戸少佐の處に御出でになり一通り御挨拶があつてフト
其の横を御覽になりますと一名の朝鮮人を縛つて廣場につさする其の首を斬ら

うとする所で御座います馬場少佐ツカ〜と其の傍にお出でになりまして

馬場少佐「何せ其の朝鮮人を斬るのだ

士官「此奴は不埒な奴で御座いますから……

馬場少佐「何か悪い事でもしたのか

士官「悪い事位ではありません支那兵と一ツしよになつて我々に抵抗したので

馬場少佐「夫れは不埒だ……

士官「我斥候か中和から引わけて来る時此の黄州城から射撃をした朝鮮人が澤山あつたさうですが此奴も其の中の一人に相違ありません……今日も支那兵と一ツしよになつて抵抗したのを味方の兵が捕へたので御座います……

馬場少佐「ホー……

士官「捕へて色々敵状を訊ねますけれども一向白状も致しませんから……此處で斬せる所です……サア誰が斬るのか……斬るなら斬るで早く片付けて仕舞はぬか……

朝鮮人「アーンエン〜アーンエン〜

馬場少佐は猶ほも傍観しながら暫時お考へになつて居りましたが

馬場少佐「オイちよつと待つた……殺すならば殺してもよいが併し殺した所が斯んなつまらぬ奴だから……何うだ小官が少し考へがあるが……

士官「何う云ふお考で御座いますか……斯んな奴を活して置くとは邪魔になつていけません……

馬場少佐「夫れは左うだけれども……小官が少く使つて見たいと思ふ事があるから

士官「併し既に大隊長殿の許可を得て斬るので御座いますから左う云ふ御考があるならば何うぞ大隊長殿と御相談を願ひます

馬場少佐「宜ろしい大隊長には小官から話すから

と申して一戸少佐に御相談にありますと固より斯る人物を殺した所で何の利益も御座いせんから早速此の朝鮮人の身體を馬場少佐に御譲り渡しになりましたソコで馬場少佐は此の朝鮮人を別な所に御引かせにありまして通牒に命じ

通辯「オイ貴様は實に不埒な奴ッだ何んで支那兵と一ツになつて日本軍に抵抗致したのか

朝鮮人「ハイ……ハイ……畏入りました

通辯「畏れ入りましたでの済まぬ此處で斬つて仕舞ふぞ

朝鮮人「命だけは何うぞお助けを願ひます

通辯「夫れはどならば何せ抵抗した……

朝鮮人「私は抵抗する積りでは御座せんでしたが大國兵が來まして是非一になつて抵抗しると申しましたから據るなく鐵砲を射撃しました

通辯「大國兵が……支那兵が抵抗しると云ふても其の言ふ通りになると云ふ事があるか

朝鮮人「畏れ入りました

通辯「オイ能く聴け貴様は今斬られて仕舞ふ所であつたぞ……エー……夫れをね此處にお出でになる隊長殿が貴様の爲めに命乞をして下すつたのだ……

朝鮮人「へー私の命乞を……

朝鮮捕虜の命乞

通辯「左うだ……貴様の命乞を……誠に有り難い事だ……貴様は何うして此の命の親の御恩に報ゆる積りか

朝鮮人「夫れは有りがたう御座います……何んでも私で出来る事ならば

通辯「左うであらう左うなくてはならぬ……夫れでは隊長殿から貴様に御申付けになる事があるが其の御申付けの通り働く事が出来るか……出来ればよし出来ないとあれば今此處で斬つて仕舞ふ

朝鮮人「イエ何う致しまして何んな御用でも致します

通辯「夫れでは明朝其の御用を言ひ付ける

翌朝はなりまして通辯は馬場少佐の命を受け件の朝鮮人を引出し

通辯「昨日云ふた通り之れから貴様に御用を申付ける其の御用と云ふのは此の隊長殿が大同江の渡場偵察として綠沙浦まで御出でになるから其の道案内を致すのだ

朝鮮人「ハイ……道案内で御座いますか宜しう御座います畏りました
通辯「愈々道案内を致すか

朝鮮人「致します

ンユデ通辯は馬場少佐に對ひ

通辯「道案内を致すと申します

馬場少佐「左うか宜しい夫れでは之れから直ぐに出發としよう

と申されまして少佐の一行は直ぐに黃州を御出發になりましたが途中は其の朝鮮人を眞先きに立たせ其の縛つた繩を馬上から御持ちになつて懸がて三里ばかりもお歩行きになりますと黃州の横を流れて大同江に注いで居る河の岸に出られました其所には人家が凡そ十四五軒も御座りますが

朝鮮人「此處が綠沙浦で御座ります

通辯「何んだ此處が綠沙浦……少佐殿此處が綠沙浦のさうで御座います

馬場少佐「何アに此處は綠沙浦ではない綠沙浦は大同江の岸だ

朝鮮人「イ、エ此處が綠沙浦で御座います之れから少し行て大同江の岸に在るのは彼れは十二浦で御座います

馬場少佐「ハ、ア……成程大同江の岸に在るのが十二浦で綠沙浦と云ふのは此の

馬場少佐
の渡邊偵

事かハ、ア

馬場少佐は此の道案内者の話で地圖の相違を御發見に相成一先づ此の綠沙浦の村落で御休みになりました

馬場少佐「オイ、少し此の土人に敵情を聞て見ないか……此の邊に敵兵が來た事がありはせぬか

通辯「宜しう御座います

と申して居る所に例の長烟管をくはへた土人がゾロ／＼と四五人も集つて參りましたから通辯は早速

通辯「何うだ此の邊に支那兵が來た事はないか……屹度來た事があるたらう……土民「來ました、ツイ今朝此處に來て晝飯を食つて今がた立ち去つたばかりで御座います

通辯「ホー……ツイ今がた立ち去つたばかり……何人ばかり來たのか

土民「四五人で御座います

通辯「四五人か……左うして何んな事を言ふて居つたか

士民「日本兵が最う来るかも知れぬと申して居りました

通辯「何うだ此の邊に舟はないか少しはあるだらう

士民「へー……舟で御座いますか

通辯「舟だ舟があるだらう

士民「小舟が一二艘は御座いますけれども大國兵が若し此の舟を日本兵に貸す

やうな事があつたらば貴様等の家も何も焼て仕舞ふと申して行きましたから

通辯「ソんな事を云ふて行つたか……馬鹿な事を云ふ奴だ何に心配しなくても

宜しい其の舟を出せ

士民「大國兵に家を焼かれては……

通辯「馬鹿を言ふな大國兵が家を焼かふと云ふても大國兵は此處に居ないでは

ないか……最う我々日本兵が来たから大丈夫だ……大國兵は再び此處に来る

事は出来ぬ心配しなくても宜しい

士民「へー夫れでも

通辯「何に愚圖々々云ふか早く出さぬと家も何も焼て仕舞ふぞ

と叱られましたから士民も吃驚肝を潰しましたして舟のある所に案内を致しました
馬場少佐は通辯を連れて行つて御覽になりますと芥舟のやうな小舟が二艘ばかり
り小河の岸の蘆の中に匿して御座いますソコで馬場少佐は其の舟を小河から大
同江の岸邊に漕ぎ出させ御自分方も十二浦から大同江の岸にお出でになりました
て扱て熟くと地形を御偵察に相成ますと云ふと河巾は千五六百メートル即ち
十丁ばかりの河巾で對岸は調度棋津浦と申す所になつて居ります其の棋津浦
の方に工合のよい砲兵陣地があるにも拘はらず味方の十二浦の方には一ツの砲
兵陣地も御座りません之れで若し我師團が渡河を始める時敵が對岸に出た分に
は到底仕方のない所であるとお見定め相成ましたが併し此の河の上流に沿ふ
て敵は如何なる警戒をして居るか其の模様によつて渡河點も定めなければなら
ぬと御考へになりまして之れから其の兩岸の敵情偵察におかゝりに相成ます
馬場少佐は騎兵一等卒某通辯松原某擊劍家山本某の三氏に對岸の棋津浦から三
里ばかり上手に當る月江の邊までを偵察して來やうに命じ御自分は騎兵上等兵
坂本某通辯中島某を従へ此方の岸を水津浦と申す所まで御上りになりましたが



蘆花芥舟

途中に幾らも小河があつて到底師團本隊の渡場に適當な所が御座いませんソコ
 で少佐の一行は日暮過ぎに元の十二浦に引きかへして對岸の偵察に行かれた三
 人が何時戻つて來られるかも知れぬと御考へになり態ざと士人の家にも入らず
 大同江の河岸に繋である芥舟の中に寝ながら御待ちになつて居りますけれども
 一向何の様子も御座いませんハテ何うしたのであるか若し敵に出逢つたのでは
 あるまいかと皆々心配しながら夜半過ぎて何時しかウトウトとまどろんだと思

ふらち何だか對岸から呼ぶものがあるようで御座います何様十丁もわらうと云ふ河巾で御座いますから對岸の突ッ鼻に出で、大聲を揚げたとした所が左う手に執るやうに聞えるものでは御座いません況して此の潮流の急ひ所で御座いますから引潮か差し潮の時ならば河一面にジャ〜と流るゝ潮の音にまぎれて逆ても對岸の呼聲などは聞えるものでは御座いせんが幸ひ今は潮が引つめ夜も亦た更け渡りまして最も天地の静まりかへつた時分で御座いますから『オ〜イ……舟を……して呉れ』と云ふやうに聞えます

馬場少佐「オイ〜何だか對岸から呼んで居るせ

中島通解「ハイ……對岸から呼んで居ますか……ナ、成程呼んで居ます夫れでは歸つて來ましたか知らん

馬場少佐「早く舟を出せ早く迎舟を出してやれいと申されますから直ぐとモ一ツの小船に寝て居る朝鮮人を起して迎舟をお出しになりますと三四十分も経た頃其舟が三人を載せて漕で参りました其の舟を此

方の舟にクツ付けながら

馬場少佐「ヤ〜御苦勞……何うだ〜變つた事もなかつたか

松原通解「御命令の通り月江の所で参りました……對岸は敵が居ないとしても平安道の事で御座いますから實は何うか少し心配して参りましたが敵も一向居らず土人も至極温順で何事も御座いませんでした

馬場少佐「ホ〜……へ〜

松原通解「夫れから月江の手前の村落まで参りますと土人が非常に私共を歓迎致しましてイヤ湯が沸いたとかイヤジャガ芋が煮えた一ツ食へとか云ふて夫れは非常な深切で御座いますソコ其の持て來たジャガ芋を食ひましたが併し餘り深切が過ぎますから自然表面に深切を見せかけ我々を其處に引留めて置

て保山鎮に居る敵に知らせる積りではないかと却て心配した位で御座います……子へ左うだつたらう
山本製菓家「何に畏れはしませんけれども其の深切は不思議に思ふほどの深切で御座いました

馬場少佐「ホ……夫れでは保山鎮には敵が居のだね

中島通勝「保山鎮には居るそうぞ御座います併し何の位居るかは知れません

馬場少佐「夫れでは此の邊で我師團の渡河を妨げやふと云ふでもないね

馬場少佐の一行は夜の明けぬうちに此處を引あげて翌朝黃州に御歸着に相成ま

すと云ふと調度野津師團長閣下から

師團本隊は愈々鐵嶋附近に於て渡河をなさんと欲す貴官は同地に赴き直ちに

渡船の準備をなす可し

と申す命令が参つて居りますソコで馬場少佐は兎に角鐵嶋附近の渡場を偵察せ

んと直様鐵嶋附近に御出でになりましてが此處は河巾も猶更ら廣くなりまして

對岸が崖の様になつて居りますから到底渡場となる可き見込が御座いません其

の上黃州から其の渡場まで赴く途中に小河が幾らも御座いまして中々難儀な地

形で御座いますから馬場少佐は師團長の御命令ではあるけれども此の鐵嶋附近

は到底渡場となる可き所ではない矢張十二浦の方が適當である師團長閣下が何

と申されても渡場は十二浦より外にないと御決心に相成ました其處に調度劔水

十二浦
以て渡河
點をなす

驛から戰車の方に参つて居られました武田工兵中尉の一行並に富岡聯隊の補見

中尉の一行が大分船を御集めになつて居りますから直ぐに其の船を十二浦の方

に廻すやうに御命じになりまして少佐御自身には飛ぶが如く黃州に御歸へりに

相成此の時鳳山に居らるゝ師團長閣下に電報を以て渡場偵察の實況並に鐵嶋附

近よりは十二浦の方が適當であると申すことを委細御上申に相成ますと師團長

閣下から渡河の事は一に貴官の意見に任せると云ふ御返電が参りました唯だ其

の御返電ばかりでは御座りません後方に居られた工兵一ヶ中隊が鳳山に着かれ

たと申す電報も同時に参りました此の電報が参りました馬場少佐のお喜びは實

に天にも昇るほどの御心持ちで御座います

何せかと申しますと此の工兵は一度釜山から京城まで百里の處を炎暑を犯し峻

路を踏んで電線架設隊となつて居られたので御座いまして漸う其の方が一

通り済みましたから直ぐと引あげて師團本隊を追ッかけて來られたので御座い

ます馬場少佐は此工兵が果して大同江の渡河に間に合ふか何うか一方なら

ず御心配に相成つて居つた所に調度此の電報が参りましたから斯様に御喜びに

なつたのも誠に御尤で御座いますスルト其の翌十日に其の工兵中隊が鳳山から早速御着になりました御着になりましたのは可う御座いますすが只今も申すやうに電線架設隊で非常に御疲れになつて居る所を其の儘休まずに晝夜兼行で以て師團本隊を追ッかけて来られたので御座いますから將校も兵士諸君も皆顔色土の如く服は汚れ髪は蓬々として殆んど見る影もない御様子で御座います併し場合が場合で御座いますから元氣は凜然として少しも衰へず殊に平尾中尉の小隊では臨津江を渡る時御使用になりました板橋や桁なすをつかり御持になつて居ります馬場少佐之に格別感心を致されました

馬場少佐「板橋や桁を持つて来るやうに云ふて遣つたが此の糧食でさへ運搬の出來ないほどの場合だから迎てもむづかしいだらうと思ふて居つたが能くマア持つて來たね

平尾中尉「随分困難で御座いましたけれども之れがなくては大同江が渡れまいと思ひまして……」

馬場少佐「勿論左うだけれども牛馬などは何うして手に入つたのか

平尾中尉「牛馬も少々御座いましたけれども迎ても牛馬ばかりに駄けるわけに參りませんから兵が皆出來得るだけ自分の荷物を置いて担ぎました

馬場少佐「夫れは實に感心だ皆左う云ふ心掛で居つて呉れ、ば實に大丈夫だ感心々々

と飽まで御感賞に相成扱只今お着きになつた其の工兵隊を之れから直に十二浦に出して渡河の準備をさせると云ふ御決心を中隊長立案者曰く此中隊長の姓名を審かにせず遺憾となすに御話になりますと中隊長は此の疲れた兵を休ませずに直ぐと使ふ事は如何で有るか御考へになりました

中隊長「何うで御座いますしやう之れから明朝まで休ませるわけには參りませぬいか兵が餘程疲れて居りますから……」

馬場少佐「イヤ、迎ても休ませるわけには行かん
中隊長「夫れでも此の儘に使つたら兵が皆死んで仕舞ますよ

馬場少佐「死んでも仕方がない死ぬまで使ふのだ……左うしなくては迎ても間に合はぬ師團の前衛は明朝から渡河を始めると云ふて居るではないか小官だつ

て兵は可愛さうと思ふけれども仕方がない死ぬまでもやるのだ
何うで御座います隊長となつて誰か其の部下の兵をお愛しにならぬ御方が御座
いさしやう隊長として部下を愛するのは猶親として子を愛するやうなもので御
座います然るに其の部下の兵が死んでも構ぬから死ぬまでやれと云はれるのは
實際當時の状況が如何ほど切迫致して居るかと申す事が分るので御座いますソ
コで馬場少佐は只今着ればかりの工兵隊の中一ヶ小隊を舟を集める爲め鎌島
の方にお出しになり自から其の中隊長と共に外の二ヶ小隊を率ひて其の夜直ぐ
と十二浦に出でられました十二浦に出られましたして其の夜徹夜に破舟の修理をお
始になりました

明くれば九月十一日前夜の徹夜で何うか斯うか舟の修理も出来五六艘だけは間
に合ふやうになつて居りますと午前早々に早や師團本隊の前衛富岡中佐の一隊
が此の十二浦にお着になりましたから馬場少佐は部下の工兵に命じて直ぐと渡
河を御始めさせになりました所が中々潮流が急で以つて思ふやうに参りません
其の混雑の最中に下流の方から何とも知れぬ二艘の舟が席帆を揚げてやつて参

りました

兵甲「ヤー妙な舟が来た

兵乙「ヤー〜妙な舟だ矢張朝鮮船か知らん

馬場少佐其の外の將校方は双眼鏡で御覧になりましたして

馬場少佐「ナール程……ヤー之れば支那の船だ……アー……アー支那人が乗つて

居る

と云ひながら御覧になつて居りました

馬場少佐「オイ〜彼の舟を一ツ射撃して……命中らぬやうに射撃して……射撃たら

何うするか逃げ出すか止まるか……若し逃げるならば命中るやうに射撃して

と申されますから兵は直ぐに舟を漕ぎ出してボン〜ボン〜と凡そ十四五發

も射撃しましたが一艘は斯くと見るや否や楫を取り直して直ぐに逃げ出しまし

たが一艘は其の儘帆を下ろして其處に止りました止まつたど見るや此方の舟を

其傍に漕ぎ付けて御調べになりますと紛ふかたなき支那船で商人体の支那人一

名同丁稚体のも一人並に支那婦人の幼兒を抱て居るものが一人其の下婢と見

るべき朝鮮婦人一名外に舟子三名は乗て居りますソコ其の舟を此方の岸に引付けて一應お調べになりますと支那の大孤山から商用の爲め平壤に赴くものであると云ふ事が分りました依つて其の婦人子供だけを其の儘舟の中に残し男子だけは皆縛て黄州の師團司令部にお押送になります

第五十三回

扱師團本隊は師團司令部を始め各隊とも一方ならず困難をお犯しになりました就中糧食欠乏の中をお渡ぎになりまして漸う黄州にお着きに相成馬場少佐の上申によりまして愈々十二浦から渡河を始め事に御決定に相成ましたが此の時大島混成旅團は之れから五里ほど先きの中和に居られますから師團長閣下は先づ豫ての計畫通り大島混成旅團を翌十二日から平壤の對岸まで進ませよう

と御考へになりまして其の爲め一ツの訓令を御出しになりました此の訓令は上原工兵中佐が急行で以て中和に御持ちになりました

貴官より屢送る所の詳細なる報告に依り是れまで大同江の左岸に在りし敵の

上原少佐
黄州に赴

前進兵は貴官の前進の爲めに漸次平壤に退き彼の本軍に合するを知れり察するに彼は大同江を前にし峻に謀て我を待たんとするものならん余は包圍運動に依て敵を攻撃せん

とす 貴官は其の旅團を以て行軍計畫書の如く明十二日より平壤の前岸に接近し敵の兵力及び注視を力めて貴官の方に牽留し元山朔寧兩支隊及び余の運動を容易にす可し又爲し得らるゝ限り朔寧支隊と連絡す可し

余は十五日を期し平壤を攻撃せんとす此日迄は貴官は成る可く眞面目の戦を避け深く自から警戒すべし余は明日より十二浦に於て渡河を始む而して本隊の行進路及び日々の到着地點は大凡行軍計畫書の通りなり貴官は十二日に於ける前進運動及び其の任務を達するに兵力微弱なりと考へざる限りは其の旅團より歩兵一二大隊を十三日の夕までに水津浦に至らしめ余の直轄に歸せしむ可し

と斯様な御主意で御座います夫れで大島混成旅團はズツと前に伺ひました通り十二日に中和を發し平壤の對岸まで御進みに相成つたので御座ます

師團司令部にては斯様に彼是と前進の御用意になつて居りますと其の日の午後で御座います前回は伺ひました通り十二浦の渡場に居らるゝ馬場少佐から致しまして五名の支那人を押送つて参りました然るに其の時師團司令部で支那語のお出来になるのは福島中佐で御座いますから師團長閣下は中佐を御呼びになりまして

師團長「オイ福島中佐……彼の今馬場少佐から押送つて来た支那人だね……彼れを一ツ札問て見ないか……今度支那からやつて来たのだと云へば猶更ら何か敵状が分るかも知れぬ……」

福島中佐「ハイ……小官も今左様に思ふて居つた所で御座います……之れから一ツ札問て見るで御座いますしよう

と申して福島中佐は兵卒に其の五人の支那人を引かせ師團司令部となつて居ります黄州の兵馬節度營の裏手の山の中腹に御出でになりまして札問をお始めになりました扱て五人の身分はと申しますると其の商人体のもものは姓名を孫錫泰と申し大孤山の商人で御座います丁稚体のもものは楊某と申して矢張孫錫泰の丁

支那商人
福島中佐
札問す

稚で外の三人は何も知らぬ其の船の舟子と分りましたソコで中佐は先づ孫をお札問になりますと一萬何千と云ふ支那兵が平壤に出で居る事であれば何にぞ平壤に運んで行つて商ふたらば必ず儲かる事もあらうと申さば我國で軍隊を相手に御用達を致す酒保ども云ふが如き性質の商人であつて平壤の支那兵と別段の關係のない事だけは儲かに分りました併し福島中佐は表面に非常な威厳をつくるひ爾等は平壤の支那兵と通じて居るに相違ないと云ふお顔付で言葉も荒らかに猶ほ御札問に相成御札問の傍ら此の孫錫泰が持つて居りました書類を一々御検めになりますと色々な書類がある中にも大孤山の守備となつて居る盛字營管官即ち我國で申せば大孤山の守備大隊長何某から平壤に居る支那兵の統領豊陞阿に宛てた手紙が通入つて居ります中佐取る手おとしと封押し切つて御覽になりますと

平壤の華兵不足を慮り猶ほ目下旅順太沽の方より續々海路にて繰出し且つ兵器彈藥を追送する爲め數艘の運送船を以て鴨綠江岸に運送中なり運送船は軍艦を以て之を護衛し大孤山沖海洋島附近を通過するを見れば其の平壤に到達

するは遠きにあらざる可し

と云ふやうな主意が認めて御座ります中佐且愕き且喜び心の中でハテ左様な敵状になつて居るかど轟く胸を面にもお現はしにならず猶ほ落ち付て

中佐「貴様は此の手紙を何うして持つて居るのか

孫錫泰「ハイ夫れで御座いますか……夫れは私が平壤に参ると云ふ事を聞きまして大孤山の營官が平壤に行つたら此の手紙を儘かに届け呉れいと依頼ましたから持つて参りました

中佐「然らば貴様は此の中に如何なる事が書てあるかも知らんだらう

孫錫泰「無論存じません

中佐「此の頃兵隊や兵器彈藥あぞを積んだ運送船が鴨綠江の方に行く爲め軍艦に護衛されて大孤山沖を通ると云ふがソんな事があるか有るならば貴様も見ただらう

孫錫泰「左様で御座います度々通るのを見ました

之れで福島中佐は近頃踪跡不明と聞きつる支那軍艦が海洋島から鴨綠江の方に

かけて徘徊して居ると申す事を御信用に相成再び御札間の未備等は平壤の支那兵に通じて居るに相違ないけれども特別の御沙汰により死一等を減じて遣ると御申渡の上五人共其の頭髪を断り孫と其の丁稚は黄州に拘禁し舟子三人は十二浦の馬場少佐にお返へしになりまして舟子の事で御座いますから渡河の手つだひをさせる事にお極めになりまして斯くて福島中佐は支那軍艦の踪跡分明なるかは一刻も猶豫ならしと師團長閣下に上申の上直ちに軍用電信を以て其の時仁川に居らるゝ新納海軍少佐に御通報に相成ましたスルと新納少佐より其の事を伊東司令官に御報告に相成り遂に此の一片の電信が海洋島の大海戦となつたのは其の當時より致して有名な事實で御座います

師團司令部は愈々九月十二日を以て黄州を發し十二浦に於て渡河をお始めになりましたが富岡中佐の指揮に屬する本隊の前衛は前にも伺ひました通り既に其の前日から渡河をお始めになつて居ります其の時の師團命令並に軍隊區分は如何にと申しますれば

敵の前遣兵にして是迄大同江の左岸に在りしものは我混成旅團の前進の爲め

に漸次退却し平壤に入れり察するに敵は全力を以て險に據り平壤を固守せんとするものならん
 予は本隊を以て今日より十二浦に於て渡河し河に沿て前進せんとす是れ來る十五日全師團を以て平壤を包撃せん企圖なればなり
 元山朔寧兩支隊は近來の天候を以てすれば多分行軍計畫書の如く前進を續行しあるものと察せらる
 混成旅團は十二日より平壤の對岸に位置し元山朔寧の兩支隊及本隊の爲めに平壤に在る敵を牽制す可し
 余は本隊を以て更に左の如く區分す

前衛

- 司令官富岡中佐
- 步兵第廿二聯隊第二大隊及第一大隊の半大隊歟
- 騎兵第二中隊の一分隊
- 砲兵第二大隊(一中隊歟)

左側衛

- 司令官今田少佐
- 步兵第廿二聯隊第一大隊(二中隊歟)
- 騎兵第二中隊の一分隊
- 獨立騎兵部隊
- 司令官木村少佐
- 騎兵第二中隊約二小隊歟

本隊

- 步兵第十二聯隊の第二大隊
- 砲兵第二大隊の第四中隊
- 步兵第十一聯隊の第三大隊
- 衛生隊

前衛及左側衛は一團となり富岡中佐の指揮にて本日鶉洞迄明十二日大井洞迄十三日留鶉洞まで行進し而して前衛は其の日の夕迄に沙川迄達す可し

左側衛は留鶴洞より分進し十三日江西縣に到着し而して十四日には同地若くは其の附近より飯山縣より平壤に通ずる道路上長水洞に出で然る後十五日には此の路上を平壤に向て行進し且つ本隊に連絡して動作す可し
 獨立騎兵は明十二日午前八時より十二浦に於て渡河を始め同日月江に至り十三日富岡前衛の後尾に追及し留鶴洞より左側支隊の先頭に在て行進し江西縣に達し飯山方向を搜索し而して十四日より以後は江西縣若くは其の附近より東北方順安に向て進み元山支隊に連絡し義州街道及飯山より平壤に通ずる道路間の地に動作し且つ常に左側支隊との連絡を確守す可し
 本隊の諸隊は友安中佐之を指揮し明十二日午前八時半より渡河を始め同日月江に十三日保山鎮に至り而して十四日には前衛に續行す可し
 余は十二日月江に十三日保山鎮に宿營し十四日より前衛に在り
 斯様に周到綿密の御命令で以て運動をお始めになりましたがお困りになつたのは十二浦の渡河で御座います十二浦での大同江の河中は前にも申上りました通り大凡そ千五六百メートル即ち十丁計りの河中で御座います此の廣い河中に以

十二浦の大困難

て来て潮流の急な事と云ふものは逆ても我國などで見る事の出来ぬ有様で御座います元來此の大同江の潮流と申せば有名なもので御座いました潮の満ちて来る時も干て行く時もジャ〜と渦巻きかへり此の潮流に抗する時は如何なる大艦と雖も瞬く間に押流されて仕舞ひ場合によつては鐵鎖を押し切つて船體を破壊した例も少なくないと申すことで御座います斯くの如く潮流の急な上に其の満潮と干潮の差と申すものは又た格別で御座います三丈から四丈にも及ぶので御座いますから其干潮の時分には岸邊の泥の上を通らなければ舟に乗る事が出来ません左うして其の泥が又た膝から股を没する程の深さで其の爲め兵士諸君や馬匹の難義と申すものは實に一方ならぬもので御座いますソコで馬匹だけは満潮の時に渡すとお極めになりましたが満潮の時と云ふものは一日兩回にして僅か四五時間より外にはないので御座います併し馬匹は據るなく満潮の時に渡す事になりまして其の外は潮時を見はからふわけには参りません何時でも端から端にお渡しにならねば奇りませんヌルと其の潮流の急な時には其の舟がズ〜押流されて仕舞ひまして辛ら〜四五百間も下流の對岸に漕

ぎ付け扱上陸をすまして其の虚舟を元の處に漕長さうとするには其の對岸に沿ふて段々上流の方へ漕ぎ上せ左うして再び流れ渡りに元の位置に帰へりになるので御座いますソコで一艘一回の渡河をお済しにゐるのにも非常な時間がかかります其の上此の渡河の爲め御集めになつた舟の數は全体で二十艘ばかりで御座いましたが大抵皆破れ舟で御座います一時修繕を加へて間に合せにお使ひになつて居るので御座いますから最う其の渡河の第一日即ち十一日に數艘を破損し第二日即ち十二日に三分一を破損されたやうな事で益々渡河の時間がかり工兵隊では晝夜一睡もせず食事の暇もなく二日間で師團本隊の全部を御渡しになるのが到頭四日間かゝつたやうなわけで御座います野津師團長閣下を始め師團司令部が黄州から十二浦にお出でになりましたのは十二日の午前十時頃で御座いました其の時馬場少佐は工兵隊を指揮して必死とお働きになつて居ります野津師團長閣下之を御勞はりにありまして

師團長「ヤー御苦勞……だ何うだ最う少しは渡したか

馬場少佐「随分困難で御座いますすが昨日から最う歩兵九ヶ中隊と砲兵一ヶ中隊だ

け渡しました

師團長「左うか……夫れでは己己れの薩音も之れから直ぐに渡らうか

馬場少佐「今は不可ません少し御待ちになつた方が可う御座います併し直ぐに渡せと仰せになれば何時でも御渡し申しますすが今は干潮が御覽の通り急で御座いますからお乗りになつた舟が何處まで流れるか分りません流れたと申しましても對岸にお着になつたら直ぐと御上陸を願はなければなりません閣下だからと申しまして其の流た舟を最少し漕ぎ上せなぞと仰せになつては困ります……夫れでモ少し御待ちになつた方が宜しからうと存じますモ少しお待ちになつて満潮の時になりませれば屹度此の眞對岸にお着け申して上げます

師團長「ホー左うか夫れではモ少し待つとしよう

と流石強情の野津師團長閣下も此の潮流には成され方もないものと見えまして満潮までお待ちになる事になりまして夫れから其處の土手の上に露天の晝寢で應がて舳の聲がグウ〜と聞えます

第五十四回

お話が少し岐路に這入るわけで如何かとも存じますが茲に一席伺つて置きたいのは彼の支那船の婦人や船頭共が結局如何相成るかと思はれ申す事で御座います實は此お話は平壤の戦争がすつかり済んで仕舞つた後で伺はふかと存じて居りました夫れよりも只今の方が却て花かど存じますから少々岐路に這入るにも拘はらず此處で一席だけ相伺ふ事に致しました

扱野津師團長閣下が十二浦にお出でになつて御覽になりますと云ふと其の前日福島中佐が頭髪を斷つて黄州から馬場少佐に御返附しになりました三名の支那舟子がイヤモウ一生懸命となつて働いて居ります腕力も達者で海川の事には能く慣れて居るので御座いますから役に立つの立たないのと思はれ申して能く雇ふても使ひたい位の働振で御座います師團長閣下之を御覽の上大變御満足になりまして

師團長「アー能く働いて居る……婦人が一人居ると云ふ事ぢやが夫れは何處に居るのか

馬場少佐「婦人で御座いますか……彼れは彼の支那船の中に居ります
師團長「左うか夫れは可愛さうだ……オイ、福島中佐一ツ能く慰めてやらぬ

福島中佐「宜しう御座います之れから行つて見ましよう

と申して福島中佐が其の支那船の繋である所に御出でにならうと致しますと上原少佐馬場少佐仙波少佐方が福島中佐におからかひになりまして

「福島君旨い用を云ひ付かつたな

「僕等も支那語を習つて置けばよかつたハ、ハ、ハ、

「福島君の艶福羨ひべしだハ、ハ、ハ、

「長く其の船の中に這入つて居つては不可せんでハ、ハ、ハ、

と口々に申されますと福島中佐も負けまいと思はれまして

「好男子此の艶福に逢ふ何ぞ怪むに足らんやだ

などと戯言を云ひながら扱其の支那船にお出でになつてシート其の中をお覗きになりますと成程一人の支那婦人が幼児を抱て座つて居りますが併し窺宛た

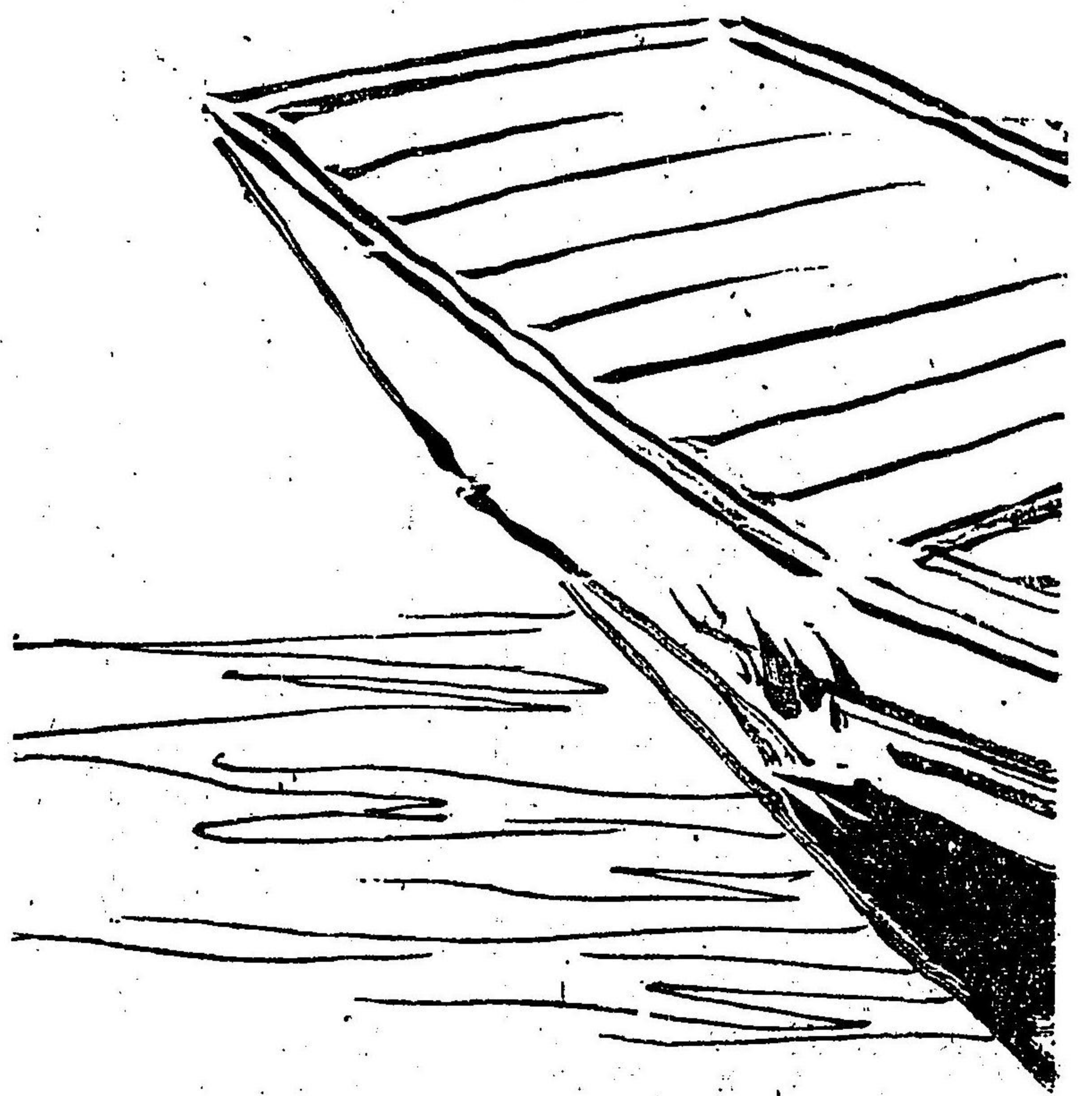
福島中佐の艶福



三〇二

る美人と思ひの外髪は
 亂れ顔は屋根屋の顔の
 やうに垢にクスボリま
 して誠に見る影もない
 婦人で御座います福島
 中佐言葉と和げ
 中佐「オイお前は大狐
 山から来たのか
 支那婦人」左様で御座い
 ます
 中佐「平壤に何用かあ
 つて行くのだ
 支那婦人」妾の良人が平
 壤の電信局に移つて

第五十四回



三〇三

居りますから夫れを頼つて参るので御座います

中佐「ホ、一良人が平壤の電信局に務めて居るホ、一……電信局の何を務めて居るのか

支那婦人「妾は能く存じませんが何んでも會計の方かと存じます

中佐「左うか會計の方か……」

支那婦人「何うぞ早く平壤に行く事の出来るやうに願ひます……途中で斯んな目に逢ふとは思ひませんで御座いました家を出で、一日か二日船の中に辛抱して居れば直ぐに平壤に行けると聞きましたから其の積りで参りました所が圖らず斯んな目に逢ひまして誠に困ります御覽の通り生れて三ヶ月になる此の孩兒が居りますのに食せるものも飲ませるものも御座いませぬ乳は少し出で居りましたが昨日から其の乳が少しも出なくなりましたおまけに使つて居りました朝鮮婦人の女中も昨夜何處へか逃げて仕舞ひました……」

中佐「夫れは誠に氣の毒だ

支那婦人「阿那樣妾を何うして下さるお積りで御座いますか……早く平壤に遣つ

ていたいたさう御座います

中佐「何うして下さると云つた所で仕方がないぢやないか……其の上平壤には之れから戦争があるのだから今行つては却て危険い夫れより不自由でも此處に斯うして居つた方が安心だ其の中には又た戦争もすむから戦争が済めば平壤に送つて遣るは……」

三千里程の亞細亞大陸を馬蹄におかけになつた福島中佐も孱弱き婦人に對しては此の通りで御座います併し之れは福島中佐に限らずイヤ之れから平壤の敵軍を屠らんと意氣込切つて御進みになつて居る此の場合に敵方の婦人を捕へても更に怒をお遷しになる御様子のないのみか却て之を保護し之を憫まると申すのは實に我軍隊の美德で御座います之れが若し敵味方反對の位置に在つたらば果して如何で御座いましょうか夫れこそ又何んな目に逢ふたかも知れせん斯くて此婦人は四五日の間此の處にお留めに相成彈藥大隊などが此處をお通りになつた時は色々なものをお與へになつたと申す事で御座います左うして平壤が落ちますと云ふと早速此の婦人を平壤にお呼び寄せになりましたが悲しや此

の婦人が戀しくと尋ねる良人は無論行衛が分りません行衛をこるか生死のは
をすら分らなもので御座いますソコで師團司令部にても大變氣の毒に思はれま
して何うか詮索の途はないかとお考へになつて居りますと調度澤山な捕虜の中
に平壤の電信局の技師が居りますから其の男に尋ねたらば何か手がかりがある
かも知れぬと云ふので其の婦人を捕虜の技師にお引き合せになりませすと其の技
師の話に成程其の人は電信局に居つたに相違御座いません調度日本軍に攻めら
れて支那軍が降参旗を擧げた其の日暮までは儘かに電信局に居りました併し其
の後は何處に行つたか分りません多分義州街道の方から逃げたらうと思ひます
併し愈々無事で逃げ了せたらか又は逃げる途中で日本軍に撃ちとめられたか其
の邊の事は少しも分りませんと話の一伍一什を聞き了り最後の生死が分らんと
云ふ一言にガツカリ腰をぬかし

「エー恨めしい
と雨なす涙に泣き伏しまして再び問返へす力も御座いません
ソコで師團司令部にては十二浦から三名の支那舟子を平壤にお呼び寄せに相成

件の支那婦人並に黃州に居ります孫の丁稚楊とともく本國大孤山にお歸しに
相成る事に極りました併し大孤山に歸へすに就ては此の三名の舟子に平壤の模
様を能く見せて遣るが宜しい見せて遣れば必ず本國に歸つて日本軍大勝利の
をするに相違ない大孤山邊に居る支那兵が此の話を聞いたら必ず驚くだらう左
して一ツ士氣を沮喪さして遣るのも時に取つての計畧ならんと御考へになりま
して其の三人の舟子に支那兵討死の場所や捕虜の溜所などもすつかり御見せに
なりまして扱福島中佐から其の舟子に御申渡が御座ります

中佐「貴様共は敵國の人民ではあるけれども日本軍に抵抗しないものは決して
之を害するなと云ふのが我日本 天皇陛下の御思召だから貴様たちも之れか
ら大孤山に歸へして遣る

舟子「ハイ……左様で御座いますか有りかたう御座います
中佐「彼の船も何も其の儘に貴様共に呉て遣るから夫れに乗つて早速歸るか宜
い其の代りに彼の婦人と丁稚も元の通り船に乗せて行かなくては不可ぬ
舟子「宜しう御座います彼のにおかみさんも彼の小僧も乗せて参ります……乗せ

て参つて屹度送くつて遣ります

ソコで福島中佐は一人に付廿五圓即ち合せて七十五圓の銀貨を取出し

中佐「十二浦では大變能く働いて呉れた感心に能く働いて呉れた……依て將軍閣下から其の御褒美として此銀貨を下さる有りがたく頂戴致せ

舟子「夫れは畏れ入ります……生命をお助け下さつた丈けでも誠に御慈悲と存じて居りますのに此の大金まで頂戴致しましては畏れ入ります之れだけは何うぞ御無用に願ひます

中佐「何にソんなに遠慮しなくても宜しい収つて置け……日本軍は仁義の師だ夫れで將軍閣下から之を下さるのだ

舟子「畏れ入ります

中佐「何に遠慮するに及ばぬ収つて置け」

舟子「夫れでは有り難く頂戴致します誠に畏れ入りました

三名の舟子は申すに及ばず支那婦人も丁稚の揚も仁あり義ある我日本軍の慈悲心にシミ〜感服致しまして早速大同江を乗り出しました其の大孤山までの船

中でも恨き勝ちものは件の支那婦人で御座います平壤に行けば最愛の良人に逢ふて留守の憂き目や小兒の生長なすを語りもし語られもせんと勵み切つて來る途中で日本軍に捕はれ日本軍のお慈悲で平壤に着きは着きながら聞て見れば良人の在所不明らぬのみか其の生死さへ定めなく心も千々に紊れ髪若しや義州街道とやらの夜討ちに屍を曝しはし給はぬか……イヤ〜平素祈れる神佛の冥護に依つて必ず無事に切り抜けて今頃は故郷に歸つて居給はんも圖られずと何かのさほりにでも有りさうな思で大孤山に着港致し直ぐ様我家に歸つて見ましたけれども悲しや良人から何の音信さへも参つて居りませんソコで愈々失望落膽良人の討死争ひ難しと且つ嘆き且諦めて居りますと云ふと不思議なる哉調度其の翌晩になつて良人が歸へつて参りました即ち平壤から義州街道を抜け出で泥にまみれ雨又濡れて食ふものも食はず飲むものも飲まず百里近い處を五里歩き十里歩いて漸ら〜我家にたどり着いたので御座います其の時夫婦の喜びが如何であつたかは申上るに及ぶまいと存じます

夫れから又たお話が變りまして一人黃州に残されて居ります孫錫泰は師團司令

部が平壤を發して九連城の方にお向ひになります時何かの役に立つ事もあらうと福島中佐の傍にお付けになつて居りましたが其の九連城が取れましてから福島中佐は一ヶ大隊の兵を率ひて大孤山にお這入になる事になりました時中佐は大孤山から一里半ばかり手前の修家堡子と申す所で御出でになりましたして扱孫錫泰に御申付けになるには

中佐「貴様は大孤山のものぢやから一ツ云ひ付ける用事がある……」

孫錫泰「何の御用で御座いますか……」

中佐「日本軍は明日大孤山に這入る積りぢやから貴様は之れから直ぐと大孤山に歸つて大孤山の市民に日本軍の模様を話すのだ……日本軍が一毫と雖ども人民を犯すことなく紀律正しく仁義の師であると云ふ事は貴様が平壤以來見て居る通りである……何も飾つて話すには及ばぬ貴様が實際見て居る通りの事を話して聞ければ澤山だ左うしたら大孤山の市民も少しは安心するだらう……」

孫錫泰「宜しう御座います夫れでは之れから大孤山に歸へりまして委細日本軍

大王來

の模様を話すで御座いまして、申して其の直ぐと大孤山に歸りましたが其の翌日に至つて中佐が大孤山の市外れまで御出でになりますと件の孫錫泰を先頭に立て大孤山の豪商家の主人や重立たるものが百餘名も出迎ひまして地上に跪き

「大王來恩民等何ぞ其の徳を仰ざらん」

と申して周の文王が函を伐つ時の模様も宜しくと云ふ工合で御座います最初が此の通りの人氣で御座いますから日を経るに従つて段々人心がなぶき第三師團が海城の方に進まれる時も糧食運搬の爲め牛車馬車を澤山集めて我日本軍の爲め餘程都合であつたと申す事で御座います又た福島中佐は大孤山に這入つて後ち彼の婦人や丁稚の事を御尋ねになりました所が市民の話に婦人は良人と共々山東省の方に参り丁稚も元とが山東の生だから其方に歸つたと申す事で御座いまして夫れから又た三人の舟人はと申しますと之れは大孤山から四五里も離れた濱邊のもので御座います三人共福島中佐が大孤山に来て居らるゝと云ふ事を聞て態々お禮に参つたので御座います

兎に角十二浦に於て偶然我軍に捕はれた一艘の支那船が或ひは黄海海戦の導火となり又た大孤山市民歸服の原因となり且つは其の六人の役者が結局何うなるとお話のまどまりが付くと申すのは實に不思議な因縁で御座いますして之も亦た平壤戦争中の一幕と見なければなりません併し師團本隊の御行進中にお話がチヨツと横道に這入つたので御座いますすが次回よりは愈々本題に立ち戻ります

第五十五回

十二浦の渡河は實に大變で御座いました所謂河巾は廣く潮流之急く舟は不足と云ふ總ての困難と不便が集つて居るので御座いますから工兵隊で以て必死と御盡力のあつたにも拘はらず渡河の爲めに到頭四日間ほどかかりました是れまで内地の演習なぞで或は木曾川だとか或は利根川だとか御渡りになつた経験は度々あつたので御座いますすけれども夫れは總ての材料に不足がなく河も此の大江などとはわけが違ひまして半分の廣さもないので御座いますから日本軍に取りましては斯様な渡河は實際始めて、御座います後ち又た鴨綠江を御渡りに相

工兵隊の苦勞

成ましたけれども其の時は既に軍橋なども出来ましたから假令困難はあつても此の十二浦とは全く趣が違ひまして此の十二浦の渡河ばかりは我國の軍隊あつて以來實に始めての御経験で御座いますソコで工兵大隊長馬場少佐を始め工兵隊の將校兵士の御骨折は實に何とも斯ども申しやうが御座いません
斯様に困難の爲め渡河の時間が段々手間どり頭十一日から十四日まで掛りました兵の爲め行軍計畫に狂ひを生じ師團長閣下は及すに及ばず各隊長方の御心配と申すものは實に大變なもので御座いますサア急がないと十五日の間に合はぬぞ時機を誤るぞと渡河の濟んだ順に晝夜兼行の行軍どころか飯を炊く間もないと云ふ有様で御座います飯は何うか斯うかして炊きましても夫れを食ふ暇が御座いせんから各々歩きながら飯をかじつて居られますスルと最う十二日から致して船橋里の大島混成旅團の方に當りドドドドと大砲の聲が徹かに聞えます十二日にも聞えれば十三日にも聞えますソコで此方は益々急ぎ立ち「サア混成旅團はやるく……」と恐ろしくしたら間に合はぬぞと將校のお方も兵卒諸君も氣が氣では御座いせん然る所此の大同江と云ふ河

師團本隊の急行

岸に沿ふてお進みになつて居るので御座いますから道と云ふ道もなく申さば田の畔見たやうな所ばかりで御座いますからスベツタリ轉んだり中々歩をりません歩りませんのを無理にお歩きになつて居るので御座います師團長閣下も此の困難を犯しながら十三日の晩天に赤壁洞と申す所を發して保山鎮にお向ひになりました保山鎮には既に富岡中佐が其の前衛を率ひて御待ちになつて居る筈で御座いますから早く其の前衛に追ッ付きたいと大變お急ぎになつて居りましたが調度其の途中で富岡中佐から報告が参りました其の報告を御覽になりますと前衛は本日午前保山鎮を占領す

士人の言に依れば保山鎮には敵の馬隊ありしも昨十二日平壤方向に退却したりと

敵狀既に右の如くなるを以て前衛は保山鎮より前進して松湖附近に露營せんと欲す

と斯様な御主意で御座います師團長閣下は之を御覽にありまして前衛司令官の報告を御排斥になりました何せ御排斥になるかと申せば保山鎮から少し進んだ

所に藍洞河と申す小さい河が御座います小さい河では御座いますけれども其の河を渡るには是非舟がなくつてはなりませんソコで師團長閣下は十二浦で渡河をすました舟を糧食運搬旁此の藍洞河の方に廻はして使用すると云ふ御考で其の舟の来るまでは前衛を以て保山鎮を固め其の中に後續部隊をスツかりまじめる事に御見込を付けて居られました所に調度此の報告が参りましたから忽ち御排斥になつたので御座います御排斥になつて直ぐと

予は晩くとも今夜までには其の地に達せんと欲す

貴官は予の豫て命令し置きたる如く保山鎮より前方には一步も進む可らずと云ふ命令を御下しになりました即ち前衛司令官富岡中佐が松湖附近に露營すると云はれたのを御制止になつたので御座います左うして師團長閣下は益々馬蹄をお急がせになりまして其の日の午後三時頃保山鎮に達されました其の日の夜でなければ達けまいと思ふて居られました保山鎮に午後三時頃着かれましたから大變な御満足で御座います其の方は大變な御満足で御座いますけれども前衛は果して保山鎮に居られませんか即ち既に松湖まで御進みにあつて居りますか

ら師團長閣下は殊の外御立腹に相成直様傳騎を遣て富岡中佐を御呼び付けになりました富岡中佐は師團長の御用と云ふので其の松湖から早速馬を飛ばして保山鎮にお出でになりますと云ふと流石沈着な野津師團長閣下も少しく御顔色が變りました

野津師團長
富岡中佐
佐を叱す

師團長「富岡中佐……貴君は何せ松湖まで進んだか……アイ程進むなど云ふて置たではないか

富岡中佐「成程御命令では御座いましたけれども此の保山鎮まで参つて見ました所が最う敵が此の附近に居りませんから……」

師團長「敵は居あくても左う勝手に進んでは困るではないか勝手に進む位ならば命令も何も要らぬ……左うして前哨は何處に張つて居るのか

富岡中佐「前哨は松湖からズッと先きの達摩山に張らして置きました
師團長「左う進んでは實に困る……」

富岡中佐「實は本隊が藍洞河をお渡りになる時前方で援護した方が然る可き事かと思ひまして獨断で進んだので御座いました併し左う仰せになれば此處まで退くで御座いませう

師團長「イヤ最う仕方がない……併し其の達摩山から先きには一步も進む事はならぬ少しも動く事はならぬ

と御叱りになりました毎度伺ひます通り總て軍人諸君は功名心即ち他よりも成るだけ先さんじたいく」と云ふお心が胸一杯で御座いますからツイ斯様に御進みになつたので御座います師團長閣下となりましては又た全師團の運動の事を御考へになつて居りますから御遠慮なく斯様に御叱責になつたので御座います

夫れから又た前に伺ひましたるが如く師團長閣下から大島少將閣下に御下しになりました訓令の中に
貴官は十二日に於ける前進運動及其の任務を達するに兵力微弱なりと考へざる限りは其の旅團より歩兵一二大隊を十三日の夕迄に氷津浦に至らしめ余の直轄に歸せしむべし
と御座りまするが其の氷津浦と申しますのは調度此の保山鎮の對岸になつて

居りますソコで師團司令部に於かれましては最う其の隊が對岸に來て居らねばならぬがと其の十三日の夕刻に頻りと双眼鏡を以て對岸を御眺めになつて居ります双眼鏡も高い所に登つて眺めますれば大抵遠い所まで能く見えませぬけれども對岸も此方の岸も平地で御座いますから能く展望がさゝませんさゝませんけれども能く御覽になると何だか日本兵がチラ／＼見えるやうで御座います上田參謀長仙波少佐上原少佐方を始め司令部の各將校皆双眼鏡を御とりになりまして

甲「ア、何うも日本兵だ最う彼處に來て居るに相違ない

乙「左うだ最う來て居なくてはあらぬが併し來たならば誰が一人位は此方に渡つて來さうなものだ

丙「イヤ／＼彼れは人では……

甲「人でない事があるものかア、アレ彼んなに動いて居るではないか

丁「無論人だ日本兵だ儘かだ／＼

と云ふので上田參謀長は師團副官安東中尉を對岸に御出しになりました安東副

官は命令を受けて御出でになりまして果して歩兵第十一聯隊の第三大隊則ち松本少佐の大隊が其處に御着になつて居ります松本少佐は御着になりましてから早速此方に渡りたいと御考へになつて居りますけれども舟が一艘も御座りませんから何とも致方が御座いません師團司令部では豫て十二浦の舟を此處に廻して松本大隊並に中和から此處に出て來らるゝ筈になつて居ります第三野戰病院を渡すと云ふ御考で御座いましたけれども毎々伺ひます通り十二浦の渡河が非常に手間取りましてまだ其の舟が廻つて参りませんから何とも致方が御座いません併し其の舟の廻つて來るのを御待ちになる事は固より出來ない場合で御座いますから對岸の松本大隊でも此方の師團司令部でも色々手をお盡しになりまして漸う／＼二三艘の小船がお手に入りしましたソコで其の日の夜半から渡河をお始めに相成松本大隊だけは其の翌十四日の朝までにスツカリ御渡りになりまして師團長閣下の直轄となられました

此の松本大隊渡河の混雑中に大島混成旅團から緊要な報告が参りました師團長閣下は此の報告によつて始めて平壤の敵狀を悉しく御承知になりました其の報

大島旅團
の報告

告は何う云ふ報告かと申しますと
 水灣橋南方高地に三個の堡壘を築設中なりし敵の一部は昨十二日我前進に依
 て船橋里に退き今尙該地を守備し居れり
 十二日來敵は架橋の工事中なり
 十二日來敵は時々銃砲を開き我陣地内を搜射す併し一ツも命中らず只今左岸
 船橋里に二個の堡壘を作り居れり
 大同江右岸にては平壤市街を中央とし其の左右に幕營八ヶ所を見る各幕營地
 及市街に軍旗林立す王爺趙馬等の字は讀み得べし
 土人の言に依れば支那兵は凡そ四萬人大同江附近に二萬城郭南部高地に二萬
 人ありと
 當地着以來は其の兵力を他に分割せし模様なき尙當方面に敵を抑止する爲め
 後刻より全砲兵群を以て攻圍を施行せんとす
 艾草島附近に淺瀬ありと云昨夜實見せしむる豫定若し此の附近に渡淺點を得
 ば平壤市街の南部より旅團は本攻撃を行はんとす但し可成師團本隊の開戦を

大島旅團
の報告

待ち之と進關する事を勉む可しと雖も潮の干満に依り遲速する事あるやも
 計り難し
 と先づ折様な御主意で御座います之れで以て敵狀も始めて悉しく分り又大島
 混成旅團が餘程切迫致して居らるゝ事も分りました然るに師團本隊は如何にと
 申しますれば富岡中佐の前衛と今田少佐の左側支隊と松本少佐の大隊を除く
 外はまだ五里も十里も後方を行進中であつて中々容易に纏りさうにも御座いま
 せんソコで師團長閣下は一方ならず御心配に相成り直様訓令をお書かせになり
 まして大島混成旅團にお送りになりました則ち其訓令の御主意を申しますと
 貴官の昨十三日午後發せられたる報告只今受領す余は貴官の處置當を得たる
 と又た我將校下士卒の健全を聞き喜悅に堪へず貴官の報に依て敵は尙平壤市
 街の内外に在るを知れり予は昨夜保山鎮まで來り歩兵第十二聯隊及砲兵第二
 大隊の來着を待ちつゝあり但し十二浦の渡河非常に困難なりしを以て此の諸
 隊の重なる部分は猶途中に在り然れども余は今朝九時當地を出發し歩兵第
 十二聯隊砲兵第二大隊の大部分を以て棲鶴灘浦里を江西街道に出で然る後ち

本日は先づ沙川まで達せんとす而して此の運動を掩護する爲め歩兵第廿二聯隊を遠摩山に派遣せり余又一支隊を江西を経て飯山道へ派遣せり第十一聯隊の第三大隊は昨夕余と連絡し今朝余の直轄に屬す船數の少きに困難を感じた

余は明後日朔寧元山兩支隊の動靜を見然る後ち平壤に前進せんとす貴官は先づ夫れ迄は敵の注目を貴官の方に惹き敵をして敵の左右及後方に我軍の包圍運動をなしつゝありと云ふ觀念を起さしめん事を盡力さる可し是れ余の貴官に切望する所なり

困難の情況に拘はらず專使を以て余に戰況を報告されしは尤も感謝する所なり貴官及貴官の郡下の健康國家の爲めに希望す

と先づ斯様な御主意で御座います夫れから師團司令部は其の十四日の午前九時まで保山鎮で後續部隊のお着きになるのを待つて居られました九時までに御着になつたのはタツタ歩兵第十二聯隊の第二大隊の半大隊と砲兵第二大隊の本部及び第三中隊計りで御座いまして其外のお隊は中々以てお着になりません是

に於きまして師團長閣下は其お着になつた丈の隊を率ひて保山鎮を御出發になりました其の行進路は藍洞河を渡つて松湖の方を指して御出でになる筈で御座いしましたけれども其の方は道路が悪う御座いますから俄かに模様替へとなり藍洞河を渡らずに左に折れて江西街道に出で其の江西街道から其の十四日の夜に沙川にお着になりました前衛であつた富岡中佐のお隊は此時左側支隊となつて新興洞万景臺五里洞附近の高地に警戒線を張り沙川の師團本隊を掩護致して居られます沙川から平壤までは最早三四里の里程で御座います

第五十六回

お話がチヨツと後に戻りますすが茲に是非一ツ伺つて置きたい事は歩兵第廿三聯隊の第三大隊長伊藤武蔵少佐の御病死で御座います全体軍人諸君が戰場に赴かれる時は固より生きて還る御考へはないので古から屍を馬革に裹むとか主君の馬前に討死するとか申してゐるやうに軍人諸君の御精神は又た格別なもので御座います左りながら戰場に赴て戦死するのでなく戦争の前後に病死するとなり

ましては誠に遺憾千萬の御話で唯だ其の御本人に取つて遺憾と云ふばかりでなく他人から見ましても實に涙の種で御座ります諸君も御承知の如く今度の戦争で御病死されたお方は名譽の戦死をされたお方よりも遙か多いので御座いまして誠に御氣毒千萬で御座います此の伊藤少佐御病死の一事は其の中でも極めて御痛はしい御話で御座ります

伊藤少佐は黄州に御着になつた時から既に赤痢の徴候が御座りましたけれども未だ格別の重症と云ふでもなく其の上軍人氣質の負け嫌ひで以て何アに此の位の事が少しも苦にする御様子もなく黄州を御出發になりました十二浦の渡河を濟し其の夜麻加里と申す所までお出でになりましたが左なきだに病勢が次第に募らんと致す折柄で御座いますから此の終日の行軍で誠に御氣遣はしい御容体となりました前衛司令官富岡中佐も頻りに此の伊藤少佐の病氣を御氣遣ひになつて居りますと其の隊附軍醫今村一等軍醫が富岡中佐の處にお出でになりました

今村軍醫「聯隊長殿誠に困ります……大隊長殿の病氣は餘程悪う御座いますかな

富岡中佐「餘程悪いそうちやね……何うも困つた……そりや是非此處に留めて行かぬと不可んぞ

今村軍醫「左うで御座います是非留めて置かぬと不可んと思ひますけれども自分には中々留まらるゝやうな積りぢや御座いません

富岡中佐「夫れだから困る黄州で少し残つて養生するが可いと餘程左う云ふたけれども何うしても聴かないもんだから

今村軍醫「今度無理をして出發れますと到底快復の望は御座いませんよ

富岡中佐「貴官から一つ十分に其の事を話して聴かせるがよい

今村軍醫「い、ニ小官からは最う何の位左う申したか分りません……けれども中々聴かれる様子は御座いません何うか聯隊長殿からは是非御留めを願ひます

富岡中佐「無論小官からも話すが貴官からも能く話さなくてはいけません

今村軍醫「宜しう御座います夫れでは何うぞ……

富岡中佐「宜しい一應話して聞かなければ命令で残すやうにする

今村軍醫は斯様に御たのみになつてから其の隊にお歸へりになりましたが其の

中曉天近く又たく御出發の時刻も迫つて参りましたので富岡中佐は今のうちに伊藤少佐を御見舞になりました

富岡中佐「何うだ餘りよくないと云ふではないか随分苦痛でしょう……何うも顔色が悪い

此の時伊藤少佐は不潔な小さい朝鮮人家の中で横臥になつて居られました富岡中佐の來られたのを見てシット起きあがり

伊藤少佐「イエ……格別な事も御座いません……

富岡中佐「一體は格別な事ではあるまいけれども併し赤痢と云ふやつは性のよくない病氣だから能く養生せぬと不可ませんぞ

伊藤少佐「有り難たう御座います併しモ二三日も経つたら平癒りましう

富岡中佐「夫りや平癒るに相違ないが併し此の儘行軍しては逆も不可ん今村軍醫も附る積りだから平癒るまで此處に残らるゝが可い

伊藤少佐「残ては残念で御座いますから出發ことは是非出發します

富岡中佐「夫が不可ぬ……夫れだから病氣は平癒らないのだ何も心配するに及ば

富岡中佐
伊藤少佐

んから暫く此處に残つて養生されるが可い

伊藤少佐「イヤ残つては残念で御座います残ては戦争の間に合ひません残るはどならば此の出征軍に加つた甲斐がありません

富岡中佐「夫りや仕方がないではないか病氣だもの……

伊藤少佐「病氣ですけれども此の位の病氣で戦争が出来ないやうでは軍人として面目が御座いません

富岡中佐「そんな馬鹿な事を言ふから困る如何に軍人でも病氣とあれば仕方がないではないか

伊藤少佐「何と仰やつても参ります病氣でも何んでも是非戦争をします戦争をしなれば之れまで來た甲斐がありません

富岡中佐「之れはと言ふのにまだ聽かれぬか成程貴官一身は夫れで可いか知らん……けれども小官は聯隊長として斯る病人の大隊長に一ヶ大隊の指揮を取らせる事は出來ぬ今度の戦争は實に勝敗の岐るゝ戦争である其の大事の戦争に臨んで病人に一ヶ大隊の兵を預げる事は出來ん……貴官は唯だ自分一身の事



ばかり考へて少しも我軍全体の事を考へられぬから困る……其の體で何うして戦争が出来ぬものか……貴官が何んど云ふても小官は命令で此處に残す
伊藤少佐「命令とあれば致し方は御座いませんけれども之れまで来て戦争をする事が出来ない」と云ふは實に……何うぞお察しを願ひます
宮岡中佐「固より察して居ます併しながら斯うなつた上は戦争はまだ今度限りで済むわけはない夫れから先きに幾らも戦争はある……だから此處で暫く養生をして平癒さへすればそんな事は少しも心配するに及ぶまいと思ふ
伊藤少佐「夫れでは少し此處に残つて養生致しませう
伊藤少佐が斯様に残るのを御嫌やがりになりませぬのは固より軍人の意氣地には相違御座いませんが又夫には一ツの深い理由が御座ります何う云ふ理由かと申しますと伊藤少佐は西南戦争の當時陸軍歩兵少尉とかで在つたそうで御座りますけれども其時も病氣の爲に御出陣が出来ず同じ軍人でありながら同僚朋輩の手柄話を他所事に聞かされたのを後々までも武士の恥辱軍人の名折れと無念骨髄に徹するはと御嘆息になつて居りました所が調度今度の戦争と相成今度こそは

と勇み切つて御出征にあつた其の矢先又たも武運目出たからず赤痢と云ふ悪魔に襲はれた此の場合の御心中は果して如何で御座りまするか成程夫れにも構はず進みたいと申さるゝのも至極御尤と申さなければなりません御當人の心中にも或は此の體では戦争は出来ぬと御考へになつて居るかも知れません……けれども戦争が出来ぬか出来ぬか空しく此處に残るのは残念千萬であるから途中で斃れると否とは天運次第假令戦争は出来なくても一度平壤の敵陣なりとも見る事が出来れば空しく此處に残るに勝るイデヤ斃れるまで進んで見んと御決心になつて居つたもので御座いますし富岡隊長から餘りに懇切な御話が御座りましたから夫れでも残らぬと其の上強情をお張りになる事が出来ず残念ながら御残りになる事になつたもので御座いますし流石の伊藤少佐も聯隊長の命令で御座いますから據るなく其の麻嘉里に御残りになりました其の御残りになるに就きまして聯隊長から御付けになりましたのは即ち只今申しました今村一等軍醫と看護手一名兵卒四名外馬丁一名で御座います此の時今村軍醫の御困りになつたのは藥劑の缺乏で御座います戦争に

は多くの負傷者が出来る負傷者が出来るから外科用の藥劑は固より澤山御用意になつて居ります此の内科的の赤痢だとか何だとかに用ゆる藥劑は其の割合に澤山御用意になつて居りませんで御座いました所が既に之れまでの行軍で以て意外に多数の赤痢患者が出来まして此の時は早や其の御用意の藥劑が缺乏致して居るので御座いますソコで今村軍醫は色々工夫を致して不完全ながら御投藥にあつては居りますけれども何様立派な病院などに這入って保養致すのは違ひまして飲食物を始め家屋寢具の類まで不都合だらけで御座いますから伊藤少佐の赤痢は快癒するどころではなく病勢次第に猖獗は極はめ一日數十回の下痢で非常の御衰弱で御座います然るに師團の本隊即ち少佐よりもズツと後方に後れて居られました師團本隊がズン／＼此の麻嘉里を通り抜けて行かれますので少佐は病勢の猖獗なるにも拘はらず之れでは愈々十五日の間に合ふ事は出来ぬ愈々平壤の晴れの戦争に加はる事が出来ぬ嗚呼軍人と生れながら此の不運は何事ぞと胸も張りさげんばかりの思に堪へ兼ね今村軍醫に對はれまして

伊藤少佐「今村君……此の場合になつてオメ／＼此處に残る事は逆ても出来ぬ……」

…是非之れから出發つとしよう……

今村軍醫「何う致しまして……ソンの事が出来ずものか

伊藤少佐「今日は病氣も餘程快いようだから

今村軍醫「イヤ幾ら快くてもまだ……不可けません

伊藤少佐「何に出發つた方が病氣の爲めにはよさうだ斯うして留つて居つては却つて不可い

今村軍醫「不可ません……左様な無理をさせますと病氣は必ず悪くなり……

…小官は御出發ちになる事は御同意申す事は出来ません

伊藤少佐「何に構はん出發つ……構ふものか

今村軍醫「イヤ不可ません……

伊藤少佐「不可んと云ふても出發つ……斯んなにして留つて居られるものか

今村軍醫「聯隊長の命令は御忘れになりましたか貴官は命令で御殘りになつたので御座いますし……小官も命令で貴官の爲めに殘されたので御座います……

…命令を御破りになつてはいけません……又小官は軍醫として貴官の病体

を托せられるので御座いますから御出發ちになる事は小官が許しませぬ
伊藤少佐「ソンの事があるものか……勿論命令で殘されたのだけれども其の時は病氣が悪るかつたから命令で殘されたのだ……最う餘程よいから出發つても不都合はない……小官が出發つのに貴官が許すの許さないと云ふ事があるものか

今村軍醫「ソンの事を云はれては困ります貴官にも不都合ではありませぬか
伊藤少佐「貴官が何と云ふても出發つ……之れから直ぐに出發つ

今村軍醫は猶ほ飽まで御止めになりましたけれども伊藤少佐は何うしても聽か
れません夫れを猶止めましたらば或は自殺でも仕舞まじき御血相が見えますか
ら今は如何ともせん方なく寧ろ其の氣任せにした方がよからんと今村軍醫も御
同意になりまして愈々其の麻裏を御出發になりました而かも馬上で御出發
になりました今村軍醫を始め其の衰弱の体で以て馬に騎らるゝのは無理である
から一時の間に合せに戸板か何かで釣り臺見たやうなものを拵らへ夫れを兵卒
が擔いで參る事に致さうと申しましたけれども苟くも大隊長たるものが戰場に

向ふのにソンの見苦しい事が出来るものと強情を張つて到頭馬上で出發れたので御座いますが無様非常な衰弱で御座いますから腰のしまりが悪く鏡の踏み方にも力が入らず度々の御落馬で以て其の憫と申すものは何とも斯とも形容の出来ないほどで御座います

馬丁「ヤー旦那又たお落ちに……お危険い〜」

伊藤少佐「カ、構はない……何に構はない……」

馬丁「馬は最う御止しになつた方が可う御座います」

伊藤少佐「馬鹿な事を云ふな落ちて又た騎れば同じ事だ」

と強情にも幾たび落ちても御騎りになつて居りましたが餘り度々の御落馬で御座いますから少佐も今は御騎りになりまして

伊藤少佐「馬丁々々斯う落ちては困る……今度は己れの体を此の鞍に縛り付けて呉れ……」

馬丁「縛り付けろと仰つしやれば縛り付けますが……最う馬をお止しになつては如何で御座います」



伊藤少佐「又たソンの事を云ふ……早く縛り付けい……サア縛り付けぬか……
と申されますから馬丁も御主人の申付けで背くわけに参らず麻縄でぐるぐると
其の腰を鞍に縛り付けました縛り付けましたから夫れで落馬の患はなくなりま
したが唯だ困るのは赤痢の爲めに度々下馬をされる一事で御座ります諸君も御
承知の通り赤痢と申す病氣はタツタ今剛に行つて戻つたかと思ふと又た直ぐと
行きたくなり其の大患のなれば病床に寝て居る暇がなく剛の往復で晝夜を過
すと申す位のもので御座いまして此の伊藤少佐の如きも一二丁行つては下痢の
爲めに下馬を致され扱て又た乗馬の時は腰を鞍に縛り付けるので其の繁雜の手
と申すものは誠にお話にならないので御座います

斯様に無理な事をして三日間を費し漸く平壤から五六里手前の松湖と申す所ま
で参られました此の時は愈々病勢が重りまして體力の衰弱は極點に達し流石
強情の少佐も最早一步も御進みになる御氣力がなくなりましてソコで其松湖の
一民家に休んで薬用を致して居られますすけれども此に及では薬も更に効力がな
く頭平壤激戦の當日即ち十五日夕景に御死去になつたので御座います其の死

伊藤少佐
病状

去に相成る最終の際まで故郷に居らるゝ御家族などの事は一言も口にせず唯だ
平壤の戦争に加はる事の出来ないのを残念に思はれまして残念々々と申された
さうで御座います今度の戦争で病死をされた方は澤山で御座います此の伊
藤少佐の御病死となりましては最も悲しむ可き御話で御座います

第五十七回

帥團司令部が沙川まで御進みに相成るに付きまして右側支隊とられた所の富
岡中佐は一先づ達摩山を占領して更に行進を起し十四日の午後五時頃新興洞と
申す所に御着きになりましたが此の朝師團長閣下から新興洞まで進んだら最早
平壤に何程もない事であるから今夜は餘程警戒をして居らねばならぬ余は今夜
沙川まで進むに依て其の爲め十分援護の勢を取るやうにどの御命令があつた位
で御座りますので富岡中佐は此の新興洞にお着になるや否や直ぐと將校斥候
として鶴見歩兵中尉を萬景臺まで御出しに相成りましたが其の夜に及びまして鶴
見中尉の報告に萬景臺附近には一人の敵兵を見ず土人の言ふ所を聞くに敵は一

第五十七回

今田左側支隊

昨十二日來悉く平壤に退却したりと御座ります何時もながら誠に氣樂千萬な敵で御座ります併し平壤までは最早何程もない事で御座りますから富岡中佐は其の萬景臺より五里洞附近の高地に掛けて警戒線を張り又た佐々木歩兵中尉を日和里から飯山街道の長水洞にお出しになつて今田少佐の左側支隊と連絡を取らしめ合せて楊店附近の敵状をお探らせになりましたが其の楊店附近にも更に敵兵が居ないと申す事で御座ります此の今田少佐の左側支隊と申しますのは前にも伺ひました通り廿二聯隊の第三第四兩中隊を今田少佐に附けて保山鎮から江西に出で江西街道から左に横ぎつて飯山街道の長水洞附近にお出しになつたので御座ります

斯様に右側左側の兩支隊を前方にお出しになりまして師團司令部は其の十四日の夜に沙川にお着になつて居りますと云ふと其の夜の十一時頃で御座りましたが大島混成旅團から致して緊要な御手紙が参り致した師團參謀仙波少佐が先づ此のお手紙を御披きに相成り扱て如何なる報告であるかと御讀み下しにありますと全く此の師團長閣下が保山鎮から御出しになりました御手紙の御返事で御

全軍の運

座います即ち其の御返事の中に悉く混成旅團方面の情況並に大島旅團長閣下の御決心を御認めになつて居るので御座ります此の御手紙は混成旅團の方を御話致す時にも伺つたので御座ります其のお手紙の御主意はと申しますと

今十四日正午より又たも砲撃を試みたるが敵は昨日と違ひ僅か三四門の大砲を以て應じたるに過ぎず且つ敵の幕營の數も其の幕營に入する兵數も昨日に比して大に減じたるが如し尤も船橋里附近の橋頭堡には相變らず嚴重の守備をなし居れり此等の狀況よりして考ふる時は敵は或は其の一部を外の方に移したるにはあらざるか只今又朔寧支隊の方向に當て遠雷の如き音を聞く是れ甚だ心配すべき事なり我旅團は豫ての御命令に基き明十五日の早天より船橋里の橋頭堡を攻撃して直接に牽制運動をなさんと欲すれども閣下の師團本隊が明十五日の間に合はず又た他の朔寧元山兩支隊も間に合はざる如き事とならんか我混成旅團獨り苦戦を見るの外なし併し今日までの行掛としては是非共明日を以て本攻撃を行はざる可からず御命令に依れば閣下の師團本隊其の他の支隊が平壤附近に進むまで待たざる可からざれども若し閣下の師團

本隊に先ちて朔寧元山兩支隊が開戦したる時は我混成旅團に於ても小官の獨斷を以て多少の危険を冒し敵の本據を衝くやも測り難し其の理由は朔寧元山の兩支隊は兵力少く兩支隊を合せて歩兵五ヶ大隊砲兵三ヶ中隊工兵一ヶ中隊に過ぎざるを以て我混成旅團と一致せざれば到底苦戦するを免かれざる可し且つ此の兩支隊の如きは別して糧食の用意乏しと聞けば若し苦戦の爲め二三日を経過する間には必ず糧食の困難を見るならん此等の事情あるを以て小官は明早天より先づ船橋里に向て砲撃を始め一つには敵狀を察し又た一つには元山朔寧兩支隊が其の方向より出で来るや否を觀察せんと欲す此の旨然る可く御高察を仰ぐ

と先づ斯様な御手紙と外に今一通御座ります其の御主意は別封閣下の上る報告認め終りたる時朔寧支隊長立見少將より別紙寫の通り報告達えたり朔寧支隊は十三日平壤を距る約六千メートルの國主店に元山支隊は坎北山附近に到着す而して右の兩支隊は包圍攻撃の一致運動をあさん爲め明十五日を待たんとす我混成旅團は半大隊を羊角島附近より敵の右翼に向は

しめ主力を以て船橋里より平壤に攻め入る豫定なり是れ閣下の師團本隊が豫定よりも少しく後れて到着せらるゝ趣なるを以て元山朔寧兩支隊の孤立して苦戦に陥るを顧慮し下官は多少の危険を冒すも平壤攻陥の目的を達せんと決心したればなり右の如くなるを以て師團長閣下は其の本隊の先着部隊を以て我々の戦鬪を援けられんことを希望す

と先づ斯様なわけで師團司令部に取りましては實に大變な御手紙で御座います即ち十二浦の渡河が非常に手間取つた爲め豫定通りの行軍が出来ず従つて十五日の總攻撃の間に合はぬかも知れずと云ふ手紙を保山鎮から御出しにありました其の御返事に斯様な事を申して参つたので御座いますから師團司令部では中々以てシツとして居られる場合は御座いませぬ仙波少佐は之を讀み終つて上田參謀長の御覽に入れ扱て又た之を師團長閣下の御覽に御入れになりませぬ師團長閣下は關度其の時御飯を召し上つて居られました但其朔寧元山兩支隊が既に平壤の間近まで進んで愈々明日の總攻撃をやるに云ふ一段を御覽になるや否や覺えず其の飯碗を投り棄て、

野津師團
長碗を抛
て起つ

「サア行け」
と申して直様御起ちになりました師團長閣下は明十五日の間に合はぬから一日
だけ延べたいと云ふ御考へで御座いましたけれども大島混成旅團が既に平壤の
正面で勇み切つて居らるゝ上に朔寧元山兩支隊も既に豫定の通り平壤の側背に
迫て來られた事が分りました以上は一つの師團本隊が間に合はぬとしても最早
猶豫すべき場合でない猶豫すれば却て我軍の士氣を挫くの恐れあり何んせう師
團本隊一部の運動如何んに拘はつて居らるべきやと其の場で直ぐに御決心にあ
りまして斯様にサア行け」と飯茶碗も何も投り出されたので御座います



師團本隊の戦闘

第五十八回

野津師團長閣下は朔寧元山各枝隊の連絡もつき又大島混成旅團が是非共明十
五日の早朝を以て總攻撃を致したいと云ふ御決心のある事を御聞きになりまし
ては最早一刻の猶豫も出来ません地圖を展開いて御覽になりまして此の師團
本隊が一番後れて居られます大島混成旅團は大同江を隔て、平壤の正面に陣し
朔寧支隊は平壤から六千メートルの國主店に陣取り元山支隊は平壤から二千五
百メートルの坎北山まで進んで居られまして三方共所謂平壤城下に迫つて居
らるゝにも拘らず師團本隊の居られる沙川と申す所はまだ平壤まで三四里ほど
も御座いまして詰り何の方面よりも一番後れて居らるゝので御座いますから野
津師團長閣下はサア行け」と云ひ様午前二時から御出發になりました前衛並に
左側支隊は夫れでもまだ構ひませんが本隊即ち友安中佐の第十二聯隊と砲兵其
他の重なる部隊は此の三日以前から一夜も眠らずに御行進に相成此の時まだ

晝夜兼行
三日に渉

御進みになりまして敵壘から最早四百メートル即ち二百間足らずの所で御進みになつて居りますソコで敵は此の突進の兩中隊を目がけて撃ち出したの撃ち出しませんのと申しましてボン／＼ボンと夫れは／＼熾んに撃ち出したスルと此方では亦た兩中隊一致して屈せず御射撃になりまして頗る激戦の様で御座います此の時野津師團長閣下は山川洞の高地の土から上田參謀長福島中佐仙波少佐上原少佐方を始め師團司令部の各將校を率ひて戦況を御覽になつて居りましたが

師團長「中々熾んにやつて居るが彼れは誰の隊か……十二聯隊の第二大隊と思ふが何の中隊だらうか……」

仙波少佐「彼れは第五中隊と第六中隊で御座います」

師團長「彼れはアンナに進んでは不可んぞ二ヶ中隊位でアー進んだ所が逆でも仕方はない……不可ん／＼彼の壘壘に向て白晝に進む事は出来ん唯だ無暗に進んで死傷者を拵へては不可ん早く退て来るやうに命令しなくてはいけぬと申されますから仙波少佐は上田參謀長と御相談の上直ぐと命令書を書いて傳

騎に持せて御遣りになりました其の命令の御主意は其の隊は今より前進せずして爲し得れば敵の銃砲火の危険界を避け背進して位置す可し

と斯様な御命令で御座いしましたが騎兵は之を受くると直ぐに持つて参りました能美大尉は彈丸雨飛の中で此の命令を御覽になりました花坂大尉と御相談の上退却の號令を下し其の黍畑の中を正堂堂と隊形も亂さず御退却になりました其の隊形の取り方と退却路の撰び方が其の宜しきを得ました爲めに敵は之に向て少しも追撃射撃を行ふ事が出来ませんでした

斯様に兩中隊が皆御退却になりました間もなく平壤外郭の西門即ち舌池門の邊から致して白馬の騎兵約二百騎ばかり其戦闘線を脱して此方に突貫致して來さうな様子が見えますから砲兵第三中隊はヌ／＼と満州騎兵の突貫油断すなと忽ち榴彈を以てズ／＼と御發ち始めになりました野津師團長閣下を始め師團司令部の將校方も此の騎兵を御覽になりました

「ア、騎兵だ／＼……白馬の騎兵だ」

乙「騎兵の突貫か……併し此の地形では突貫して来ても仕方があるまいが……
丙「馬鹿な奴じや此の地形で突貫しても何が出来るものか……何うする積りだ
らう」

丁「ヨシ、来るならば来て見るがよい……」

甲「ア、砲兵が榴弾を發ち出した第三中隊が榴弾を發つて居る……ア見事に命
中するツイ

と双眼鏡で眺めながら斯様に御話になつて居りますと云ふと其の白馬の満州騎
兵が果して一列縦隊となつて駆足で以てタツ／＼と眞霧に乗り出して参り
ました乗り出して参つて飯山街道を指して参ります之を御覽になつて友安中佐
の第二大隊を始め何の御隊でも

「逆襲の騎兵に向ひ急ぎ撃ち掛け——」

の號令が下つたと見る間に何れも其の隊形を取り直してボン／＼／＼と御
撃ち出しになりました……サア斯うなつては堪りません何様歩兵の重なる部
隊が一ツになつて御撃ちになるので御座いますから其の騎兵が我弾丸に中つて

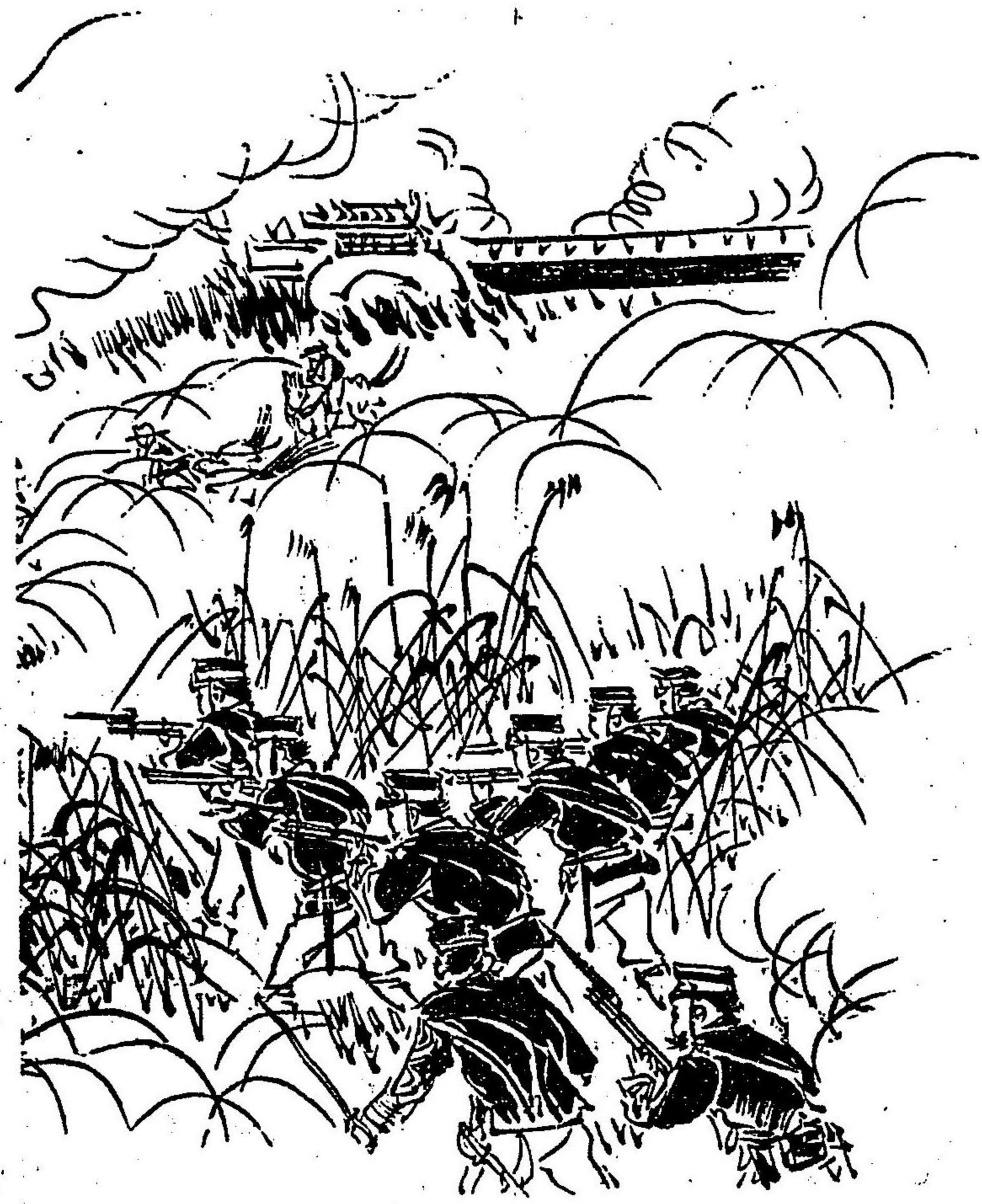
其處にバタリと此處にもバタリと馬上から轉がり落ち轉がり落ちて馬が飛び出
し飛び出した其馬が弾丸に中つて斃れる模様は何とも斯ども申されせん其の
中敵の騎兵は残り少く撃ち斃され其の僅かに生き残つた四五十騎だけが這々の
体で飯山街道を落ち延びますと云ふと豫て斯くわらんと其の方面に御出しにな
つて居りました我騎兵が而かも二十騎の騎兵が小龍山附近に於きまして之に氣
が付き

「サア敵の騎兵が来たゾ」

「静かにしなくてははいけぬ……近づくまで待て」

と將校の注意で其處の黍畑の邊にお待ち伏せになつて居りますと敵は夫れど
は知らずにタツ／＼とやつて参りましたやつで僅か二三十間位の處
まで近づいた時我騎兵は各々其の軍刀を揮り上げアツツと御撃ちかゝりになり
ました敵は之を見て狼狽たの狼狽ないのと申しまして所謂屹驚仰天の体で右
往左往に其の麥畑の中を逃げ出さうと致す所を各々あひせかけて其の軍刀で御
斬りになりまして一人も残らぬはと御殺しになりました此騎兵のお手際と申す

第五十八回



ものは今でも軍人社會で一ツの御話となつて居る位で御座います味方では斯様に逆襲の騎兵を殘らず御殺しになりまして暫時小銃の音も止み何の御隊でも噂の始まつたのは此の騎兵の事で御座います

「ア！愉快であつた……だが今の騎兵は何の爲めに撃つて出たのだらうか無論逆襲して來たのと思ふて居つたが併し何うも様子が變であつた逆襲して來たのならばモ少し何うかやり方がありさうなものであるのに唯だ一列縦隊で飯山街道を指して行つたばかりで味方があれほど發つのにサツパリ抵抗する風も無い……最初から逆襲の積りならばモ少し何うかやりさうなものに……何うも變だ自然園を衝て逃げる積りではなかつたらうか……」

「左うだ何うも變だ何れソんな事だらう
と何處も此處も味方では其のお噂で御座います敵は何の方面も我軍の攻撃が熾んで此の時既に士氣が沮喪しかつて居りまして此の騎兵等も固より圍を衝いて逃げるのであつたので御座いますけれども師團本隊は唯今方戦をお始めになつたばかりで又た外の方面の模様は少しも分りませんからまだ中々圍を衝いて

逃げるなど云ふ御想像はつさせません併し餘り其の様子が可笑しう御座いますから自然逃げるのではあるまいかと半信半疑の御想像で唯今申しました通りの御噂があつて居るので御座います其の中又だしても白馬の騎兵が以前の方角から撃つて出さうな様子が見えますソコで師團長閣下は我軍の配備を善くする爲め第廿一聯隊の松本大隊に漆峴の高地を占領してシツカリ其の方面を固めて置くやうに御命令になりましたから松本少佐は直ぐと其の大隊を率ひて其の方に御出でにあり大隊の先頭が漸う漆峴の高地にお着になりました時に果して又た白馬の騎兵約そ五六百はとも以前の通り一列縦隊となつてタツと疾風の如くやつて參りましたやつて參りまして其の大部隊は飯山街道を指し其小部隊は江西街道を指して參りますソコで砲兵第三中隊が又榴彈を御發ちになりますと其の榴彈が見事に命中致し見る間に敵はバラバラとなりました其のバラバラとなつた所を件の松本大隊を始め何のお隊でも急射撃を御始めになり就中安友中佐の第二大隊は黍畑の中から之を御射撃ちになつて居りましたが其の中でも第五中隊第六中隊第七中隊が格別御奮戦になりましたして其側面から突貫を行

三五四
以到頭之を踏みつゝして數多の敵を殺し三人は御生擒になりました此の時一段目覺しく御働になつたのが杉浦聯隊副官莊司少尉淺見少尉で御座います斯様に我砲兵歩兵のお力で其の五六百の敵を殆んど一人も残らず御殺しになりましたたのは又た外の方面にない爽快のお話で御座います其の後午前の八九時頃でも御座いましたか敵の歩兵が又た大同江の右岸に沿ふて竊かに逃れ出て西の方を指して走るのが見えました即ち我第三中隊の砲兵陣地から能く其の様子が覚えて居りますソコ砲兵中隊は榴彈を以てすかさず之をお發ちになり卑怯の敵は所謂倉皇狼狽して隊伍を亂し其附近の沼澤の腹葎に身を隠して漸うく逃げて仕舞ひましたが生憎にも此の時我歩兵の居られまする所は此處とは大變隔つて居りました少しも此の事を御存じがなく唯だ砲兵の砲撃で以て之をおどかしたばかりで有つたのは返すくも残念千萬の事で御座います斯くて其の後今一度敵の馬隊が少々撃て出ましたけれども同じく我歩兵の爲めに撃ちとめられ夫れより後は敵の銃聲砲聲全く止んで仕舞ひました自然の中に休戦の姿と相成ました野津師團長閣下は此の間に於て砲兵大隊長山内

少佐に其の大隊は左側支隊即ち今田少佐の陣地ヨタクマルクの高地に陣して平壤の中部を砲撃するやうにどの命令をお下しに相成又た松本大隊の第二中隊即ち落合大尉の中隊に成る可く危険を犯さずして舌池門附近の敵狀を偵察すべしとの命令をお下しに相成ました斯様に命令が下りますと山内少佐は直ぐに其の砲兵を率ひてヨタクマルクに向はれ又た落合大尉は舌池門を指して御出でになりました落合大尉午後一時頃歸つて敵狀を報告されますには「敵兵猶ほ其の陣地に在りて動かさず且つ彼の射撃の爲めに十分前進すること能はざりしも併し更に損害を受くる事なく背進したりと御座ります左すれば敵は猶ほ頑固に其の陣地を防禦して居るに相違なく左うして又た元山朔寧支隊の方も正面の大嶋混成旅團の方も既に砲聲が休んで仕舞ひまして今ごろ何う云ふ事になつて居りますかサツパリ分りません併し敵が猶ほ頑固に其の陣地を防禦して居るのに我各方面の砲聲が休んだ所から考へれば今日は到頭攻撃の効を奏さなかつたのであるか左すれば獨り我方面は何う致したら可いか之れから直ぐに師團本隊の全力を擧げて一ツムツ付かつて見るか

或は今少し機會を見て攻撃するかと云ふ事に就て此處に師團の参謀會議が始まりました即ち漆峴の高地に於て上田参謀長福島中佐仙波参謀上原少佐等の各將校が師團長閣下の御面前に於て色々御意見を御述べになりまして其の末結局晝の攻撃を中止し今夜々半時分から夜襲を行ふと云ふ事にお極めになりました何せ晝の攻撃を中止して夜襲をするに云ふ事にお極めになつたかと申しますと此の方面の地形上晝の攻撃は極めて不利益であると申すので御座います何せ地形上不利益であるかと申せば敵の陣地は七星門より舌池門の方に掛て一面の城壁を周し夫れに又其小高い所に堅固な土壘が築て御座います其上其城壁の下まで參る途中に普通江と申す巾三四十間の河があつて大同江から潮が差こみ干潮の時でなければ徒渉が出来ないのでみならず潮干の時でも底一面深い泥で御座いますから中々うかどは涉れないので御座います斯様のわけであるのに持て来て其の前面即ち味方の進路となる場所は全く平面の黍畑で御座いますから晝に進撃をした日には先づ此の黍畑で敵の射撃を受け又普通江を涉る時分に大損害を被りさうして其の城壁其の堡壘に攀ぢ登る時に如何なる損害を被るか分ら

ないので御座います斯様な損害を覺悟し斯様な危険を犯して晝に攻撃するのは兵家の取らない所で……宜しく今夜々陰に乗じて敵に悟られざるが如く普通江をも涉つて城壁の堡壘に突貫し一舉に之を陥れるのが兵器の上々なるものであると云ふので以て愈今夜々襲と云ふ事にお極めに相成つたので御座います斯様にお極めに相成つて夫れから一應各隊の位置を定め又た前哨を配布してお居でになりますと調度其の時分に一天かき曇つて大雷雨と相成ました大雷雨となつて各隊共皆頭からビシヨ濡で御座いますけれども無論何とも致方が御座いません師團長閣下は其の司令部の各將校を率ひ漆峴の民家にお遣入りになつて居りましたが閣下は此の日の攻撃が思ふやうに參らぬや何かのことで流石沈着の御氣性でも少々不興の御様子で御座います其上平素がお酒すきで御座いますから

師團長 「オイ……副官……通辯に左う云ひ付けて焼酎を少し心配させぬか
副官 「ハイ……焼酎で御座いますか
師團長 「左うだ……少し焼酎でも飲んで見たい

副官「宜しう御座います左う申して見ましよう

副官は師團長の命令を奉じて通辯に此の事をお申付けに相成通辯は又た此の漆
峴の民家に入つて兩三軒も相談致して見ましたけれども何處も皆焼酎はないと
申しますから其の趣を師團長閣下に復命に及ばれますと

師團長「焼酎はないと云ふか

通辯「兩三軒左う申して見ましたけれども何處もないと申します

師團長「無ければ其の有る所から持つて来るやうに朝鮮人に言付けるがよい

通辯「左様で御座います併し云ひ付けましても矢張ない」と申して中々周旋
致しません

師團長「何んだ周旋せぬ……朝鮮の獨立の爲めに斯んなに戦争までして居るで
はないか……夫れに焼酎を周旋せぬと云ふ事があるか

と御叱りになりました朝鮮の獨立に焼酎の周旋とは餘り安値すぎたお話を御座
います其の場合と師團長の御氣性が此のお話で以て想像致されます……夫れ
は兎に角お叱を受けた通辯は其の事を嚴重にお申し付けになりますと何處で探

し出しましたかチヨツと二三升の焼酎を朝鮮人が持つて参りましたソコで師團
長閣下は其の焼酎を飲みながら其處に友安富岡の兩聯隊長をお召しになりますし
て今夜々襲の事を御傳へに相成且つ

「今夜の夜襲で平壤が取れなかつたらば野津道貫は屍を此の山に埋むる決心ぢ
や
と凜として其の御決心を御示しになりました

第五十九回

野津師團長閣下は猶ほも司令部の將校方と焼酎を傾けながら如何なる事があつ
ても今夜の夜襲では是非平壤を陥れなければ師團司令部たるの職分が相立たぬ
加之ならず若し戦が手間取つて二日も三日も掛るやうな事になる時は第一糧食
が盡きて其の爲め意外の挫折を來すは必定なりと益々御心痛の折柄獨立騎兵の
方で元山支隊に御出しになりました斥候が歸つて來られました
元山支隊は今朝敵の堡壘三個を奪取して箕子廟に肉迫し居れり

杉山中尉
使命を全
るふして還

と報告致されました其の爲め始めて元山支隊の戦況が少しは分りまして師團長閣下も稍々御安心の体で御座います夫れから又約そ一時間ばかりも経ちまして杉山歩兵中尉が元山支隊の方面から歸つて参られまして其方面の戦況を報告に及ばれました杉山中尉は此の日の午後二時頃師團の命令に依り撰抜兵十五名を率ひて元山支隊に斥候に参られたので御座いました……此の事は朔寧支隊の時にも御話申しました通り元山支隊長佐藤大佐の所在を見出す事か出来ず恰も敵が降旗を擧げた時分に立見少將に逢ふて委細師團閣下の旨を傳へ又立見少將よりの旨を承けて調度午後の五時頃歸途に就かれ幾多の困難を犯して唯今此の師團長の處に歸つて來られたので御座います歸へつて來られて中尉の姿が見えますと師團參謀仙波少佐が先づ御氣がつきまして

仙波少佐「ヤ、杉山中尉か」

杉山中尉「唯今歸つて参りました」

仙波少佐「ヤ如何に苦勞でした」

杉山中尉「何うも途中が色々困難で其の爲め大變晩そくなりました」

仙波少佐「何うだ……元山支隊の状況は……閣下々々杉山中尉が歸つて参りました」

師團長「杉山中尉が歸つて來た……ホ——何うだ元山支隊の方は」

杉山中尉「一禮ありて」

杉山中尉「ハイ敵は降旗を揚げました」

師團長「エー敵が降旗を揚げた云ふのか」

杉山中尉「降旗を揚げました……七八本白旗を揚げました……小官は現在夫れを見て参りました調度小官が行つた時に揚げました」

師團長「ホ——左うか……降旗を揚げたかホ——……ソコで元山支隊は今何うして居るのか」

杉山中尉「御手紙を持つて先づ元山支隊の陣地に参りました所が佐藤大佐殿の居られる所がサツパリ分りませんから其處此處と尋ねて居るうち或る士官の手に元山支隊も立見閣下の指揮の下に在るのだから其の手紙は立見閣下の處に持つて行つては何うだと申しますから朔寧支隊の方を持つて参りますと其の

途中で立見閣下にお目にかゝりましたお目にかゝつて其のわけを申して御手紙を出しますと云ふと閣下は之を披いて御覽になりまして敵は中尉の見らるゝ通り降旗を擧げた余は兩支隊を率て之れから平壤に入らうとする所だ中尉は此の事並に又た中尉が自ら見る所の状況の委細師團長閣下に復命せられよと申して其の儘平壤の門内指して参られました

師團長「ホ——其うか夫れは旨くやつた……イヤ實に御苦勞であつた……ホ——左うか夫れはく……」

と申して非常に御喜悅に相成り直ぐ襟其の傍に在る燒酎の茶碗を出して

師團長「サア一杯献さう」

杉山中尉「イヤ有難たう御座います」

と云ふて其の茶碗を受けられました仙波少佐傍らより燒酎徳利を取つてつがらとされますと師團長不興の体で

師團長「イヤ……己れがつく」

と云ひながら自ら其の徳利を取りあげて御つぎになりました杉山中尉太く師

團長の士を待たるゝの厚さに感じ之を飲んで居られますと

師團長「杉山中尉……其の杯……イヤ其の茶碗を己れに献すのだ」

と申されますから杉山中尉は恭しく其の茶碗を師團長閣下に献じ懸がてお暇を告げて自分の隊にお歸りになりました

以上二ツの報告は師團司令部に取まして誠に有益な報告で御座いましたか唯だ不思議なるのは此の時味方の前哨線から各隊の陣地に掛けて頻りと銃聲の聞えるので御座います杉山中尉の報告に敵は既に朔寧元山兩支隊の方面に向て降旗を揚げ立見少將は兩支隊を率ひて平壤城に入られたりとあるにも拘はらず頻に銃聲の聞えるのは何う云ふものであるか假令へ降旗を揚げたにもせよ詐り多き支那兵の事であるから再び反覆して抵抗を始めたと相違ないと師團長閣下を始め參謀方も皆斯様に御想像に相成午後九時に至て愈々夜襲の師團命令を御下しになりました其命令の概要を伺ひまするに

師團は明午前三時を期し普通門及び義州門に向ひ強力なる夜襲を試んどす歩兵第十二聯隊は現時の警戒線内に一部隊を残し置き其餘を以て義州門に

向ひ前進す可し
歩兵第廿二聯隊は同じく一部を以て江西街道を警戒し自餘の部隊を以て普通門に向ひ前進す可し
砲兵第二大隊は拂曉よりヨタルマルクに陣地を占め余の攻撃と元山朔寧兩支隊を援助す可し

左側今田支隊は其の位地に在りて砲兵を護衛し且つ余の攻撃を援助す可し
余は歩兵第十一聯隊の第三大隊を以て第廿二聯隊に後繼せんとす
と先づ斯様な御主意で御座いしましたが前哨線や各隊の陣地に於ける銃聲は猶ほも其處此處にボン〜と鳴つて居ります其中意外なるのは元山支隊の方に當りて俄に激しく鳴り出しまして實に激戦の様と見えて居ります

師團長「これはひどい銃聲だ……」

山波少佐「降旗を揚げたのは愈々詐りで御座いましたな」

扱元山支隊の銃聲は兎に角此の師團本隊の前哨線から各隊の陣地に掛けて頻りに銃聲の聞えて居るのは如何なるわけかと申しますと日暮の雷雨から致して一

天かき曇り四邊暗夜となつたるに乗じ卑怯の敵兵がひまぐ我前哨線をくいつて逃げ出しましたから味方で之を狙撃して居らるゝので御座います
扱其の狙撃の様を申上するが敵は日の暮れると間もなく思ひ〜に逃げ出したので御座います即ち其の黍畑づたひに味方の前哨線をくいつて逃げ出したので御座います其の時歩兵第十二聯隊即ち友安中佐の聯隊で淺見莊司の兩少尉に各一ヶ小隊づゝの兵を付けて前後兩度に斥候にお出しになりましたと云ふと調度此方を指して逃げて參る敵の群勢にお出會になりました夜が暗くて能くは分りませんけれども何かガヤ〜と騒ぎながら此方を指して參るのが見えます

甲「来た〜……ソラ来た」

乙「黙つて居れ〜……来た〜」

莊司少尉「サア着け劍……氣を着け——」

と云ひながら警戒を加へてお進みよ相成ると果して黍畑の畹で敵の一群に衝突かりました莊司少尉の一隊は直ぐにボン〜とお射撃に相成間もなく少尉の突ッ込み——の號令でヤ——と御突込みに相成りますと云ふと固より平壤の守

を棄て、逃げに掛つた位の敵で御座いますから非常に愕きましてバラバラと散りました味方はソコに付け込み當るを嫌はず銃剣で御突き殺しに相成莊司少尉は軍刀で以て幾人と云ふ事なく御斬殺しになりました然るに猶ほ前方の模様を窺ひますれば幾群と云ふことなく此方を指してやつて参りそうに見えますから莊司少尉はト先づ引き返して其の事を報告せんと唯今斬殺した敵兵の小銃彈藥など奪ふて聯隊長の處にお歸りになりましたスルと果して其の前後から敵兵が幾群となく前哨線をくいつて逃げて参りますソコで友安聯隊も富岡聯隊も亦た今田支隊も思ひくゝに射撃をお始めになりました即ち其の警戒線の前方にバサ／＼と音が致す其の音をたよりにソラ來たと云ひ様ボン／＼とお射撃になりますます其の時のお話の一つ記憶致して置かねばならぬのは前々から度々伺ひますやうに此の師團本隊は何のお隊も長きは四日短きも三日間の間晝夜兼行の行軍で兵士諸君が一眠もせず居られるのに持つて來て此の日の戦争と此の日暮の大夕立に頭からビシヨ濡れとなつて最早精神も身體も疲れ切つて居るので御座いますからソラ來たと云ふ時には皆ボン／＼ボン／＼とお射撃になります

れども其のお射撃になつて仕舞つた後とは小銃を持ちながら皆々グウ／＼グウ／＼とお眠りになります將校のお方が眠つてはいけぬとお叱りにありますけれども中々お叱りにあつた位の事では致方が御座いませぬ唯だソラ來た……ソラ敵が來たと云ふ聲ではお目が覺めて直ぐにボン／＼とお射撃になりすすけれども其の後とは矢張り同じ事で御座いますおさんせんが行燈の下で居眠致すのとは違ひまして三日も四日も重量の小銃彈藥携帶行糧などを背負ひながら一眠もせず歩いた結果は實際此の通りになるもので御座います此の辛さ加減と申ものは實地の戦争に出たお方でなければ分らぬもので御座います斯様に警戒を加へながら各其の陣地で逃げ出る敵兵を御射撃になつて居りました其の中時刻も段々移りまして應が夜襲の時刻と相成ました即ち師團命令の通り富岡聯隊は普通門を指し友安聯隊は義州門を指し二縦隊を形つて各午前一時に其の陣地を御出發になりました富岡聯隊長は其の陣地を出發れます時に隊の區分を定め田邊玉内鶴見の三中尉に撰抜兵四十八名を付けて尖兵となし他の第一中隊を百山の守備に任じ第二第九第十第十一第十二の五ヶ中隊を其の

後に繼て進み事とお極めになりましたお極めになつて尖兵の將校田邊玉内鶴見の三中尉をお召しになつて

富岡隊長「貴官方を尖兵としたからは一ツ十分やつて呉れぬとやらぬぞ

田邊中尉「勿論誓つて此の任務を盡す積りで御座います

富岡隊長「地形が悪い爲め晝の攻撃が思ふやうに出来なかつたから此の夜襲と極つたのだ……此の夜襲で一舉に目的を達しないと云ふと師團は兎に角第一我が此の聯隊旗に對して相濟まぬ……

三中尉「實に仰せの通りで御座います

富岡隊長「ソコで能く貴官方に命じて置くのは此の地圖にもある通り此の普通江を渉るのが一ツの困難だ……だから歩兵は先づ普通江を偵察して左うして前進するのだ……其の間後續部隊は手前の藪の中に伏せて愈々別條がないと云ふ所を進む事にする……夫れから尖兵は一切射撃を禁じ總て銃劍を以て敵に對するのだ……後續部隊は銃劍を着けぬ

三中尉「宜しう御座います必ず此の任務を遂げますから御安心を願ひます

ソコで以て三中尉先づ銃劍を着けたる四十八名の撰抜兵を率ひて眞ッ先きに御進みに相成り他の諸隊は之に繼て黍畑の間をお進みになりましたが尖兵が漸う普通江の邊までお出になつた時早や敵兵にブツ付かりました此の敵は即ち城内から逃げ出で、来た奴ツで御座いますけれども味方では夫れが能く分りませず敵の方から撃つて出でた事と考へられましてソラ敵だと云ひさす尖兵の四十八名が銃劍を以て突ツかゝり其の勢で以て進ませましたもので御座いますから聯隊長は其の本隊を藪の中に伏せる暇もなく又た必要もなく尖兵本隊共片ツ端から敵兵をハリ倒し直ちに普通門に迫られました味方のお考では勿論門が閉ぢてある筈で御座いましたけれども何う云ふものか門の扉が開て居りますソコで味方は其の儘門内に突貫して其處らにまごついて居る敵兵を壓殺に致し其の勢で以て更には平憲門までお迫りになりました所が此の平憲門は普通門と違ひ固く扉が鎖して御座りまして中々押した位の事では開きません弱い兵ならば其の爲め其處に躊躇ふかも知れませんが流石は日本兵の事で將校の命令を待たず各々先を争ふて其の横手の石垣を攀ぢ登り門内に飛び下りて直ちに門を

友安聯隊
義州門に
闖入す

開きました其の爲
め敵は朱雀門の方
を指して逃げ亡せ
ました又た友安聯
隊も其處らにまご
ついて居る敵兵を
ハリ倒しながら直
ちに義州門をお取
りになりました然
るに何うも敵兵が
格別の抵抗も致さ
ず何奴も斯奴も逃
げ腰で御座います
から友安聯隊長は



其の逃げて行く奴
ツを撃ちとめるに
は漆峴の陣地の方
が却て肝腎と御考
へに相成り獨断で
以て其の第三大隊
即ち岡見少佐の大
隊を義州門に残し
其の餘の隊を率ひ
て直ぐに漆峴にお
引きがへしになり
ました富岡聯隊長
も矢張り申合せた
るが如く前夜の陣

